

逗子市文化財調査報告書

第 一 集

神 武 寺

逗子市教育委員会



逗子市文化財調査報告書

第一集

神 武 寺

逗子市教育委員会

目 次

刊行に当って	小川重太郎	1
神武寺の歴史		3
神武寺薬師堂の建築		10
絵 画		17
彫 刻		22
古 文 書		36
考 古		50
神武寺親王やぐら		59
神武寺庫裏後方の宝篋印塔		60
神武寺みろく窟		60
神武寺こんぴら山やぐら群		68
神武寺の古位牌		76
雲形位牌の編年試案		77
神武寺の植生		86
あ と が き		119

刊 行 に 当 っ て

逗子市教育委員会教育長

小 川 重 太 郎

近時、科学のめざましい発達に伴い、企業は益々機械化され、しかも数量的処理はコンピューターの出現により一大変革をあらわすに到りました。そして国民生活は日々豊さを増す方向にあることは、よろこばしい限りであります。しかしながら、その反面近代化の進行には、産業公害、交通問題、住宅問題等、幾多の社会問題をもたらしていることも事実でありましょう。とりわけ人口の流動による過密過疎現象に対する対策は、今後益々深刻にならざるを得ないものと思います。

都市化の波を、いやが上にも受けなければならない神奈川県的事情は、そのまま逗子市にも適合するわけでありまして、土地利用開発の進捗はここ数年とみにめざましく、緑の山と、青き海に包まれた景勝の地逗子は、いつまで保ちこらえることでしょう。

こうした変貌の著しい時期にこそ、次の世代のために是非保護し保存しなければならないものの一つにあげられるのが、地域の文化財なのであります。この文化財保護のためには、先ず地域の人々にその貴重な存在と意義を充分認識していただく必要があると思います。以上のような意味あいでは、このたび文化財調査報告書の第一集を刊行するはこびになりました。内容は神武寺の文化財について、歴史上、文化史上、また植物学上、いろいろの角度から過去現在を分析し、解明につとめたものであります。この報告書が市内は勿論、県下社会教育の資料として皆様の研究活動の一助となれば幸いです。

おわりに、この報告書を刊行するにあたり、文化財保護委員各位をはじめ、種々協力いただいた関係各位に心から御礼申し上げて刊行のことばといたします。

神 武 寺 の 歴 史

三 山 進

(1) 古代の神武寺.....	4
(2) 中世の神武寺.....	6
(3) 近世の神武寺.....	8

神 武 寺 の 歴 史

医王山来迎院神武寺は天台宗、逗子市沼間、鷹取山登山路の中途の山間に建つ。新編相模国風土記稿(以下、風土記と略称)は、

「境内総て石山なり、其山間を穿ち平げて堂宇を建つ、山麓に総門あり、本堂に至る迄凡五町、其道屈曲して甚峻岨なり」

と記すが、この描写は現在もあてはまる。逗子市内ではもちろん、関東でも比較的由緒の古い名刹であり、自然環境もよく保たれ、山岳寺院の面影を十分とどめている。しかし、たびたびの火災で文書・什宝などの多くが滅び、明確に寺史をたどることはむづかしい。とくに中世以前については、史料がきわめてとぼしい。そのため、ここでは相模国三浦郡神武寺縁起(以下、縁起と略称)・吾妻鏡あるいは神武寺蔵の略年代記・棟札などを中心に、いくぶんの推察をもまじえながら、簡単に寺史をたどってみる。

(1) 古代の神武寺

創建された年代および事情について、縁起はつぎのように語る。

「(前略)神武元年甲子正月十二日の夜、奈良の帝の御夢に朝日に向いたびて東の空を観覧しましたるに、妙なる雲の中に金色の宝塔見えわたり、異香赫かくとして、御戸帳開けたる内より、青衣を著したぶ童女あまた出たびて玉の簾をかかげたべば、医王善逝の御姿顕れたびて告たまはく、我は未だ衆生済度の縁扶桑に尽されば、法性の都に還らず、敏火山の御陵を府の嶽に移してすまむ。山はそれ熊野の三の峯に異ならずとて御夢は覚めたびぬ。

叡慮あやしく思ひ、行基菩薩に尋ねたぶに、行基謹んでのたまはく、御陵は世にしろしめさるる所なり、至れるかな(中略)天業伝へて千有余才久遠無数の方便併ら薬師如来にてまします也と答申されければ、速に勧請あるべき由宣下ましますにより、急ぎ行基菩薩此山に分入って、先づ一字の草堂を結び、大誓願を發して云、伏乞某沙門不敏なりといへども末代衆生のため、頻に生身の薬師如来を拝し奉らばやとて、深く称名観念の窓の前に向ひたべば、遙かなる峯に一陣の風起りて寥々と物すごき折から、かたはらなる沢辺の大地破れて東の山の端に、十一面観音の尊像明らかに拝せたまふぞ不思議なるかな、足白の鷹に召さるる故、鷹が嶽と云ふ、地のさけたるを湧出々沢と号すとかや、或は無遙瑠璃光如来と顯れ、種々の知遇をなし、三世の利生浅からずとて、速に当山を闢き、東の宮を本宮と定め、御本地十一面観世音御丈三尺余寸之由、秘仏也、御垂迹は日本盤彦尊の御霊、北の峯を那智山となして御本地は釈迦如来御丈二尺余寸之由、秘仏也、御垂迹は速玉男神の御霊、南の峯を新宮と称して、御本地薬師如来御丈二尺五寸之由、座像三十三年目に開帳あり、御垂迹は伊弉冉尊の御霊を崇め奉り、行基菩薩一刀三礼の像を彫刻したびて三所に安置し、命に應じて医王山神武寺と号す、是即ち当寺の草創也」(引用は逗子市誌所載のものによる。以下同)

文意がはっきりととらえられない箇所もあるが、奈良時代の神亀元年(724)、聖武天皇(701~756)が霊夢を見、命をうけた行基(668~749)がこの地に下向し、十一面観音・釈迦如来・薬師如来の三尊の像をまつたのがおこりだというわけである。

この縁起は文禄3年(1594)の奥書をもち、編集されたのはさして古い頃ではない。いわゆる縁起を文字通り信じることは、無論危険である。関東地方でも草創を行基に結びつける古刹は多く、聖武帝の霊夢・行基・薬師如来の三要素から成る縁起にしても、たとえば川崎市影向寺の例のように、他でもみられる。そして、神武寺が8世紀も早い時期に開かれたことを裏づける具体的な資料も、現在までのところ発見されていない。しかし、最初からまとまった伽藍を備えはしなかったろうが、神武寺草創はかなり古い時代だったのではないと思われる。

奈良時代、いまの逗子市全域は鎌倉郡沼浜郷とよばれていた。(風土記は、ヌマハマのハがいつしかぬけてヌママとなり、字も沼間に変わったのであろうと推測している。郡界も変化し、沼浜郷のごく一部に沼間の地名が残ったのだらう) この郷の名は早く天平勝宝元年(749)の正倉院御物古裂銘に、

「相模国鎌倉郡沼浜郷戸主大伴部広磨(下略)」と記されている。(裂は税として大和の朝廷に運ばれたものである)ある程度の集落があったことはうかがえる。もちろん、この銘だけではどの程度の文化が根づいていたか、推察する手がかりも得られないが、奈良時代にはすでに相模国分寺も建ち、三浦半島でも宗元寺(現横須賀市曹源寺)のような相当な大寺院が末期には開かれていた。赤星直忠氏「相模宗元寺址」史蹟名勝天然記念物調査報告書第3集。こうした寺々の建つ土地に挟まれた沼浜郷にも、なんらかの仏教文化が流入していたにちがいない。そして、神武寺の歴史の出発点をも当代にもとめて大過はないだろう。ただ、当初から一寺院だったのではなく、ごく素朴な形からしだいに育っていったのではなかろうか。

縁起は草創譚のあと、山麓の南沢とよぶ大沼に、7つの頭に角のはえた毒蛇が住みつき人びとを悩ましていたことをきいた行基が、それは怨霊であろうといって諏訪明神をまつて鎮めた、という話を記す。これとほとんどおなじ趣きの話が、やはり市内沼間の正覚寺縁起にもみられる。すなわち、聖武帝の時代、行基が十一面観音を造立して大蛇を平げ、大蛇を諏訪社に、観音像を善応寺にそれぞれまつた云々というのである(像はのち正覚寺に移る。同寺は今廃。縁起は法勝寺蔵)。

これらの伝説を通し、かつて山麓が沼沢地であったことが推定できるが、さらに一步すすめて、仏教が定着する以前、当地では一種の竜神信仰がおこなわれ、同時に鷹取山を神聖視する山岳信仰のようなものもあったのではないかと想像したい。いずれが先に発生したかは、もちろん定かではないが――。そして、この原始的な信仰に熊野修験と天台宗とが加わり、寺院の形をとるにいたったのかもしれないのである。

熊野三山信仰が初期神武寺に反映していることは、先に引いた縁起にも明らかである。

(東	本宮	十一面観音	日本盤彦尊
北	那智	釈迦如来	速玉男神
南	新宮	薬師如来	伊弉冉尊

縁起に示すこの本地仏と垂迹神との関係は、ごくふつうにいわれているものと異なるが、縁起編集時

の混乱した知識のせいであろうか)

熊野信仰の発生はきわめて古いが、その勢力が急速に増大したのは9世紀半ば、山岳仏教の隆盛にもなう密教徒の活動がさかんになる頃という 村山修一氏「神仏習合思潮」。その以前から諸国の山々を行脚して修行をつづけた熊野修験者たちは、一層活発な動きを示すようになり、その足跡は各地で跡づけられる。

この熊野信仰と天台との結びつきは、平安時代に熊野三山の教権をいわゆる三山検校にゆづったことから密接になる。検校には天台僧が多く、のちには天台系法親王の聖護院門跡が独占するにいたるのである 五来重氏「熊野詣」。

神武寺の場合、もちろん十分な資料が残るわけではない。が、縁起は、

「是によりて其後は代々の御門の御祈願所と成り親王摂家尊敬の霊場なり。(中略)。中にも文徳天皇の御宇天安元年丁丑の頃、兵革国々に烽起し、所々の御修法ひまなし、叡山第貳の座主慈覚大師に詔をなし当山に於て不怠の御祈禱あり、御願成就のしるしとて七堂伽藍并九十九所の王子の御社まで善美をつくし、其外廃れるを起し建立したび、前に某沙門の彫る本宮の十一面の像、那智山の釈迦如来の像、破壊ましましし故自古に準じて一刀三礼して新に彫刻したび安置せられ、山中殊に静浄の地を択びて日吉大権現の御社を立てたびて、永く当寺の鎮守と崇め数多の社殿を寄附したび、加之重ねて詔命を蒙りて本基の法相宗を改め天台宗と改めたぶ」

とつづけ、天台宗との結びつきを詳述する。慈覚大師円仁(794~864)は天台座主第3世であり、下野国(栃木県)の人。東北地方には大師の開いたと伝える寺が多く、出羽立石寺で死去したという伝えもある。東国との関係は深かったが、統群書類従本慈覚大師伝によれば、弘仁7年(816)に関東へ下向しているものの、天安元年(857)の下向は明確でない。現在神武寺では大師を中興開山とするが、縁起の記述をそのまま信じるのはむづかしい。が、天台宗は開宗以来、東国への布教にはきわめて積極的で、最澄自身も足を運んでいる。また、第2世円澄が武蔵国埼玉、第7世猷憲が下野国といったように、慈覚大師以外にも初期の座主には関東出身者が多かった。こうした関東への浸透の時期に、天台の高僧が当地に足をとどめ、神武寺の整備に力をつくすようになったのだと想像しても、さして不自然ではないだろう。

結局、縁起を手がかりに推測を重ねてゆくほか、神武寺の成立の歴史をたどることができないが、つぎの鎌倉時代にはいと確実な史料が伝わる。

(2) 中世の神武寺

まず鎌倉時代の当寺について縁起は、

「寿永二年癸卯將軍頼朝公御参詣ありて平家追討の為に御建立、殊更に十二寺院を営みて常法善三昧の道場となし、高雄の文覚聖人を住持と定められ、行基より三十八代に当り、法華読誦の筵には七宝の花咲き五逆の衆輩積善の士相友に祈願を成就し、翌元暦の始正月九日三十余町南田越の浦浜に山王権現の御社を建て御旅所として始めて神輿を渡し祭礼の式厳重なり、三浦の一門并氏人等祭賀として数千貫の所領を神領に寄捨し、其外法華三昧の供養料と定められ、建保六年戊寅同將軍実朝公右大臣に任じた

ぶ御賀として修理を加へ、寺務山林以下右大将家の例に可任之旨御令旨を玉はり、常光院の御宇正慶元年^{壬申} 伽藍及其外小破故御修復御府崇高院の御宇観応元年^{庚寅} 御建立御座し鎌倉の宝戒寺の第二代慈源和尚を住侶となされ、円観上人の御弟子円頓戒の祖師俗姓は高氏公の第三男也（後略）」

と記す。かなり具体的であり、掘りどころとなる文書あるいは伝称があったのであろうが、確実な記録としては、吾妻鏡承元3年(1209)5月15日条の、

「御^ガ参神^ニ嵩并岩殿観音堂。(後略)」

という記事がいちばん古い。実朝が神嵩すなわち神武寺と岩殿寺に詣でたことを録したものである。ただ、これより先の建久3年(1192)8月9日、頼朝夫人政子の御産加持のために相模国神社仏寺に神馬を奉じ、誦経を修せしめているが、その時えらばれた27の社寺の中に「寺務寺」がみえる。吾妻鏡でこの寺名が登場するのはこの箇所だけであるが、「ジムジ」は「ジヌムジ」=神武寺をさすのではなからうか。もしそうとすれば、鎌倉初期、神武寺は相模を代表する名刹のひとつとみなされていたわけである。

ともあれ、源氏が神武寺を尊崇し、保護をも加えていたことは明らかといえよう。なお、頼朝の父義朝の邸も、かつては沼浜にあったという^{吾妻鏡建仁2. 2. 29。}

また、鎌倉時代の神武寺を考える上に重要な史料として、境内墓地のやぐら内に安置された石造弥勒菩薩像がある。詳しくは赤星直忠氏の別掲報告にゆずるが、正応3年(1290)銘のこの像は、鎌倉鶴岡八幡宮楽人であった中原光氏の墳墓にまつられた本尊である。

北条執権時代の史料は残らないが、鎌倉幕府が滅亡すると間もなく、神武寺は鎌倉宝戒寺の末寺となる。縁起が宝戒寺第二世慈源が住持になったと記すほか、世代帳では、慈源が宝戒・神武両寺を兼務したと明記する。寺格に変化の生じたことを示すと考えてもよいであろう。以後、宝戒寺との本末関係は後世までつづいている。宝戒寺は北条氏の菩提を弔うため北条高時邸跡に建立された寺院で、開基は後醍醐天皇。のち足利尊氏も厚く保護した。慈源和尚は普川国師惟賢。尊氏の子供という伝えがあり、縁起も三男とするが単なる伝えでしかない。

北条氏滅亡に際しての合戦やその後の関東の戦乱にも、鎌倉と離れていたことがさいわいして災火を蒙らなかつたらしいが、縁起によれば永正4年(1507)11月大火がおこり、「神社仏閣凡そ三百余箇所一時に灰燼となり、靈宝記録梵器の類皆悉焼亡」し、寺運が甚だしく傾むくようになったという。そして縁起はさらに、

「正親町院の御宇北条氏直卿さばかりの伽藍零らくしけるを愍み八州に触れ行ひ、三所の御堂をなん建立したび、百余石の神領を寄捨したび、天正八年^{庚辰}三月二日本宮の女人禁制可任恒例の旨執達有之、猶諸堂舎の絶えたるを建立あるべきの由御下知の処、同十八年^{庚寅}七月七日小田原落城の砌より自然に又衰へ古の精舎も跡のみ残り神領山林わづかに残れり」

とつづけ、衰退ぶりを嘆じて終っている。すなわち、一度は小田原北条氏の援助をえて復興にとりかかったものの、豊臣秀吉勢のため小田原城が落ち、北条氏も討たれたためついに完全な復興は行なえなかつたというのである。縁起の編まれた文禄3年(1594)ごろの零落ぶりは相当なものであったことがわ

かる。

小田原落城後、関八州は徳川家康に与えられる。家康は積極的に古社寺を保護したが、天正19年(1591)11月の神武寺藏家康寄進状には、

『寄進 薬師堂』相模国三浦郡」神之嶽沼間郷内」五石之事 右令寄附訖」殊寺中可為」不入者也仍如」件』

とみえる^{相州文書所載}。薬師堂宛になっているのは、その前年の7月7日に同堂だけを残して残らず堂宇が焼亡していたせいであろうか^{神武寺藏略年代記}。なお、おなじ年、沼間の海宝院には18石、岩殿寺観音堂には5石が寄せられている。

(3) 近世の神武寺

文禄3年以降について縁起は語らないが、薬師堂関係の棟札あるいは『略年代記』と題された神武寺所藏の記録をとおり、かなりくわしく幕末までの変遷をたどることができる。以下、おもな出来事を取りあげてみる。

- 慶長3年(1598) 3月 薬師堂再興
- 〃 9年(1604) 3月 残らず焼失
- 〃 13年(1608) 9月 木造阿弥陀三尊像再興
- 元和8年(1622) 霜月 薬師堂再興
- 〃 9年(1623) 11月 鐘楼再興・鐘再鋳
- 寛永8年(1631) 5月 山王社再建
- 寛文6年(1666) 6月 薬師堂再興
この年薬師三尊修理并に十二神将像造立
- 元禄10年(1697) 5月 薬師堂に観音像安置
- 享保15年(1730) 惣門立替
- 〃 18年(1733) 惣門・地藏堂建立
- 元文2年(1737) 12月 山王社再建
- 明和6年(1769) 当山焼失
- 〃 8年(1771) 鐘再鋳
- 寛政3年(1791) 薬師天井再興
- 〃 4年(1792) 楼門塗り直し
- 享和2年(1802) 薬師堂後造立
- 天保5年(1834) 3月 庫裡・客殿等焼失
- 〃 10年(1839) 10月 客殿建立
- 〃 12年(1841) 11月 庫裡建立

略年代記の記載はさらに詳しいが、ここにとりだしただけでも、火災と復興をくり返した近世の寺史

はうかがえる。天保5年の火災後、旧仏像の修理、新しい祖師像の造立なども行なわれたが、それらに関しては彫刻の項にゆずる。

慶長3年(1598)の薬師堂再興棟札によれば、大檀那は長谷川七左エ門をはじめとする長谷川氏一族や矢部三郎左エ門尉・石渡孫右エ門尉などであり、桜山・沼間・長柄・堀内・一色・上山口・下山口・池子・田浦等々、周辺地区からの寄進も多かった。小田原北条氏滅亡後は、土地の有力者の保護をはじめ、かなり広い範囲にわたる地域住民たちの信仰があり、寺運を保持するようになったことがわかる。

(いまは失われたが元和9年(1623)再鑄の銅鐘銘写しにも、長谷川・矢部・石渡などの名が列記されている。)

〔了〕

神武寺薬師堂の建築

関 口 欣 也

- (1) 薬師堂の沿革.....11
- (2) 薬師堂の建築.....12

神武寺薬師堂の建築

1. 薬師堂の沿革

神武寺薬師堂の創建は不明であり、鎌倉時代の神武寺について吾妻鏡は承元3年（1209）5月15日の条に「御参、神嵩并岩殿観音堂」とあり実朝の参詣を記し、また寺には正応3年（1290）在銘の石像弥勒菩薩像があるが、建物の状態はわからない。神武寺の建築についての記録は文禄3年（1594）神武寺縁起までなく、縁起によれば正慶元年（1332）修理、観応元年（1350）建立のことがあったと記し、室町末期永正4年（1507）大火にあい、全山炎上の後、北条氏直による再興があったが、天正18年（1590）小田原落城後、寺はまた衰えたと記している。いま寺には慶長3年（1598）薬師堂造立棟札があるが、これには表書に上葺とあり、裏面に茅の奉加が記され、大工の名前がないから屋根替の棟札と思われる。つづいて元和8年（1622）霜月24日、大工伊藤右近、小林与藏の名を記した再興修造棟札があり、修理のことを記している。降って寛文7年（1667）再興棟札があり、寛文5年（1665）7月8日再興を志し、同6年6月28日成就し、寛文7年5月28日開帳され、時の大工は鎌倉鶴岡の岡崎吉兵衛で、この寛文修理は工事に1年かかっているから相当の工事であったらしい。また元禄13年（1700）棟札があるが、これは薬師如来の台座御光再興に関する修理であったようである。以上のように棟札が連続して残っていることは、すくなくとも慶長3年以後薬師堂が火災等の災害にあっていないことをしめすと思われる。一方、享保4年（1719）に編集され、後まで書継れた略年代記には慶長9年（1604）に寺が焼失したと記しているが、慶長13年（1608）に本尊阿弥陀如来台座御光および観音、勢至両菩薩新彫刻のことがでているから、この火災は別当坊である来迎院の火災であって、薬師堂は火災からまぬかれたのであろう。またこの略年代記は天正18年7月7日小田原落城の時も火災にかかったが、薬師堂だけ残ったと記している。しかしこの略年代記の記載は文禄3年縁起にまったくふれられていないので天正18年に寺が火災にあったか否か疑問である。ところで延享2年（1745）分限書によれば、薬師堂について「文禄三年造立之由申伝候」とある。文禄3年といえはこの寺の最も古い記録である神武寺縁起と同年であり、文禄3年神武寺縁起は薬師堂建立勧進のため作成されたのではなかろうか。後述するように堂の様式は室町最末期ころのもので、鎌倉地方は一般に近世初頭まで室町系の様式が続くので、堂の年代を分限書に記す文禄3年建立とみて差支えないものとみられる。したがって薬師堂の沿革は文禄3年（1594）頃建立され、慶長3年（1598）屋根上葺、元和8年（1622）、寛文5年（1665）、元禄13年（1700）にそれぞれ修理があり、略年代記によれば、その後も寛政3年（1791）薬師天井再興、享和2年（1802）薬師堂後許造立のことが知られる。なお文禄3年（1594）建立とすると慶長3年（1598）屋根上葺が接近していて問題となるが、大風など特殊な事情によるものかもしれない。

2. 薬師堂の建築

薬師堂は桁行3間、梁行3間正方形の平面で周囲に切目縁をめぐらし、前面に1間の向拝^{こはい}をつけている。しかしこの前面の向拝は堂本体より新しく、幕末ころにつけられたものと考えられる。したがって建立当初は方3間の堂本体に寄棟屋根^{よせむね}をかけた単純な堂姿であった。方3間の各柱間は各面とも中央の柱間を8.64尺、脇の間を7.76尺とし、各間がたいへん半端な寸法となっているが、軒^{たるき}の極配りは中央間20枚、脇の間18枚であって、一枚間隔は中央間、脇の間とも同じ4寸3分であり、堂の柱間寸法は極配りを等しくする方法いわゆる枝割^{しわり}によってきめられていることがわかる。このように極間隔を等しくしながら柱間寸法をきめる方法は鎌倉時代後半から始まり、しだいに普及していったもので、関東では応永14年(1407)建立の正福寺地藏堂^{もこし}の裳階部分が年代の判明した古い実例である。

堂の各面は南面中央間が棧唐戸^{さんからと}、両脇間が薮戸^{しとみど}であり、両側面は現在中央間と前端間を舞良戸^{まいらど}とし、後端間を板壁とする。しかし両側面中央間の柱抱合面に板決りと胴縁穴^{だんえんあな}の痕跡があるので、建立当初の両側面は前端間だけが引違戸になって、中央間と後端間は2間とも板壁であり、当初は正面3間と両側面前端間だけが開口部であった。なお背面は3間とも板壁であるが、背面中央間にはもと戸口があったかもしれない。

つぎに堂の軸部をみると、径約1尺の柱下部で縁長押^{えんながし}をまわし、内法貫^{うちのりぬき}を通し、内法長押^{えんながし}を打ち、頭貫^{かしらぬき}を柱頂部に通して、先端を木鼻とする。柱上には拳鼻付三斗組斗拱^{こぶしはな みつどうぐみ とくこう}をおき、柱と柱の間の上部では中央間に蕁股^{かえるまた}をおき、脇の間では実肘木付^{さねひじき}の撥束^{ばちづか}をたて、斗拱・蕁股・撥束で丸桁^{がんぎょう}をうけ、丸桁も先端で木鼻となる。頭貫鼻・拳鼻・丸桁鼻実肘木はいずれも線形^{くわいかた}をつけ、渦巻文様の絵様^{えよう}が彫られている。この木鼻は禅宗様の影響によるものであるが、室町時代初期の円覚寺舍利殿や応永14年(1407)建立の正福寺地藏堂にくらべると、線形がくどく、ことに頭貫鼻^{かしらぬきはな}の鑄^{しのぎ}にはしかみという関東地方では室町末期以後の手法が用いられている。また渦巻文様と線形の関係も室町中期のものよりくずれており、その年代が室町末期であることをしめしている。しかし鎌倉地方は禅宗様式の中心地であったためと、室町後半以後政治的な中心としての位置が失われたためか、建築様式は保守的な傾向が強く、江戸時代に入っても17世紀中頃まで室町系統の様式が永く残ったので、古い遺構との比較だけで様式による年代判定をするのは危険である。そこで鎌倉地方で17世紀の年代が確実な遺構として旧東慶寺仏殿(棟札・寛永11・1634)、旧鎌倉心平寺地藏堂(墨書・慶安4・1651)、浄光明寺阿弥陀堂(棟札・寛文8・1668)と比較すると、これらの建築より木鼻の絵様線形は古様であり、堂の年代を室町最末期ころとみるのが妥当であって、文禄3年(1594)の建立とする分限書の伝えを認めて差支えなからう。なお中央間の上部に用いられた蕁股^{かえるまた}も室町最末ころの特徴をもつ。鎌倉地方をはじめ神奈川県内では禅宗様系の建築が多く、和様の細部である蕁股で室町の流れのものは当堂のものと、厚木妻田薬師堂(厨子墨書・天正12. 1584, 江戸時代に改築)と藤野町石楯尾神社(天正13. 1585)の蕁股ぐらいであって当堂の蕁股は室町最末における鎌倉地方の蕁股資料となりえるものである。このように当堂は木鼻絵様線形の性質から室町最末と認められ、文禄3年建立と認められるが、堂全体が文禄建立のままではないらしく、外廻り軒^{じだるき}の地極

は上端に3分ほどの反り増しがあるのに下端がほとんど反っていないのは元亀4年(1573)円覚寺仏殿古図と比べて疑問であり、工事が延引したか、あるいは軒が江戸時代につくりかえられているのかもしれない。

堂の内部は側廻りの斗拱を出三斗組でみつとぐみにして一面の格天井ごうてんじょうをはり、前面から18尺の位置に径1・15尺の来迎柱らいごうばしらを2本たて、来迎柱と背面の中央2柱を囲って本尊薬師如来を内に安置する。この中央厨子の両脇わきだんに脇檀わきだんを作っているが、この部分が当初か否かは確かめられなかった。内部でもっとも特色のあるのは来迎柱上の扱いであって、この部分の斗拱は禅宗様出組斗拱を用い、柱と柱の中間上部にも柱上と同形の斗拱をおく禅宗様建築の詰組つめぐみの扱いとなっている。このように本尊をまつる部分の組物を手のこんだ扱いとしているのは明らかに本尊をまつる部分を際立たせようとした意図の表われである。また来迎柱を頂部で結ぶ頭貫の木鼻は上部が大きく巻き上って室町末期の誇張的な表現をしめし、拳鼻の繰形もくどく誇張的である。来迎柱の前に張出した須弥壇しゅみだんは胴が垂直であって、江戸時代に一般的に凸にふくらんだ胴を用いず、室町の流れを止める。

以上により神武寺薬師堂は室町最末期の様式をもつ建築であり、文禄3年建立の寺伝を認めてよからう。外観は寄棟屋根の簡単な三斗組斗拱を用いた三間堂であり、内部も一面に格天井をはっているが、来迎柱上に禅宗様出組斗拱を用い、誇張的な木鼻をつけて本尊を安置する部分を際立たせた意匠の処理がみられる。文禄3年(1594)といえは近畿地方ではすでに桃山建築様式が成立し、例えば三溪園に移された天瑞院寿塔覆堂てんずいいんじゆとうさやどう(天正19・1591)のように派手な彫刻を用いた建築がつくられたのであるが、鎌倉地方はまだ室町系の様式が変形しながらつづいていたのである。したがって当堂の存在は単に逗子市の文化財であるばかりでなく、かつて鎌倉南北朝期に禅宗建築を始めとして隆盛を誇った鎌倉地方の建築が桃山時代に入っても室町最末の様式を変形しながらつづけていた具体的実例として重要な価値をもっている。

なお薬師堂の前に建つ楼門ろうもんは請願文により宝暦11年(1761)の建築であり、離れて建つ客殿・庫裡は天保5年(1834)の火災後、天保9年から13年(1838～42)にかけて再建されたものであることが略年代記により知られる。

注、沿革のうち慶長3年棟札および分限書は実見できたが、他の文献史料は「逗子市誌」(第1輯・昭和30・逗子市役所)にのせられた史料によった。

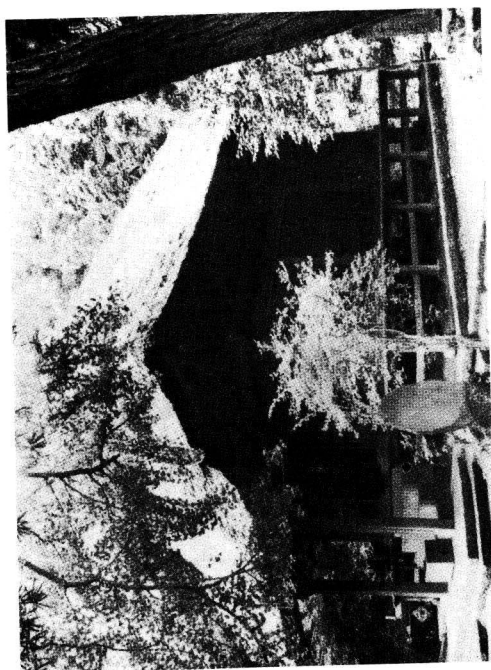
奉加帳事草五十駄桜山十五駄沼間三十駄長柄廿駄堀内十五駄一色廿駄上山口廿駄下山口卅二駄池子十五駄田浦

□^(梵字)

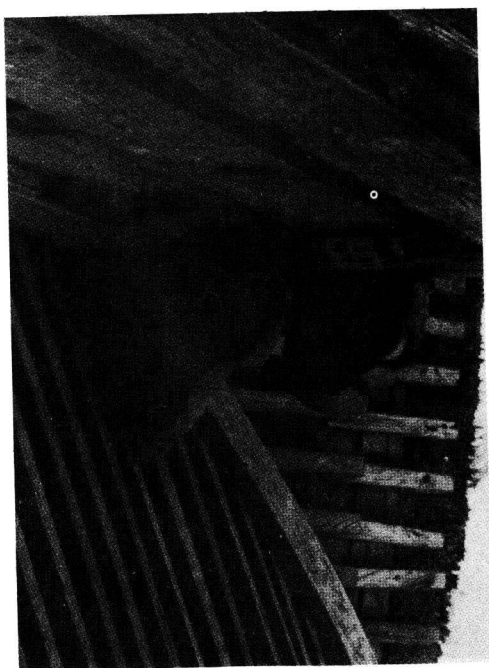
奉造立相州三浦郡端山郷神武寺薬師堂上膏十方檀那以助成諸願成就所願主佛子

大檀那長谷川七左衛門尉長總同名藤五郎長□同名藤四郎長吉井矢部三郎左衛門尉石渡弥右衛門殿

一字精舎建立功力二世悉地武運長久子孫繁栄矣慶長三戌戌三月廿一日権小僧都尊祐
白敬



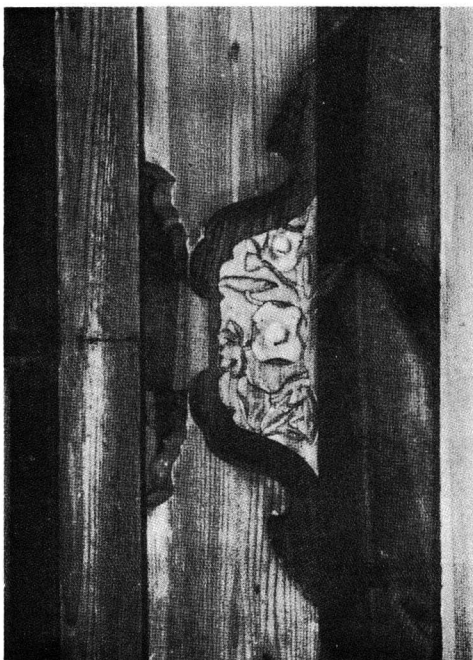
薬師堂外観



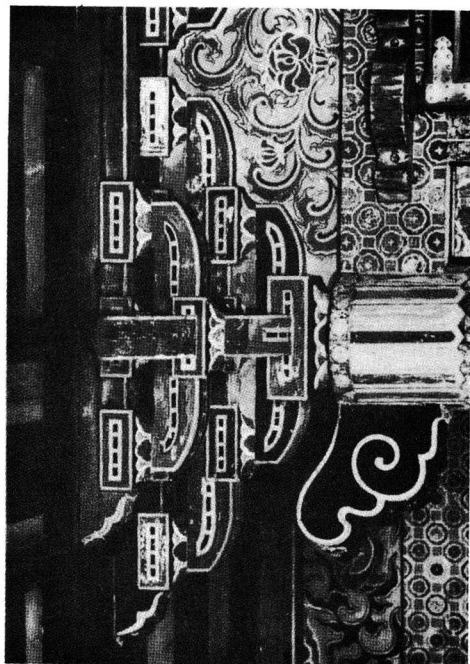
薬師堂側廻細部



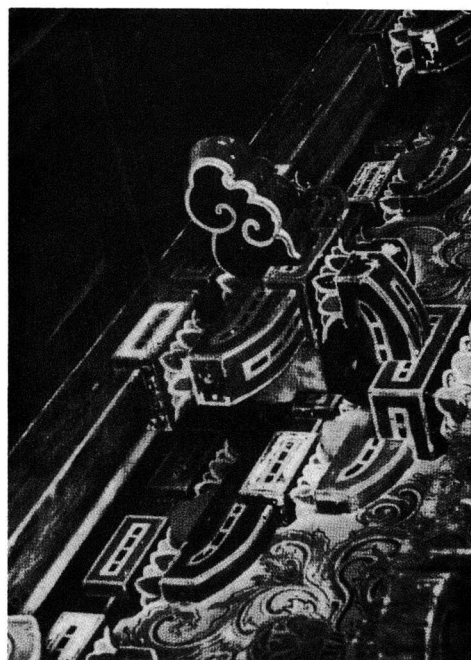
薬師堂内部



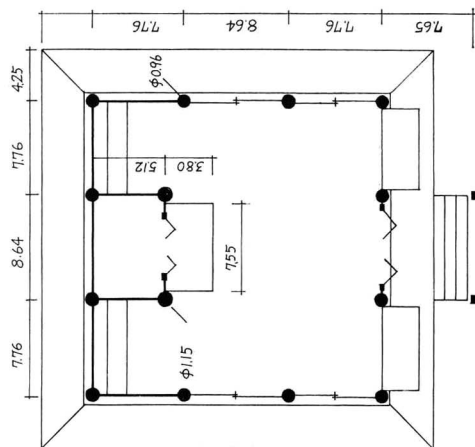
药师堂内部基股



药师堂来迎柱上頭貫鼻および斗拱



药师堂来迎壁中備斗拱の拳鼻



神武寺药师堂平面図 S: 尺

絵

画

三 山 進

は じ め に.....	18
絹本着色大威徳明王図.....	18
絹本着色千手観音菩薩図.....	19
絹本着色阿弥陀三尊図.....	19
絹本着色阿弥陀如来図.....	19
絹本着色綱敷天神図.....	20

絵 画

は じ め に

彫刻の場合とおなじように、火災は多くの絵画を失わせたと思われる。しかし、数の上でいま神武寺につたわる絵画は50点を越す。それらの中には、明治年間東京寛永寺からゆずりうけた作品もかなり含まれているというが、本来の蔵品にもたとえば鎌倉時代の大威徳明王図のようなすぐれた作品がみられる。ここでは調査することを許された蔵品のうち、制作年代の古い代表的な作品についてだけ報告する。

絹本着色大威徳明王図

画面 たて 128.2cm

よこ 68.2cm

画面向って右やや下よりで火焰をたなびかせながら廻転する輪宝を追うように、水波上の水牛の背に3足で立った大威徳明王像を大きく描き、白馬上で弓を引く童子、片足で犬の背に立つ童子を画面上部、虎にのる童子、唐獅子上で弓を引く童子を画面下部にそれぞれ配する。明王は6頭6臂6足、火焰を背負って鬚髯^{どくろ}の飾りをつけ、戟・弓・矢・剣・棒などの持物をもつ像容はほぼ儀軌のとおりであるが、五大明王(不動・軍荼利^{ぐんだり}・降三世・大威徳・金剛夜叉)中の一尊としてつくられるふつうの場合とは趣きが異なり、動きに富み、忿怒相もすさまじい。一尊だけをとりだしたいいわゆる別尊風の絵画でこのようにきわめて躍動的な作品では、藤原時代の奈良唐招提寺本と鎌倉時代の東京根津美術館本とが知られている。しかし、唐招提寺本では明王の像容はさらに大きく侍者は左右に4体ずつ計8体の鬼神形であり、根津美術館本の場合は画面ほぼ一杯に明王を描いて侍者はない。また京都醍醐寺本明王部図巻所載の一図には輪宝を追う形のものがみられるものの、やはり神武寺本とおなじではない。明王像だけをとりだせば根津美術館本に近いが、いまのところ神武寺本の典拠ははっきりしない。

絵は画面全体がくすみ、もとの彩色をうかがうのはむづかしい。明王肉身部はおそらく儀軌に定めるように青黒色だったのであろう。胡粉をまじえた火焰をはじめ、眷族肉身部・水牛の装具などに朱がよく残るほか、上辺向って右の馬・明王の鬚髯の白色、持物・宝輪などに使われた金泥が比較的とどまっている。描線はかなり鮮明で、動的な各尊形の像姿にふさわしく流麗で迫力もち、鉄線描と、衣文・水牛などの輪郭のやや肥瘦のあるものとの2種を使いわけている。また、火焰に輪郭をとっていないため、動きを強めるのにすぐれた効果を生んでいる。鎌倉時代も後期の作品であろう。

なお、相模国風土記稿の神武寺条には「大威徳明王画像一軸」を寺宝のひとつにのせ、「牛王権現と称す、古昔隣村桜山村牛招島より出現すと云ふ」と記し、桜山村海の条に、「海面小島二あり(中略)共に

牛招鳥と唱ふ、古は鎮守太神宮の例祭に島辺より牛王の水を汲取しとなり、今沼間村神武寺藏する牛王権現一軸は、此所より出現せしと云伝ふ」と同様の伝説をかかげている。また、黒漆塗箱蓋表には「勅号牛王権現大威徳明王一幅 相模国三浦郡澗間村 医王山来迎院神武寺」と金泥で記す。神奈川県指定重要文化財。現在鎌倉国宝館寄託中。

絹本着色千手観音菩薩図

画面 たて 84.3cm
よこ 33.1cm

蓮華座上に輪光形頭光とやや型の崩れた蓮弁形の挙身光を負って立つ十一面千手観音菩薩像。本面以外、頭上に十一面をのせるが、頭上面はすべて略画風で、表情も酷似し、儀軌どおりの描写は省略している。本尊の像部はわりあい当初の面影をとどめるが、他は絹地に補修が多く、剥落もはげしい。ことに台座以下は原形を残さず、画面上部の天蓋も後補である。

像は全体に黄土をぬり、肉身部には細い朱色の輪郭線をつかう。衣文部は全面に斜格子・網目・麻葉などの截金文様がほどこされ、輪郭もまた截金でとる。このほか、宝冠帯・瓔珞・腕釧をはじめ、宝輪・三鈷^{さんこ}などの持物、あるいは大部分剥落しているが頭光等々には金箔がめだつ。挙身光のくすんだ濃藍色、頭髮・持物さらに腕釧描線の墨色などがほかにめだつが、いくつかの持物は当初相当厚い彩色がほどこされていたらしく、その痕跡が認められる。截金の使用法をみても細緻な心くばりがうかがえるが、直立した姿勢は硬く、天衣表現には左右相称の形式化があり、描線は弱い。とくに腕釧・瓔珞等の墨線や持物の蓮華・頭上小面・正面手などの朱線は略画風な感じが強い。一見古様をつたえるものの、鎌倉後期の作であろう。神奈川県指定重要文化財。現在鎌倉国宝館寄託中。

絹本着色阿弥陀三尊図

画面 たて 85.2cm
よこ 35.3cm

飛雲上蓮台にのり、左右両手とも第1指・第2指を捻じて来迎印を結ぶ阿弥陀如来立像に、やはり飛雲の上の蓮台に立つ両脇侍菩薩を配する。観音は蓮台を捧げ、勢至は合掌、いずれも上体をややかがめる。三尊共、画面に向って右斜向きで、西方浄土から念仏臨終者を迎えに降ってくる型通りの来迎像である。この種の像は鎌倉時代にはいると好んで描かれ、像・雲などに動きを強調するようになるが、神武寺本もその一例に数えられる。画面はくすみ、剥落も多く、表装も損傷しているが、三尊肉身の金、着衣文様の截金、雲の胡粉や輪郭をくまどる金などはまだよく残る。鎌倉時代末か南北朝時代、14世紀の作であろうか。

絹本着色阿弥陀如来図

画面 たて 101.5cm
よこ 35.3cm

雲上の蓮台に正面を向いて立つ一尊像。胸前の右手、垂下した左手ともに第1・第2指を捻じ、来迎印を示す。頭頂部とそのまわりに後補がめだち、面部・手部にも補筆がみとめられるが、保存は良い。

頭部には緑青、唇に朱、肉身金、着衣文様には截金をそれぞれ用いる。像は全体に固く、けっして秀作とはいえないが量感にとむ。南北朝時代の作であろう。

絹本着色^{つなしき}綱敷天神図

画面 たて 90.0cm

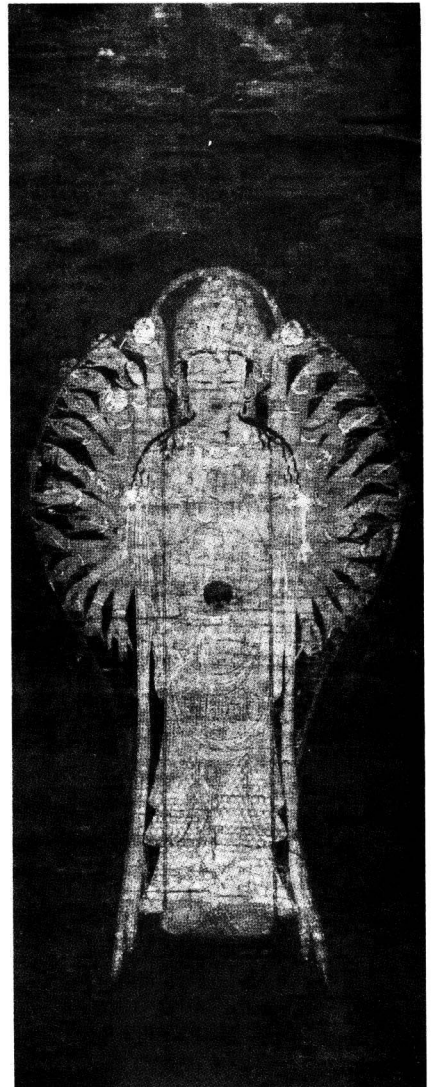
よこ 38.2cm

上畳の上に綱をまいてつくった敷物をおき、右手に笏をにぎり、左手でその上部を抑えた天神が画面向ってやや右向きに坐る。上方に垂帳、下方に紅梅の枝がそれぞれ配されている。着衣は黒、裏地は濃褐色、背すじ襟裏に朱を用い、下方に鮮やかな白——。彩色は神経がゆき届き、他の面顔の色もよく残る。面部は毛髪・眉など、こくめいに細い墨線を引き、写実性を失っていない。上部の齒で唇をかみしめ、両眼を大きくみひらいた、いわゆる忿怒相を示すこの種天神像は、怒り天神とよばれている。大宰府で悲運のうちに歿し、死後怨霊となったとされる菅原道真を神格化した天神の像では、おだやかな詩文・学問の神としての像より、こうした忿怒像の方がおこりは古い。綱を敷くのは、大宰府行への途中、淀川から河州佐太里にたどりついてしばらく休憩した際、船に使う大綱を輪にして敷物に使ったのに基づくという。室町時代の物語『天神記』には「みやこにては、たまのくるま、きよくろうきんてんのゆか、にしきのしとねにまつはれておはしましける身なれとも、いまはひきかえて、ふねのおほつなを、われとひしきものにし、ひとりぬるよのさひしきは云々」と記す。もちろん、後世つくりあげたエピソードであろうが、室町時代以降、この綱敷天神は好んで描かれた。神武寺本では本来の場所の感じはなく、画題化してしまっている。17世紀ごろの作であろうか。



絹本着色大威徳明王図

絹本着色千手観音菩薩図



彫

刻

三

山

進

は　じ　め　に.....	23
木造阿弥陀三尊立像.....	23
木造天台智者大師坐像.....	26
木造慈覚大師坐像.....	26
木造慈慧大師座像.....	27
木造十一面観音坐像.....	27
木造薬師三尊像.....	28
木造地藏菩薩坐像.....	29
木造地藏菩薩半跏像.....	30
木造不動明王立像.....	30
木造阿弥陀如来坐像.....	30

彫 刻

は じ め に

寺史でふれたように、釈迦如来・薬師如来・十一面観音の三尊像を安置したのが神武寺のおこりと、縁起はつたえる。創建時期は明確でないにしろ、以後現在にいたるまで長く法脈を保ちつづけてきた同寺で、各時代にさまざまな彫像が造立安置されてきたであろうことは、容易に推察できる。しかし、たびたびの火災のため、残念ながら鎌倉時代以前をさかのぼる作品は伝存していない。造立時期の明確なもっとも古い像は、正応3年(1290)銘の石造弥勒菩薩像である。神武寺での信仰の中心で、中世には幕府の尊崇が厚かった薬師如来像も後世になっての再興像に変っている。

とはいえ、いま残る彫刻の数はけっしてすくなくはない。しかも近世にはいつてからの作品には、造立年代・作者ともに明らかな像が多く、たんにこの地方ばかりでなく、ひろく近世彫刻の展開・特質を考える上に、資料的価値が高い。また、修理銘や彫像の再興等に関する記録も、かなりゆたかである。ここでは鎌倉時代と推定される木造像、寺史にきわめて重要な意味をもつ薬師如来像以下、主要な作品について調査結果を報告する。配列は、本堂安置像・薬師堂安置像・その他の順にし、石造弥勒菩薩像に関しては赤星直忠氏の詳細な報告があるため省略した。

木造阿弥陀三尊立像

像高 中尊 81.1cm
観音 52.8cm
勢至 52.2cm

本堂宝珠殿の本尊。中尊阿弥陀如来立像は蓮弁形拳身光背を背負い、右手は胸前で屈して左手を垂下し、いわゆる来迎印を結ぶ。両脇侍像はいずれも輪光背を負い、観音菩薩像は蓮台を捧げ、勢至菩薩像は合掌し、両像とも上体をやや前にかがめて膝を軽くまげる。こうした動きをみせる阿弥陀三尊像は、信仰者の臨終に際して極楽浄土に往生せしめるべく来迎する姿として、鎌倉時代を頂点に、ひろい範囲にわたり好んで造立されてきた。三軀とも寄木造り、玉眼嵌入、全身に厚く金泥を塗る。この像の造立年代や再興年次を知る上に、資料はかなりゆたかである。

(1) 中尊台座裏墨書銘

『貞享二年十一月^(賢カ)□□□□奉再色三尊成就□□秀(花押)

仏師鎌倉才木座^[材]藏並仁左衛門」同名正之助

当寺末」観蔵院□□上之房」地藏院栄□□法蔵院尊□□西□房^{(意カ)(之カ)}』

(2) 胎内銘札（像と別置）

表『（梵字弥陀三尊）維時慶長十三年戊申九月吉日 大仏師鎌倉亀谷門前加賀法印宗門作之』行年四十二歳也

奉造立本尊阿弥陀如来台座後光再興二脇土観音勢至二尊仏法興隆所

医王山来迎院神武寺代五十九世権少僧都尊祐法印（花押）』

裏『相州三浦郡桜山村神武寺』代官長谷川藤右衛門代也』

(2) 神武寺文書の内

その一

『 文政八年乙酉二月吉祥日六十九世現住

奉再興阿弥陀如来観音勢至両尊惣彩金色三尊

権大僧都実順代

施主浦郷平田治郎左衛門母

鎌倉亀谷門前大仏師

加賀法印宗門

四十二歳作

維時慶長十三年戊申九月吉日 長男儀作

次男七郎

観世音菩薩新彫刻

(梵字弥陀三尊)奉造立本尊御台座後光

勢至大菩薩新彫刻

当寺第六十世現住権少僧都尊祐（花押）

相州三浦郡沼間郷桜山村神武寺

代官長谷川藤右衛門代』

その二

『右尊躰未新矩同様之处

天保五年甲午三月二十五日昼四ツ時

台所より出火庫裏客殿不殘焼失之砌

此本尊其外数多仏躰共向ッ山江奉出ッ

其山焼候ニ付仏躰多焼損ッ甚々難儀之節

東叡山行蔵院院家大僧都見願

寄附金有之依ッ仏躰不殘再興之

奉再興阿弥陀如来観音勢至二脇土共三尊

医王山来迎院神武寺現住

第七十世権大僧都貫順代

相州鎌倉扇ヶ谷不動坂

仏師 後藤齊宮真慶
長男恵逸郎慶明
次男 』

その三 神武寺什物帳（写）（断簡）

『一、本尊阿弥陀如来并観音・勢至^{三尺七寸}脇土右御長ヶ三尺余寸立像二脇土^{七寸}卷尺式寸斗、但ッ永正十一^戌年九月東大寺大仏子小野氏作ト、再建立二脇土等者慶長十三申年九月吉旦』

(4) 神武寺略年代記（抄）

- ・永正四年丁卯霜月七日三百余ヶ所不残焼失之事
- ・天正十八年小田原落城七月七日ニ薬師堂ノミ残シ寺院不残焼失之变
- ・慶長九 三月三日焼失当寺不残也
- ・慶長十三 当九月本尊阿弥陀如来台座後光再興出来観世音勢至二大菩薩同様新彫刻
- ・明和六 焼失当山
- ・天保五 三月二十五日昼ニ四つ時当寺出火、庫裏客殿板蔵物置下屋迄不残焼失

以上、直接史料である銘を最初に記したために順不同になったが、これらを年代順に整理すればつぎのようになる。

永正11年(1514)9月 東大寺仏師小野某造立という

慶長13年(1608)9月 仏師宗円外、中尊光背台座再興、両脇侍像新造

貞享2年(1685)11月 仏師蔵並仁左衛門外、三尊彩色

天保5年(1834)3月 焼損

同 年 仏師後藤真慶外再興

これらの資料をとおしてみるかぎり、現存像は、中尊像が永正11年の造立で、両脇土像は慶長13年の補造だが、いずれも天保5年に焼損したため、同年再興したもの……というように読みとれる。しかし、問題は天保5年の火災による焼損の程度である。資料(8)その二の文書には避難先の山も焼け「仏躰多焼損」および「仏躰不残再興」と記すだけで、具体的には再興が修補なのか新造なのか定かでない。もし中尊が永正期の像であったとしても、後世の補修がきわめて多いと考えねばならず、どこまで当初の面影をとどめているかはっきりしない。中尊の螺髪は刻出浅く肉髻は扁平、髪際のカーブは誇張されて鈍い。面部はまるく、衣文表現は一応写実を試みてはいるが形式化する。両脇侍像は宝髻を高くゆい、衣文表現とともに中世のいわゆる宋風彫刻をうけついでいる。近世初頭前後の彫刻はそれ以前の作品の形式をきわめて意識的に真似たものが多く、造立年代の判定はむづかしい。この三尊像もまだ後考にまたねばならない問題点があるが、諸史料は近世彫刻の展開をさぐる上に貴重だといえる。

なお東大寺仏師小野某については今のところ他に資料がないが、慶長以降の再興にたずさわったのは

いずれも鎌倉地方仏師である。

宗円は室町末期に活躍した快円の弟子で、慶長4年(1599)鎌倉寿福寺明庵栄西像の修理にもたずさわっている。史料(2)と(3)その一とは宗円の年齢や子息を記し、系譜をたどる上に重要である。藏並姓の仏師は17世紀に庄左衛門・仁右衛門などがあり、史料(1)はその仏所が材木座にあったことを示すのが面白い。最後に後藤真慶は三橋家と並んで鎌倉地方仏師を代表する後藤家の嫡流で、鎌倉の英勝寺徳川家康像造立や杉本寺毘沙門天像修補などの事績が知られており、神武寺でも以下にふれる天台祖師像などを造立している。

木造天台智者大師坐像

像高 36cm

天台大師あるいは智者大師とよばれる中国僧智顗(538～597)は天台宗の開祖。18歳で出家し、慧思の弟子となり、575年に浙江省天台山にこもって天台教学を確立した。法華文句・法華玄義・摩観止観の三大部をはじめ著書が多い。

像は寄木造り、玉眼嵌入、頭布をつけ、禪定印を結んで安坐する。彩色は厚く、保存は良い。肖像とはいえ、理想化され、江戸時代に例の豊富な人形風の作品である。首柙内面に次の墨書銘が記されている。

『奉造立天台智者大師像』亀ヶ谷仏所後藤齊宮真慶(花押)「小仏師七人」天保五甲午十一月日』

木造慈覚大師坐像

像高 33.3cm

慈覚大師円仁(794～864)は下野(栃木県)の人。15歳の時から比叡山で最澄の弟子となり、838年中国に渡って密教を学び、847年帰国。延暦寺第三世座主となり、天台教学の確立につとめた。入唐求法巡礼行記をはじめ著書も多い。

像は寄木造り、玉眼嵌入、厚手の彩色をほどこす。禪定印を結んで安坐する人形化された小像で、天台大師像とおなじに、理想化された作品である。衣文表現はひだを複雑に刻出するが、形骸化してかた。

い。頭部内面と台座裏とに、つぎの墨書銘がある。

『天保八酉□□』〔後頭部内〕

『医王山来迎院神武寺』維時天保八年丁酉正月十四日

奉新彫刻

中興開山慈覚大師尊像

七十世現住」権少僧都堅者貫順代

後藤齊宮真慶
大仏師 作 同苗恵一郎宏慶

謹彫刻』

また、神武寺略年代記の天保8年(1837)7月の条には
『当七月慈覚大師新彫刻安置代金二両貳分貳朱遣ス』
と記されており、当時の彫刻代金があきらかで資料として貴重である。

木造慈慧大師坐像

像高 37.8cm

慈慧大師良源(912~985)は近江の人、元三大師・^{がんだいし}角大師・^{つの}御廟大師ともよばれる。比叡山で出家、のち天台座主となり、当時荒廃していた叡山を復興し、天台宗中興の祖として尊崇されるようになった。肖像彫刻もかなり造られている。

像は寄木造り、玉眼嵌入、先の二像とおなじように厚手の彩色はよく残る。やはり理想化の傾向が強い人形風の小像。後頭部内面に次の墨書銘がある。

『 当山大仏所鎌府扇谷住
奉新造慈慧大師 後藤齊宮真慶
作(花押)

天保九^戌年十二月日出来 』

また、神武寺略年代記には、
『昔ン画像アリ焼失ニ付正月三日元三大師新彫刻安置代金三両余、天保八年酉正月十四日新彫刻』
と記す。天保8年(1837)正月14日に造立した像は、銘によれば慈覚大師像である。略年代記は、正月3日に入寂したため元三大師と別称される良源にちなんで、ことさらに正月3日云々の記事を作成したのであろうか。

作者後藤齊宮真慶については阿弥陀三尊立像の項でふれたが、天保5年・8年・9年と相ついで神武寺のために肖像彫刻を造立したわけで、彼の事績をたどる上に、また当代鎌倉地方仏師の作風を知る上に貴重な作例といえる。また天保11年には、地藏堂安置の木造地藏菩薩半跏像をもつくっている。

木造十一面観音坐像

像高 54.0cm

蓮弁形拳身光を背負い、岩座上の蓮台に安坐する。頭部正面に阿弥陀如来立像の化仏をいただき、頭頂に十面をのせ、本面と共に十一面。左手に水瓶をもち、右手は膝前で与願印。通常の十一面観音像であるが、台座前面に脇侍として木造の毘沙門天立像(像高23.5cm、彫眼、彩色)と不動明王立像(像高22.7cm、彫眼、彩色)とを配している。像は寄木造り、両腕は肩に溝をつくってさしこむいわゆる蟻柄式。玉眼嵌入。肉身は金泥、唇は朱、髪際に緑青をぬり、衣文に胡粉彩色の痕が残る。毛髪の刻出は比較的こまかく、面貌は理智的にととのい、腰・膝などの衣文は整理されてはいるが宋風の写実性をそなえる。光背は後補。造立年代は後考にまつ。

神武寺縁起によれば、行基の開山に際して釈迦・薬師阿如来像と同時に3尺余寸の十一面観音像をも

安置し、秘仏として尊崇されてきたという。十一面観音への信仰が神武寺できわめて古くから行なわれていたことはたしかであろう。新編相模国風土記稿にも「十一面観音を安ず^{行基作}」と記載している。しかし、現在本堂に客仏の形でまつられる本像は、ご住職のお話では、明治の神仏分離にあたって、鎌倉荏柄天神社から移されたとのことである。（菅原道真を神格化した天神の本地仏はふつう十一面観音菩薩）風土記の荏柄天神社項には「本社中央に菅公束帯の座像を置き（中略）左方に本地仏十一面観音の像を置く」とみえる。この像がいまの神武寺像に当ることになるのであろうか。

なお、比叡山延暦寺について記す山門堂舎記の首楞嚴院条には、嘉祥5年（852）建立の根本観音堂に聖観音像と不動・毘沙門両像とを安置するといひ、観音・不動・毘沙門の三尊形式は天台宗系の配列法と思われる。神武寺像は十一面観音であるが、根本的な組合せは叡山の場合とおなじと考えてよいだろう。とすれば、荏柄天神社旧蔵とはいえ、天台宗神武寺にはふさわしい像といえる。

木造薬師三尊像

像高	薬師如来	71.5cm
	日光菩薩	60.5cm
	月光菩薩	60.5cm

薬師堂本尊。古来33年めごとに開扉される秘仏として、厚く尊崇されている。神武寺縁起が語るように、聖武天皇の霊夢にもとづき行基が山をひらいた時に神武寺は始まると伝えられるが、その際安置したのが十一面観音・釈迦如来および薬師如来の三像だという。もちろん、縁起をそのまま信用することはむづかしいが、以後の寺史を眺めると、神武寺の中心は薬師如来像であり、鎌倉時代の源実朝参詣を記す吾妻鏡の記事にも明らかのように、人びとの信仰も薬師堂に対するものであった。

中尊薬師如来像は右手は施無畏印（胸前で屈指、掌を前に向ける）、左手は膝上で仰向けて薬壺をのせ、衣は通肩（^{つうけん}両肩を覆う）で安坐する。通常形であるが、頭部は如来像にふつうの螺髪（^{らっぽう}粒々で髪を表現する）ではなく、縄目状に刻みめをいれて髪を現わす。こうした頭髪表現は、中国から伝来した京都清凉寺本尊釈迦如来像やそれを模刻したいわゆる清凉寺式釈迦像にみられるもので、薬師如来像としては珍しい。神奈川県下では、横須賀市能満寺薬師如来坐像に同種の表現がある。彫眼、彩色は剥落し、全身に虫蝕の痕が著るしい。頭頂部に小材を矧ぎ、頭部は耳上で前後に寄せ、首は現在固定しているが差込み。軀部は前後矧ぎで背板を別に矧ぎ、両腕は肩で矧ぐほか、両手首は袖に差込む。膝前も別木で裳先にはさらに小材を矧ぐ。かなりこまかな寄木造りである。光背・台座は後補。

日光・月光両菩薩は、それぞれ蓮台上で輪光背を背負う立像。寄木造り、彫眼、彩色は剥落する。宝髻は高く結いあげる。宝冠・光背・持物・天衣・台座などは像よりも時代が新しい。

三尊の造立年代を示す確実な資料は、いまのところ発見されていない。ただ、縁起・略年代記・棟札などで、薬師堂の火災・再興の歴史が比較的くわしく知られる。製作時を推定する手がかりに、おもな出来事を抄出すると次の通りになる。

神亀元年（724）	行基、像を刻して安置すという	〔縁起〕
永正4年（1507）	大火、伽藍焼失、本尊は守護という	〔縁起〕

天正18年(1590)	大火、薬師堂のみ残る	〔年代記〕
慶長3年(1598)	薬師堂再建	〔棟札〕
慶長9年(1604)	大火、伽藍全焼	〔年代記〕
元和8年(1622)	薬師堂再興	〔棟札〕
寛文6年(1666)	薬師堂再興、薬師三尊台座後光再興勸進成り、十二大将新彫刻成就	〔年代記〕
元禄13年(1700)	再興薬師如来新造立供養台座光背成就	〔棟札〕
明和6年(1769)	大火、当山焼失	〔年代記〕
寛政3年(1791)	薬師天井再興	〔年代記〕
享和2年(1802)	薬師堂後許造立	〔年代記〕
天保5年(1834)	大火、庫裏客殿物置不残焼失	〔年代記〕

これらをみると、いつのころかに造立された古像は、すくなくとも永正4年の大火では失われたらしいが、慶長9年の火災ではどうであったろうか。略年代記の寛文6年の項には詳しくは「薬師如来日月光菩薩台座後光再興勸進成ル并十二大将新彫刻成就云々」と記す。台座と光背のみ再興したようにも読みとれる。(なお、現在、薬師堂には木造十二神将像も安置するが、神武寺什物帳には、「一、十二神小像寺新造寄進仕古像浦郷村薬師堂江寄進仕候」と記す。ここにいう古像が寛文6年造立の像であろうか。今後の調査でこの点は明らかにしたい) さらに、元禄13年の薬師堂再興に際しての棟札には「奉再興薬師如来新造立供養大座御光并七仏諸願成就処」とみえる。ここでも新造立が台座光背のみで、像そのものは修補による再興なのかどうか、文章はあいまいである。新編相模国風土記稿では行基自作とし、寺伝もそれをうけついでいる。が、寄木の構造や衣文ひだの重い整理された表現などからみて、造立年代を古代におくことは無理である。正確には決定できないにしろ近世初期、16世紀末から17世紀ごろにかけての頃に復興された像と推定できるのではないだろうか。それにしても像の量感はゆたかで、技術は洗練されていないとはいえ面部に神秘感があり、この地方の作品としては貴重である。また、神武寺史を考える上にも、きわめて重要な意義をそなえている。

木造地藏菩薩坐像

総高 18cm

坐高13.6cm

薬師堂安置。岩座上の蓮台に坐り、両袖・裳裾を垂下する。右手に錫杖、左手に宝珠をもつ通常の地藏菩薩像で、寄木造り、玉眼嵌入、厚手の彩色をほどこす。台座裏に次の墨書銘がある。

『慈覚大師御作』□年 再色日吉十禅師御正鉢 相州三浦郡桜山村 医王山 神武寺 伝灯大法師法印賢誉 伝灯大法師法印賢秀 元禄三年庚午正月吉祥日』

『仏師鎌倉乱橋藏並仁右衛門』

元禄3年(1690)は造立年次とみてよいであろう。仏師藏並仁右衛門は17世紀の鎌倉地方仏師の一人であり、延宝5年(1677)鎌倉長谷寺木造前立十一面観音立像修補の事績が知られている。

木造地藏菩薩半跏像

総高 68.3cm

坐高 51.6cm

薬師堂傍らの地藏堂本尊。寄木造り、頭部は襟間でさしこみ、玉眼嵌人。岩座の上に坐り、左足を垂れた半跏像で、右手に錫杖、左手に蓮台をもつ。蓮台上の宝珠は欠失。胎内につぎの墨書銘がある。

〔胎内背面〕

『天保十一年星宿庚子三月廿四日

奉再興延生山地蔵大菩薩

当寺現住法印権大僧都貫順代

願主義宣院宝窓道盛居士也 』

〔首柄〕

『南無子安延命悲母解地藏大士』

〔後頭部内〕

『鎌倉府扇谷住大羯磨^(所カ)□』後藤齊宮真慶七十三歳作（花押）『同慧一郎慶明』時于天保十五年甲辰十月五日』

全体に彫技は鈍いが、近世彫刻の資料として興味深い。天保11年(1840)と15年と銘文中に二種の年次が記されているが、造立は15年とみてよいであろう。作者真慶については阿弥陀三尊像の項を参照されたい。

木造不動明王立像

像高 51.8cm

岩座上で右手に剣、左手に羂索を持って立つ。左足をいくぶん左前方に踏みだし、腰をややひねって動きをみせる。頭上には頂蓮をのせ、左肩に弁髪を垂らし、両眼は共に大きく開き、唇を結んで牙を2本上方に向けて露出する。寄木造り、玉眼嵌入。衣文部には朱・緑・胡粉など厚い彩色がほどこされ、文様には胡粉盛上げの手法を用いている。ひきしまった面部はかなりの確に忿怒相を表現し、体軀では胸・腕などの筋肉表現に量感がある。衣文は左肩から腹部にかけては比較的写実的だが、背面下部では形式化して鈍い。総体に小軀ながら逞しさを失わず、鎌倉後期の作と思われる。火焰光背は後補。現在鎌倉国宝館寄託中。

木造阿弥陀如来坐像

像高 42cm

寄木造り、玉眼嵌入、彩漆。当初は衣文部に金箔で文様をおいていたらしく、右膝あたりにいくぶん痕跡が残る。首はさしこみで現在は固定。底板はない。裳先一部は後補。螺髪は浅く簡略にのみを入れ

て形式的に刻出し、肉髻は低い。顔は端正にととのえられ、衣文ひだも整理されて表現はおだやかである。総体にはっそりとし、彫技はまとまっている。鎌倉後期の作であろう。

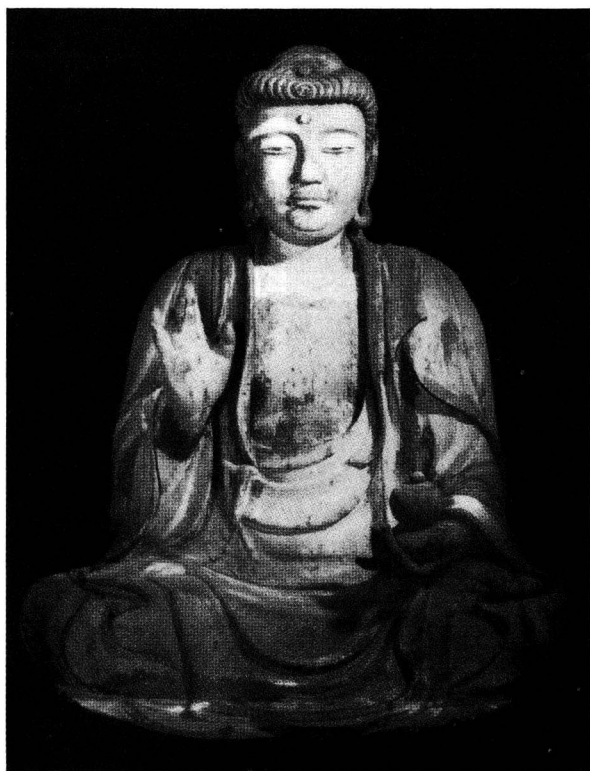
寺伝ではこの像を釈迦如来とする。神武寺縁起によれば、薬師如来・十一面観音の両像と共に釈迦如来像が開創時に安置され、重要な存在となっていたといい、相模国風土記稿にも行基作の釈迦如来像をまつると記す。しかし、右手第1・第2指を捻じて胸前で屈し、左手も第1・第2両指を捻じて膝上におくこの像はあきらかに来迎印の阿弥陀如来像である。かつては釈迦如来の古像も安置されていたのであろうが、すくなくともこの像はそれには該当しない。現在鎌倉国宝館寄託中。



木造阿弥陀三尊立像



木造天台智者大師坐像



木造藥師如來坐像



木造月光菩薩立像



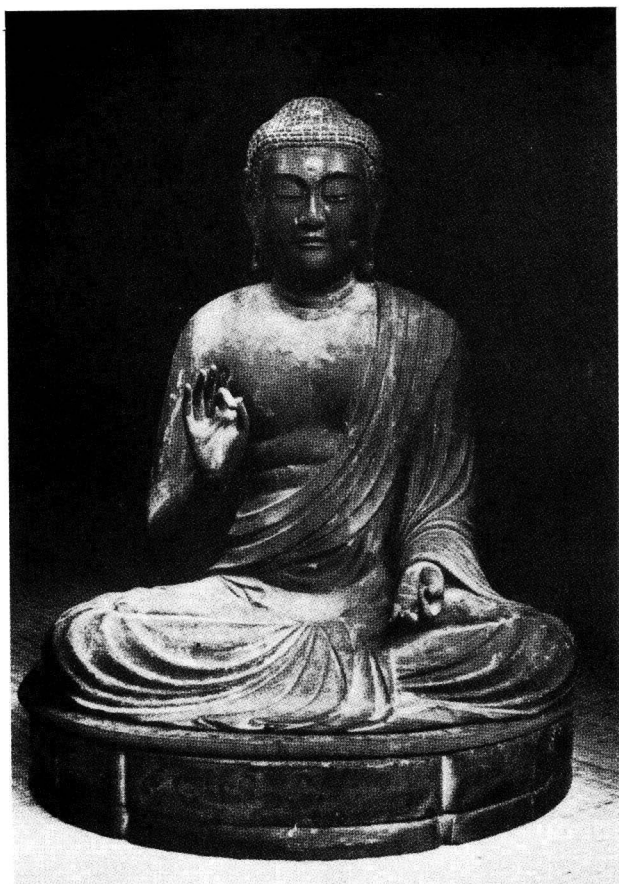
木造日光菩薩立像



木造十一面観音坐像



木造地藏菩薩半跏像



木造阿弥陀如来坐像



木造不動明王立像

古 文 書

貫 達 人

鶴岡八幡宮寺忌服定写断簡	37
禁 制 案	37
神武寺文書目録	38
分 限 書	41
相模国三浦郡医王山神武寺御縁起	45
朱 印 状 写	47

古 文 書

神武寺は寺史でも知られる通り、天保5年の火災などにより、古いものは殆んど失なわれている。昭和43年7月11日に予備調査を行ない、8月23日に目録をとり、一部の写真撮影を行なった。第2回目の23日には、神奈川県史編纂室からも、調査に見えた。保存状態は普通である。

神武寺文書のうちで、注意すべきものは、江戸時代に於ける寺の格を示す朱印状写、寺の成立にまつわる話を伝える神武寺縁起、勧進帳、また江戸時代の寺の様子を知る手がかりとなる略縁起、札銘、什物帳、分限帳、人別帳、海宝院との出入一件関係、明治初年の神仏分離史料等である。

以下、年代順にならべた文書目録と、一部の釈文を掲げて調査報告にかえたい。目録の作成に当っては、県史編纂室の目録も参考させて頂いた。また快よく調査に協力して下さい。所蔵者神武寺住職土屋慈順氏をはじめ、多くの方々に心から感謝の意を表わしたい。

○鶴岡八幡宮寺忌服定文写断簡（一通）

一 三ヶ日七日准之、一日以十二時可為限、

追加

一 高祖父母忌十日、服一月、

一 外祖父母忌廿日、服三月、

一 聞忌日数之中ニ聞之、残日計忌之也、

一 忌日数過聞之、半分之日数忌之、服過聞服、更ニ不可有之者也、

右之条々堅、可相守事、

文永七年三月九日

鶴岡山八正寺定之、

宝暦八^寅年十一月写之、

義蕃（花押）

○禁制案（一通）

禁制

一 軍勢甲乙人等濫妨狼藉之事

一 放火之事

一 田畠作毛蒯取事

付伐取竹木事

右条々、堅令停止訖、若於違犯之輩者、速可処蔽科者也、仍下知如件、

慶長五年九月廿七日

神武寺文書目録

文 書 名	年 月 日	形 態 数 量	備 考
1. 鶴岡八幡宮寺忌服定文写断簡	文永7・3・9	1 枚	宝暦8・11ノ写
2. 朱印状写	天正19・11～ 万延元・9・11	12 通 1 冊	別ニ元和3・3・23朱印状写1通アリ
3. 神武寺縁起	文禄3・正・9	1 卷	寸法タテ29.5cm、58代亭尊筆、別ニ文言ニ異同アルモノ1巻アリ
4. 禁制案	慶長5・9・27	1 通	別ニ写シ1通アリ
5. 阿弥陀如来台座再興札銘	慶長13・9	1 枚	
6. 神武寺住持世代		1 冊	開山行基ヨリ58代亭尊マデ
付阿弥陀如来胎内文書		2 枚	
7. 相州三浦郡桜山村田越浦浜由緒	寛文3・9	1 通	
8. 勸進帳	寛文6・9	1 通	永海書
9. 水帳控	元禄8・4	1 通	外3通ト1括ナレバ便宜合叙ス
同	○宝永5・6	1 通	
同	○安永2・3	1 通	桜山村明細御書上帳トアリ
同	○年月日未詳	1 通	覚トアリ
10. 御除地之覚	元禄11・2	1 通	
11. 覚	元禄12・3・11	1 通	早尾権現
12. 永代相渡候事	元禄14・12・28	1 通	法勝寺
13. 忍岡稲荷感夢記	宝永8・弥生	1 卷	願主永坂義富
14. 神武寺什物帳	正保4・正	1 冊	63代賢秀
15. 略年代記	享保4・9	1 冊	64世体安、書継ギ明治16年ニ至ル、タテ18.0cmヨコ12.5cm
16. 一札	享保11・11・7	1 通	手切金
17. 証文之事	享保14・11・7	1 通	
18. 神武寺什物帳	享保19・4	1 冊	当住体安トアリ
付建立寄附上野江書上候写			
19. 分限書	延享2・9	1 冊	神武寺外末寺3ヶ寺
20. 分限書	延享2・11	1 冊	同右
21. 相州三浦郡沼間村神武寺総門前論所絵図	延享3・8	1 舗	絵図師岩沢喜太夫判トアリ
22. 差上申一札之事	延享4・4・11	1 卷	神武寺海宝院境界出入タテ31.0cm
23. 分限帳	寛延2・5	1 冊	地藏院
24. 分限帳	寛延2・5	1 冊	観藏院
25. 長崎奉行返書案	宝暦2・2	1 通	对支那、上包アリ、タテ54.5cmヨコ67.7cm

26. 住持補任状	宝暦4・5	1 通	包紙付、67世玄道
27. 相定申譲証文事	宝暦9・6・20	1 通	地藏院
28. 寄附状之事	天明3・11	1 通	施餓飢料
29. 御朱印御改諸事覚	天明7・4	1 冊	
30. 差上申一札事	天明9・12	1 通	除地
31. 乍恐以書付奉願上候	寛政2・4	1 通	神武寺、海宝院境界出入外ニ写1通アリ
32. 相渡申質地証文事	寛政6・8	1 通	源左衛門
33. 借用申金子之事	寛政9・12	1 通	
34. 証文	寛政10・3	2 通	寄進
35. 証文	寛政13・正	1 通	寄進
36. 御尋之簡条返答書	文化11・10	1 冊	
37. 人別帳	文化13・6	1 冊	外3ト1袋ニ収メラレタレバ、便宜合叙ス
同	○天保5・8	1 通	
同	○弘化3・8	1 冊	
同	○嘉永5・8	1 通	
38. 一札	文化14	1 通	田畑ノ世話、他ニ案文1通アリ
39. 紅毛人見絵図類	文政元・5・14	7 枚	図、九里浜沖ニイギリス船漂着
40. 遺書	文政10・6・15	1 通	埋葬ニ付
41. 証文	文政12・11	1 通	田地寄進
42. 証文	文政13・12	1 通	施餓飢寄附、7通1括シアレバ便宜合叙ス
同	○天保3・11	1 通	
同	○天保9・7	2 通	
同	○年月日未詳	3 通	
43. 預金証文之事	天保3・11	1 通	寺領売渡、法竜院
44. 相渡申質地証文之事	天保5・5	1 通	文八
45. 御朱印御改之節積金請取 付同添書	天保9・5・4 天保9・5・4	1 通 1 通	寛永寺竜王院ヨリ
46. 客殿庫裡其外再建書上帳	天保14	1 冊	貫順控トアリ
47. 再建関係書類断簡	年月日未詳	2 枚	天保9年焼失ノ関係ナレバ便宜合叙ス
48. 御焼失ニ付御見舞物控帳	年月日未詳	1 冊	同上
49. 客殿庫裏再建成功之上上野宮様江 届出書并略図添	弘化2・6	1 通	1包ニナス、書上2枚 図ハ本堂図1枚ナリ
50. 証文	弘化3・10	1 通	屋敷地取替
51. 半鐘再建勸化功德名帳	弘化4・10	3 冊	
52. 先触	嘉永3・正・11	1 通	
53. 差上申一札之事	嘉永4・11	1 通	

54. 乍恐書付を以御届ヶ奉申上候	嘉永4・11	1 通	桜山太神宮再興
55. 往来一札之事	嘉永6・2	1 通	
56. 聞書	嘉永7・2・10	1 冊	ベリー本牧上陸
57. 御朱印改雑簿	嘉永7・8	1 冊	
58. 薬師堂修復諸控	嘉永7～安政4	1 冊	
59. 念仏行者全応一枚起請文写	安政2・8	1 卷	
60. 法竜院預物積立帳	安政2・11	1 冊	
61. 常灯明料積立帳	安政3・11	1 冊	
62. 地藏院観物取調帳	安政4・正	1 冊	
63. 差上置一札之事	安政4・3	1 通	質地請戻
64. 鐘楼棟上奉納連名	安政6・4・16	1 冊	
65. 鐘楼一字再建銘細帳	安政6・4	1 冊	
66. 定	万延元・7・29	1 通	職札トアリ、ナホ外ニ2通ノ受取リト1包トセリ
67. 檀鏡奉納請取控	文久2・7	1 冊	
68. 神武寺 薬師堂 租税録	明治2・4	1 冊	
69. 乍恐以書付奉願上候	明治2・6	1 冊	神仏分離
70. 差入申一札之事	明治2・8	1 冊	神仏分離
71. 奉願書	明治14・2	1 冊	住職三浦韶願ヨリ宝戒寺静川澄海充
72. 当山永代寄附金地方仕方勘定帳	年月日未詳	1 冊	裏表紙ニ69世現住実順記録トアリ、文政頃カ
73. 彫物諸請負	子・7・9	1 通	
74. 証文	辰・8・17	1 通	田地寄附
75. 証文	未・6	1 通	田地寄附
76. 覚	申・7・29	1 通	請取
77. 覚	申・8	1 通	請取
78. 御注文	戌・2・23	1 通	神鏡見積
79. 海宝院口上書之写	年未詳2・16	1 通	境界出入
80. 苗田之覚	年月日未詳	1 通	
81. 桜山村除地書上	年月日未詳	1 冊	
82. 什物帳断簡	年月日未詳	1 冊	
83. 仏像明細書断簡	年月日未詳	1 冊	14枚
84. 歴代住職命日記	年月日未詳	1 冊	
85. 色衣願遣目御札録控	年月日未詳	1 枚	
86. 乍恐書付を以御届奉申上候	年月日未詳	1 冊	天保5年ノ火事ニ付
87. 御朱印地田全図	年月日未詳	1 舗	
88. 御朱印地畑全図	年月日未詳	1 舗	

89. 神武寺実測之図	年月日未詳	1 鋪	
90. 神武寺境内本堂等絵	年月日未詳	1 鋪	
91. 神武寺建物見取図	年月日未詳	3 枚	
92. 神武寺所有山林等図	年月日未詳	1 枚	
93. 寺領耕地図	年月日未詳	12 枚	
94. 池子境絵図	年月日未詳	1 枚	
95. 天台法華宗之相承	年月日未詳	1 幅	応永30年ノモノノ写

○ 分限書（一冊）

（表紙）

「 相模国三浦郡沼間村
神 武 寺
分限書
同国同郡桜山村
三ヶ寺 」

宝戒寺末同国三浦郡沼間村

医王山来迎院神武寺

薬師堂領

一 御朱印高 五石

右者、同郡桜山村ニ御座候、

田貳反七畝拾三步分米三石 」

畑合五石内三石田方
貳石畑方

右取納米九俵位
麦四石位

御朱印内 東西貳百八拾間

一 境内 南北五百五拾四間
但車地藏ヨリ惣門迄之道除之、

西方院
上之坊 下内坊 向之坊 不動院 山王院
一 寺中旧跡 弥勒寺旧跡称号計申伝退転仕候、
外ニ自心院ト申寺跡他領ニ罷成御座候、

一 惣門 貳間ニ九尺
松井四拾老間 横三間貳尺、門ヨリ車地藏迄之山道
貳百八拾九間四尺 双方他領ニ而道筋計之事 」

一 薬師堂 八尺間三間四面 去享和二年後拝造足申候、
散物貳貫五百文程
文禄三年造立之由申達ス、

老宇

一 鐘楼堂 三間老尺ニ九尺 但シ円道代ヨリ玄道代ニ至リ新規

老宇

一 熊野三所宮 奥之院也、山頂ニ三峯在リ女人牛馬
禁制之處也、

一 山王宮 貳間三間
右境内ニ在之候、

老宇

支配之神社桜山村之内

一 牛招嶋 山王権現之牛王嶋ト号、尤当寺第一之由跡也、

一 牛王谷藏 御朱印畑統之山ニ有リ、山ニ牛王松ト云松有之、

除地

一 熊野権現社

有
式ヶ所

〃

一 早尾権現社

地藏院分
尅宇

〃

一 大神宮 桜山村中氏神也、

有
尅宇

〃

一 稻荷社

地藏院分在之
尅ヶ所地藏分 三ヶ所
尅ヶ所勤蔵院

〃

一 山神社

尅ヶ所観蔵院分
三ヶ所
第六天山ノ神観蔵院
山ノ神尅ヶ所地藏院

〃

一 第六天社

有
式ヶ所
地藏院分
勤蔵院分

〃

一 荒神社

尅宇

〃

一 材神社

尅宇

〃中里

一 神明宮

有
尅宇

〃

一 春日宮 右同郡池子村ニ有之候、

尅宇

〃

一 優婆神

尅宇

〃

一 地藏堂 尅間四方

尅宇

〃

一 石御堂 右式ヶ所桜山村之内也

〃

〃

一 弥陀堂 式間半四方 号仏光庵
池子村之内也、

尅宇

一 門徒

三ヶ寺

年貢地之分

桜山内

一 下ノ田七畝廿式步 此石五斗四升尅合三夕
取米六斗程

右之内年貢出方米三斗七升八合九夕七才

残而式斗式升尅合三才 寺徳 右者

太神宮山王権現御供料

一 下ノ田五畝六步 此石三斗六升四合
取米三斗八升位

右之内年貢米式斗五升四合八夕 残而

尅斗三升五合式夕 寺徳

一 上畑尅反八畝廿五步 此石尅石五斗六合七夕
麦式石程

右年貢永銭百九拾文

一 中畑九畝廿九步 此石五斗九升八合
麦尅石程

右年貢永錢九拾貳文

一 下_レ畑拾歩 此石壺升

右年貢永錢貳文八分

一 右年貢地惣合 田貳反貳畝歩
畑貳反九畝四歩

右年貢差引而六斗八合貳夕三才

麦□石程

一 檀那祈減共

八拾三軒

右取納金拾貳兩程

白米九俵程

右惣都合 玄米拾俵三斗三升貳合三夕
白米九俵 但三斗五升入
麦七石程
金拾貳兩程
錢貳貫五百文余

右之通相違無御座候、

延享貳_{乙丑}年九月

神武寺

神武寺門徒三ヶ寺

同国同郡桜山村

観蔵院

年貢地

一 寺地廿四歩 此石六升四合
永錢八文所年貢

屋敷添 反

一 下畑四畝九歩 此石壺石貳斗九合
取麦三石程内 年貢永三百三拾四文五分

〃

一 下_レ畑壺反一畝廿貳歩 此石三斗七升五合
取麦壺石程内 年貢永七拾四文九分

一 上田五畝拾三歩 此石七斗六合四夕
年貢米三斗貳升四合
殘而貳斗七升六合程

一 中畑貳畝廿八歩 此石壺斗七升六合
取麦貳斗五升程
年貢永廿七文三分

一 山壺ヶ所 錢貳百六拾九文年貢

一 祈願檀那

三拾軒

取納 錢貳貫五百文程
金三分貳朱程
白米三斗貳升程

都合寺徳 米五斗九升六合
麦四石貳斗五升
金三分貳朱
錢貳貫五百文程

右之通相違無御座候、

延享貳_{乙丑}年九月

観蔵院

神武寺門徒

同国同郡同村
法龍院

一 寺地貳畝四步 此石壹斗七升七夕
年貢永廿壹文

一 中田三畝八步 此石五升九合貳夕
取米三斗五升程
年貢老斗六升九合八夕

屋敷附

一 上畑三畝八步 此石八斗貳升六合七夕
取麥壹石程
年貢永百六文四分

一 中畑三畝八步 此石壹斗九升六合
取麥三斗程
年貢永三拾文三分

一 下畑貳反四畝八步 此石七斗貳升六合九夕
取麥五斗程
年貢永三百六拾文

右田畑合石盛貳石貳斗八升五夕

一 山壹ヶ所 山錢丁錢貳百貳拾六文

一 祈願檀那 貳拾軒

受納 金貳分式朱余 錢貳貫文余
白米貳俵余

都合寺徳 米八斗八升貳夕
麥貳石八斗
金貳分式朱
錢貳貫文程

右之通相違無御座候、

延享貳_丑年九月 法龍院

神武寺門徒

同国同郡同村
地藏院

年貢地

一 寺地壹畝拾貳步 此石壹斗壹升貳合
年貢永拾四文四分

一 中田三畝步 此石三斗五升九合三夕
取米三斗程
年貢老斗六升九合七夕

除地

一 中田貳畝廿三步 此石壹斗六升六合
取貳斗三升程

右地藏御供料

一 中畑貳畝廿貳步 此石四升四合
取米六斗程
年貢永六拾貳文六分

一 上畑八畝廿三步 此石七斗壹合老夕
取麥九斗程
年貢永九拾貳文

一 下畑六畝貳步 此石壹斗八升貳合
取麥四斗程
年貢永四拾貳文四分

右田畑都合貳石四升四合四夕

一 祈願檀那 拾軒

取納 錢貳貫五百程
白米壹斗壹升程

都合寺徳 米貳斗四升三夕
麥貳石四斗三升
錢貳貫五百文程

右之通相違無御座候、

延享貳^ニ年九月

地藏院

(異筆)

「安永五^ニ丙^申九月

先年之通に相認指出相濟候、名主印形致指出、勿論本寺之奥印有之、上野へ指出申候、」

○ 相模国三浦郡医王山神武寺御縁起 (一卷)

相州三浦郡医王山神武寺は、往昔人王四拾五代聖武皇帝の御本願、行基菩薩の開山、文徳天皇の御祈願所、慈覚大師の再興也、預其濫觴を尋たてまつるに、神龜元年^{甲子}正月中の二日の夜、奈良の帝の御夢に、縦は晴明たりし東の空を叡覧御座に、妙なる雲の中に、金色の宝塔あり、薫風頻におのつから御戸開たり、内より青き衣着たる童女数多出て、玉の簾をかゝくれは、医王善逝の御影あらはに拝せ御座、仏御声を出て告曰く、我いま衆生済度の縁、扶桑に尽されは、法性に不還、畝火山の御陵を府の嶽に移てすまむ、山は夫熊野三つの峯に同しとて、御夢覚ぬ、最怖敷敷慮寛ならず、行基沙門に御尋ましますに、沙門答敬而云、御陵は世にしろしめさるるところなり、至るかな、神武の皇 我六合中心穂原の都に大殿造、五日の風静に、十日の雨露の恵、黎民安楽、御眸に洩るなは、天業伝て、千有余歳、久遠無種の方便、併衆師如来にて御座也、と答を申ければ、則勧請あるへきよし、宣下ましますにより、急き沙門此山に分入て、先一つの草字を結び、大誓願を起て云、伏乞某沙門不敏なりといへ共、末代の衆生のため、頓に生身の衆師如来を拝たてまつらはやとて、深く称名観念の窓の前に、彼尊容を待給ふに、遙成峯の嵐颯々と吹ては、寥々と物すこき折柄、傍成沢辺の大地破て、東の山の端に、拾一面観音の尊像明に拝れさせ給ふそありかたき、足白の鷹にめさるるゆへ、鷹鳥か嶽と云地のさけたるを涌出か沢と号とかや、或は無辺瑠璃光如来と顕れ、色々の値遇を成、娑婆に現、観世音三世の利生不浅とて、速に当山を開き、東の峯を本宮と定、御本地拾一面観世音^{御長三尺余寸の山、秘仏也、御垂跡は、}神日本盤彦の尊の御霊、北の峯を那智山と成て、御本地は釈迦如来^{御長二尺余の山、秘仏也、御垂跡は速玉男の神の御霊、}南の峯を新宮と察て、御本地衆師如来^{御長二尺五寸座像、三拾三年にて開帳あり、御垂跡は伊弉冉尊の御霊と崇たてまつり、}自行基一刀三礼の像を刻、各三所に安置したまひ、命に応て医王山神武寺と号す、斯廻当寺の草創也、然に其頃麓の南沢と云所に、大成沼あり、沼中に七つの頭に角生たる毒蛇住て、往来の煩となり、又は当寺参詣の輩のさまたけとなる。沙門考見給ふに、其古、和州孔舎衛坂にて、神武の諸皇子と戦し、長髓彦の怨霊成とて、諏訪七所大明神と祝ひ物し給ふ、誠に五衰桑海の苦、忽に尽けるにや、其後ハ子細なし、今の諏訪大明神の御社、是也、沼は埋て、今の沼間村の里なり、然而、后は代々の御門の御祈願所と成、親王、摂家、將軍家尊敬の霊場也、毎年極月末には、十陵八墓のこくとに、勅使を立らると云伝り、中にも文徳天皇の御宇 天安元年^{丁丑}兵革国^ニに蜂起し、諸所の御修法ひまなし、叡山第二の座主慈覚大師に詔を成、当山において、不退の御祈禱あり、御願成就御座によりて七堂大伽藍を御建立、九拾九所の王子の御社迄、善美を尽、其外終るるを續て、廢たるを起しめ給ふ、前に某沙門の刻る本宮の拾一面の像、那智山の釈迦如来の供像破壊御座故、大師自古きに准、一刀三礼而新に刻、安置せらる、山中に殊に清浄の地を択て、日吉山王大権現の御社を立て、永く當時の鎮守と崇、数多の社領を寄せせらる、加之重て詔命を下て、本基の法相を改、台宗と令

成給ふ、大師数々入院したまひ、諸仏証己の法文周備なれば、恰も修学の賢才于茲伴ひし、一乗の法流、花を飭り、奥の院を女人禁制の山と定掟て、御堂の此方に、牌文を建らる、其文に曰、抑諸仏之慈悲、雖無偏頗、十二願王之求長寿、得長寿利益尤超世、兼又脇士日光月光、照尽夜昏暗、濟一切群類、十二神将七千夜叉者、往古の如来、深仰之大士也、隱法性肌、現忿怒形、飛行大千界、時々除災難、刻々令給無数逆類破魔軍、依報正報、何不得其利、誰不遂彼益、開山顯一峯高^{ト云}、牌文所々消残て于今あり、寿永二年^{癸卯}將軍頼朝公御参詣ありて、平家追討の其ために御建立、殊更拾二寺院を営て、常法華三昧の道場と成て、高雄の文学聖人を住職と定らる、^{行基より三十八代に当り}法花読誦の庭には七宝の花咲、五逆の衆輩積善の士、相友に所求の願望を満けり、翌年元暦の始正月九日、参拾余町南田越の浦浜に山王権現の御社を建、御旅殿として始て神輿を渡る祭礼の式嚴重也、三浦の一門^并氏人等執行す、数千貫の所を寄、神領其外法花三昧の供と定らる、建保六年^{庚寅}同將軍実朝公、右大臣に成給ふ、御嘉のため修理を加、寺務山林以下右大将家の例に可任の旨、御教書を被成、光嚴院の御宇、正慶元年^{壬申}伽藍及小破故御修覆御座、崇光院の御宇、観応元年^{庚寅}御建立御座、鎌倉の宝戒寺の第二代慈眼和尚を住呂と被成、円観聖人の御弟子円頓戒の祖師、俗性は高氏公の第三男也、凡当山は九品安養の峯平に、妙覺五智の靈窟、四生濟度の衢として、真如の相明也、されは土農工商にかきらず、祈念の功露不空、諸願現当の思ひ、成就を得り、往者久寿の頃^(昔)にや、三浦荒次郎義澄も当山を信て年久し、故其名を天下にしられて後、成仏得脱せりとかや、古墳今寺前にあり、和田小太郎義盛、朝比奈三郎義秀等皆信心の力にて冥護あり、しかも功名富貴し、伏見院の御宇、正応三年^{庚寅}の春、大唐高麗の舞師、本朝神楽博士從三位中原の光氏と云仁、世を遁て後、日本国を順礼し、猶東雲の方に趣しか、一夏の間、当山に籠居て、身の罪障を祈けるに、薬師如来告曰く、弥勒の出世其暁を待へき地也と、光氏感涙を流て、自五尺計の石の弥勒仏を刻、同長月五日行年七拾三歳にして入定す、花降紫の雲来て、遺窟より光明を放と云へり、其靈仏前成岩窟の内にあり、かゝる難有き貴院、星霜めてたくふりゆき、去ル元弘建武の世の乱にもつつかなき所に、如何成天災不能遁事にや、後柏原院の御宇、永正四年^{丁卯}十一月始の七日、火出来て神社仏閣凡て三百余ヶ所一時の灰燼と成、靈宝記録梵器の類皆悉焼亡し、漸く西聖作の本尊のみ宿老是を守護し、或は又如来神力を現て煙中を踊出給ふ共伝、厥より当寺大ニ廢てなきかことく成に、正親町院の御宇、北条氏直卿さはかりの伽藍零落を悲給ひ、八劫に触仰て、三所の御堂を建立して百余石の神領を寄らる、天正八年^{庚辰}三月二日、本宮の女人禁制可任恒例の旨沙汰せられ、猶以諸舎の絶たるを建立あるへきのよし、促さるるの処に、同拾八年^{庚寅}七月七日、小田原落城の砌より、自然に又衰、古の精舎の跡のみ残り、神領も山林も讒に残りたり、唯恨らくは、聖主来迎の地、鎮護の祈閣、莊嚴の規場、衆生極樂往生の御寺衰、松柏嵐に咽て不言、旧社守人まれにして昔語に成ぬる事を、昨日は玉樓の楽、唯幻の今日の草の戸、葎か軒の露時雨、流石に墨染の袖を不許、倩有為の断を案るに、是生滅の形を顕し順逆の縁弥増、諸法実を示給ふ成へければ、還て三つの宝嶺を拝たまつり、後の世の導種にもやと、ここかしこ、拙き端記を除て要をとって以謹而記す、

于時文祿三年^{甲午}正月九日

当寺五拾八世前住呂

亭尊沙門敬九拜

○ 朱 印 状 写 (一冊)

1. 徳川家康寺領寄進状案

薬師堂

寄進 薬師堂

相摸国三浦郡神之嶽沼間郷内五石事

右、令寄附訖、殊寺中可為不入者也、仍如件、

天正十九年^{辛卯}

十一月日 御印

○コノ文書、原本ハ折紙ナルベシ、

2. 徳川秀忠寺領寄進状案

薬師堂領相摸国三浦郡神之嶽沼間郷之内五石事、任去天正拾九年十一月先判之旨、永不可有相違之状如件、

元和三年三月廿三日 御印

○コノホカ 寛永十三年十一月 九日

寛文 五年 七月十一日

貞享 二年 六月十一日

享保 三年 七月十一日

延享 四年 八月十一日

宝暦十二年 八月十一日

天明 八年 九月十一日

安政 二年 九月十一日

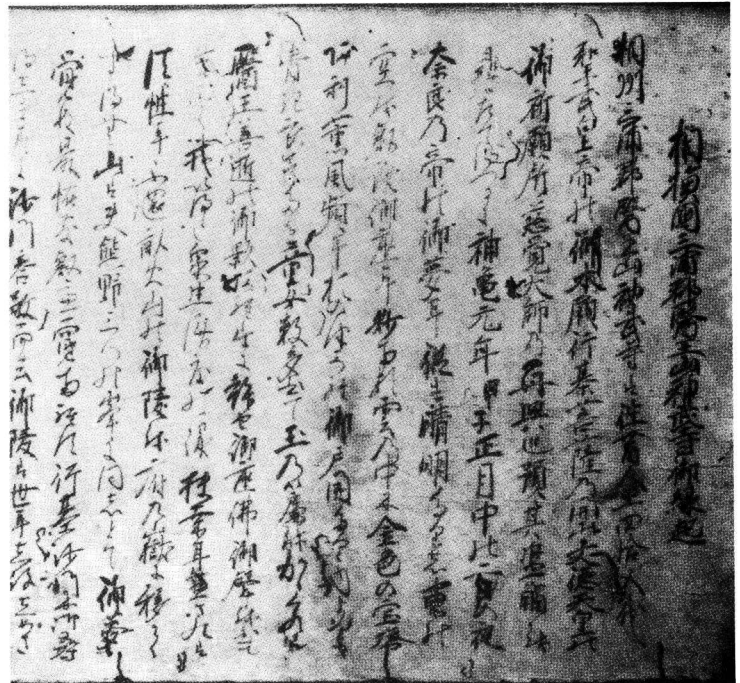
万延 元年 九月十一日

天保 十年 九月十一日

ノ十通アリ、省略ス、ナホ年次整ハザレドモ、原本ノ順ニヨリテココニカガ、



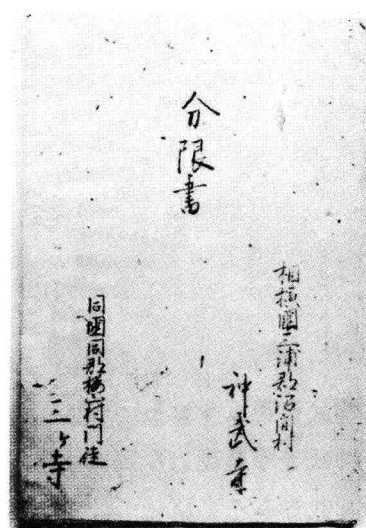
鶴岡八幡宮寺忌服定文写



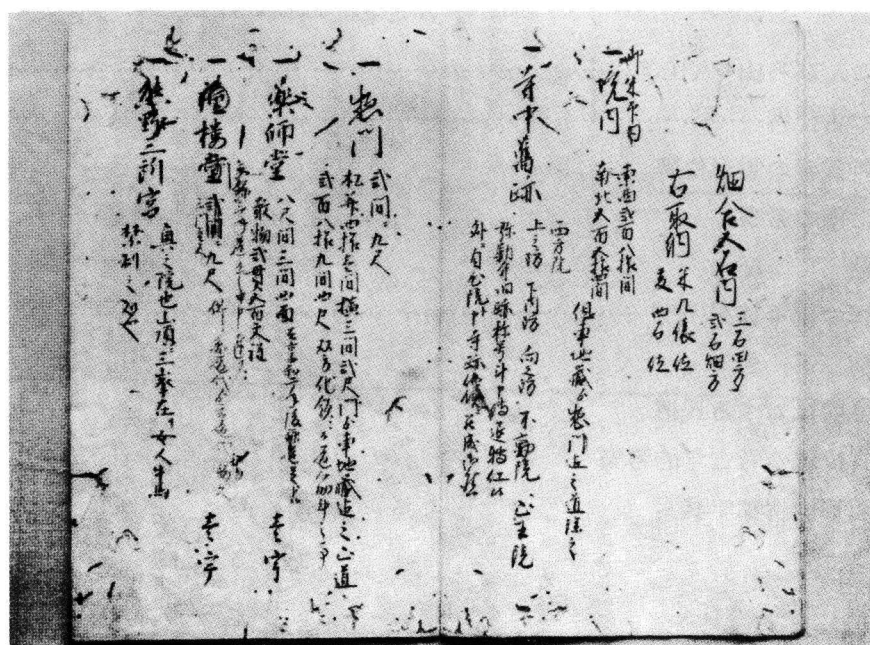
相模国三浦郡醫王山神武寺御縁起



分限書（第一頁）



分限書（表紙）



分限書（第二、三頁）

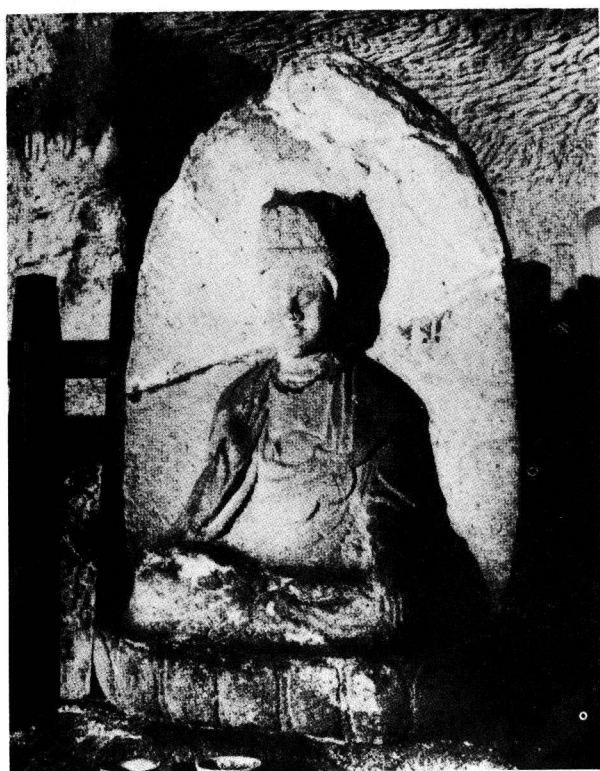
古 考

赤 星 直 忠

神武寺親王やぐら	59
神武寺庫裏後方の宝篋印塔	60
神武寺みろく窟	61
(1) 所 在	
(2) 伝 承	
(3) みろく窟	
(4) 周辺のやぐら	
(5) 考 察	
(6) 総 括	
神武寺こんびら山やぐら群	68
神武寺の古位牌	76
(1) 神武寺の雲形位牌	
(2) 形態の考察	
(3) 結 び	
雲形位牌の編年試案	77
(1) 前 書 き	
(2) 位牌に対する民俗	
(3) 古位牌の考古学的考察	
(4) 雲形位牌編年試案	



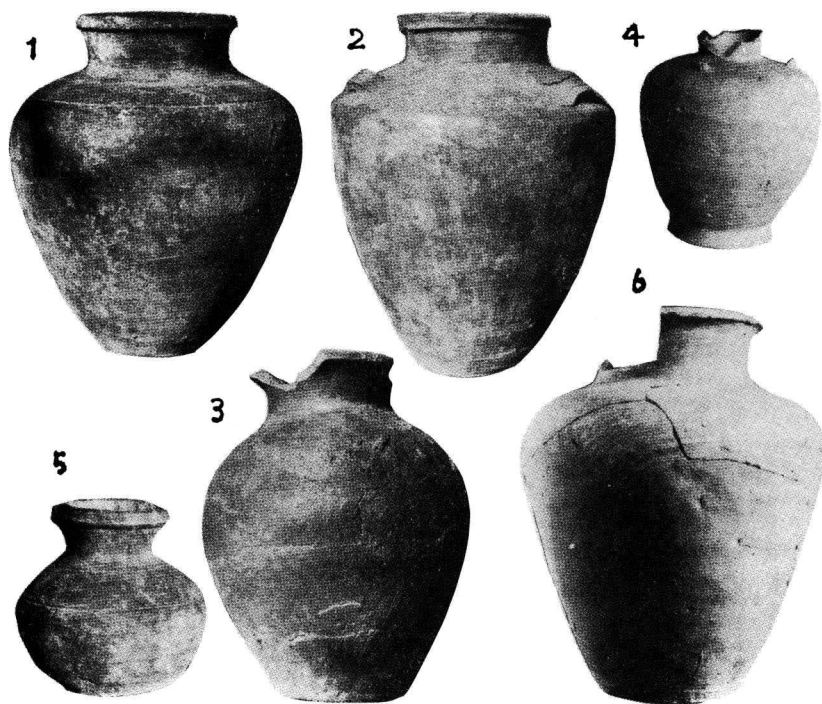
神武寺親王やぐら



上 みろくやぐら群
下 みろくやぐら内石像

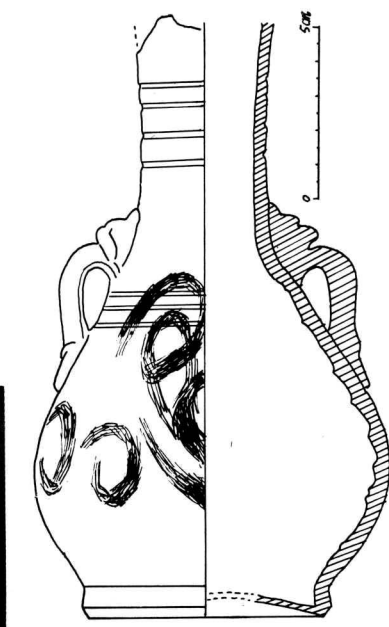
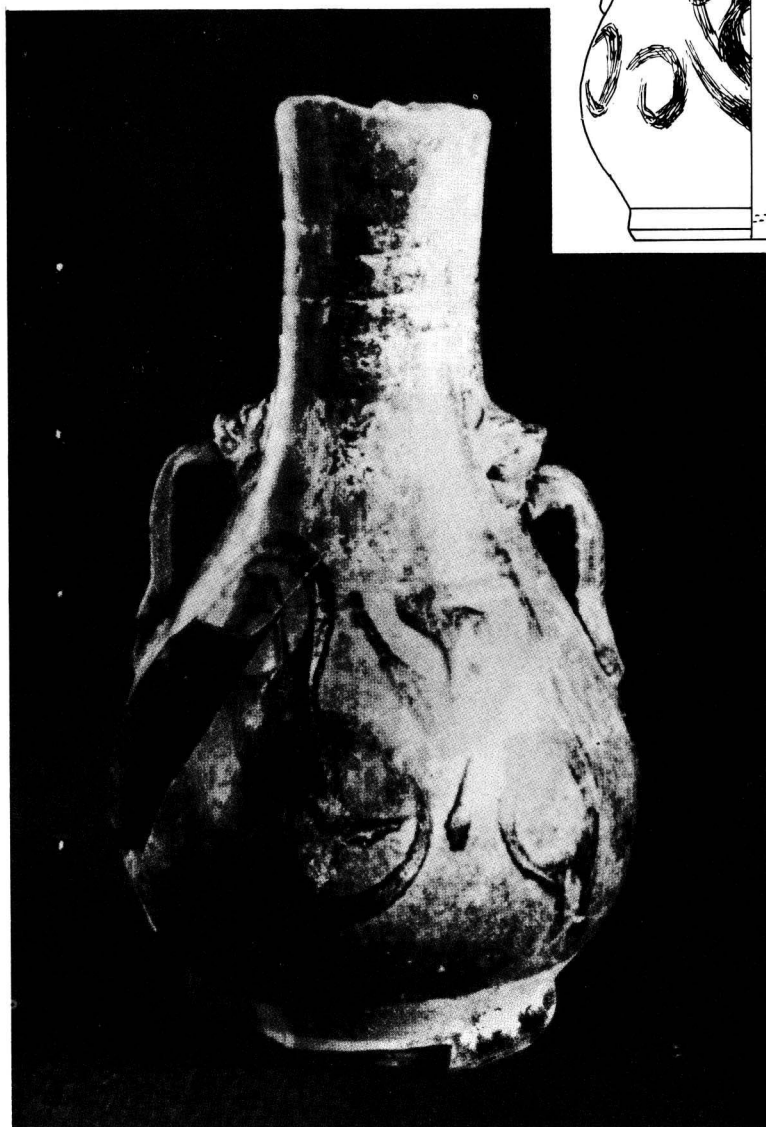


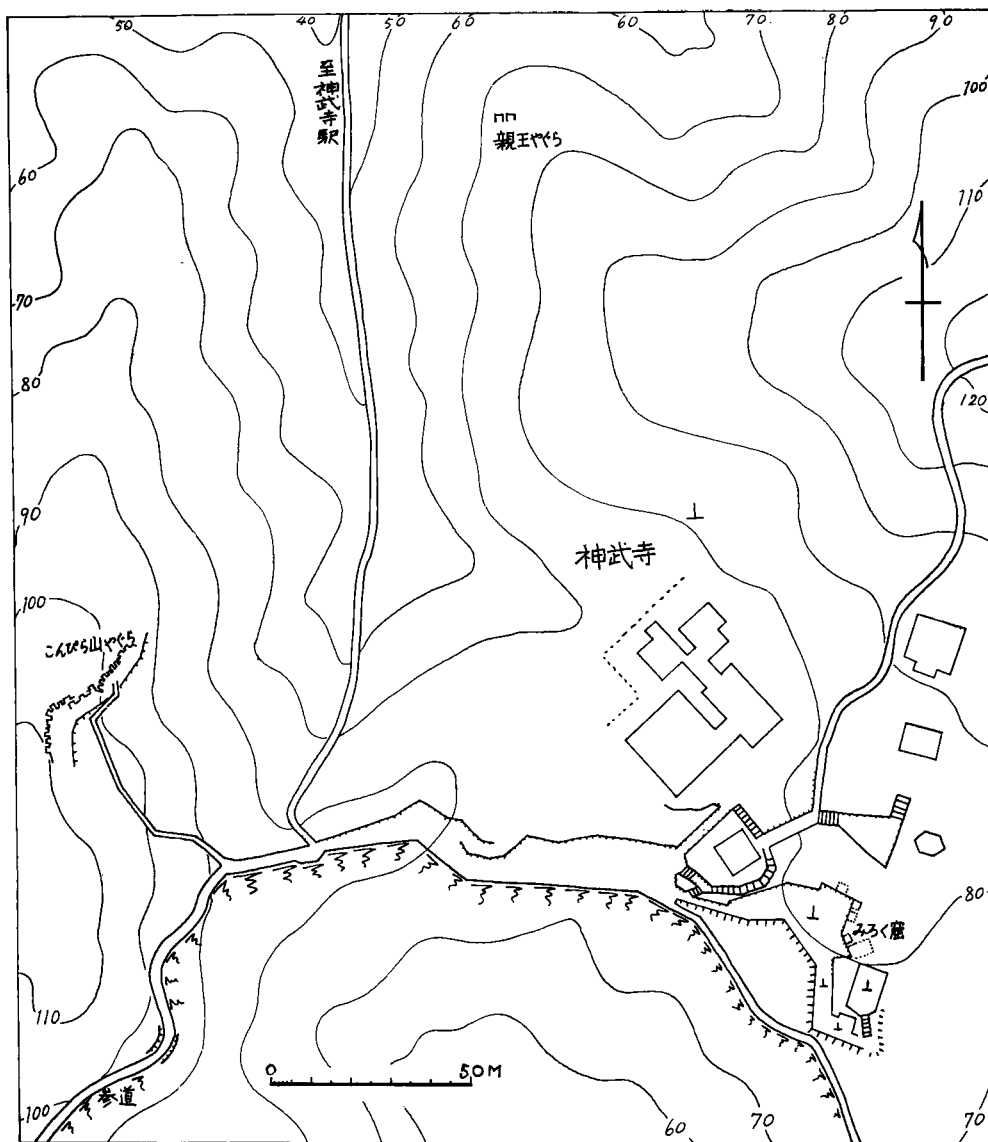
神武寺こんびら山やぐら群



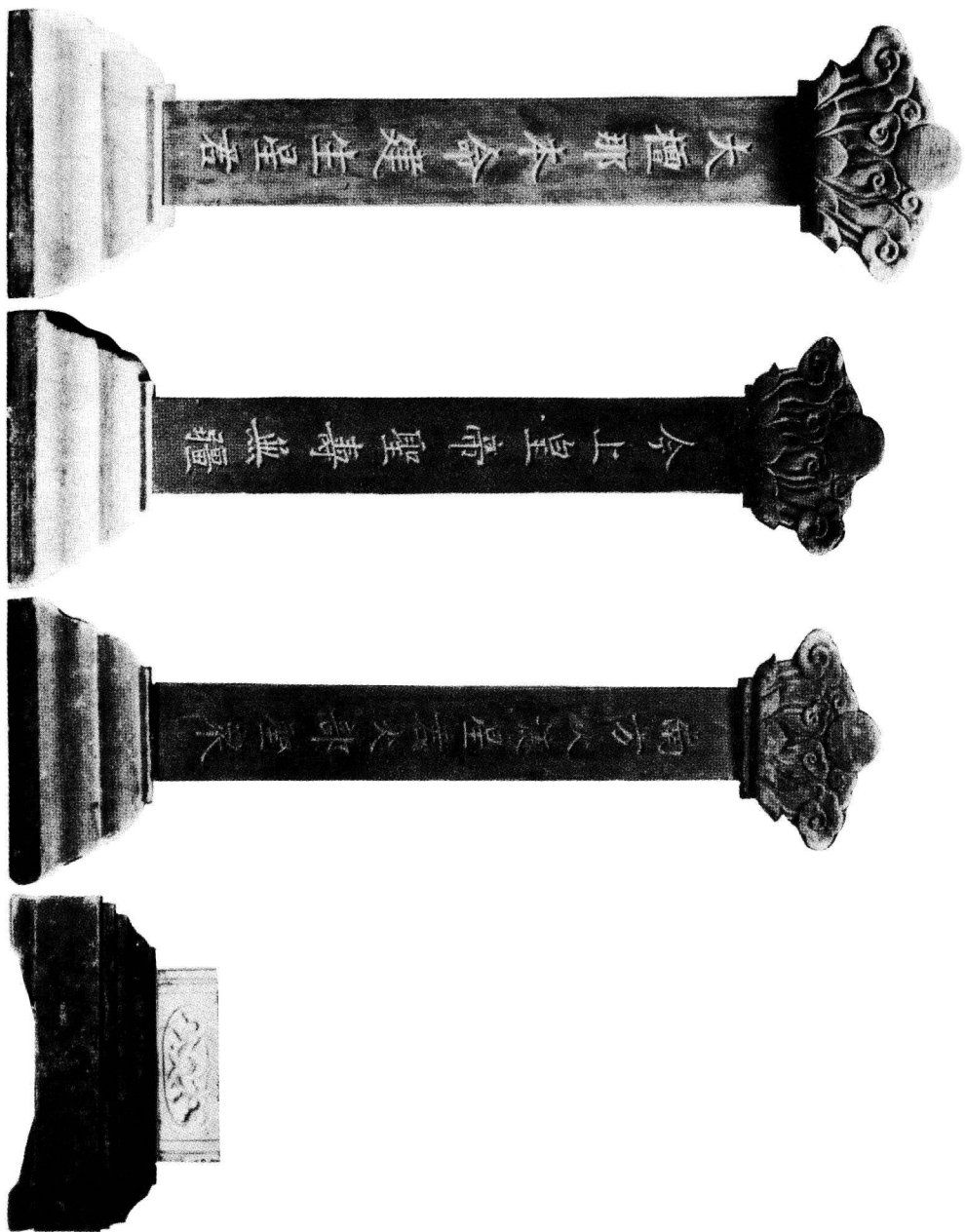
こんびら山やぐら群出土蔵骨器

神武寺こんぴら山やぐら出土
緑釉鉄絵双獣耳瓶

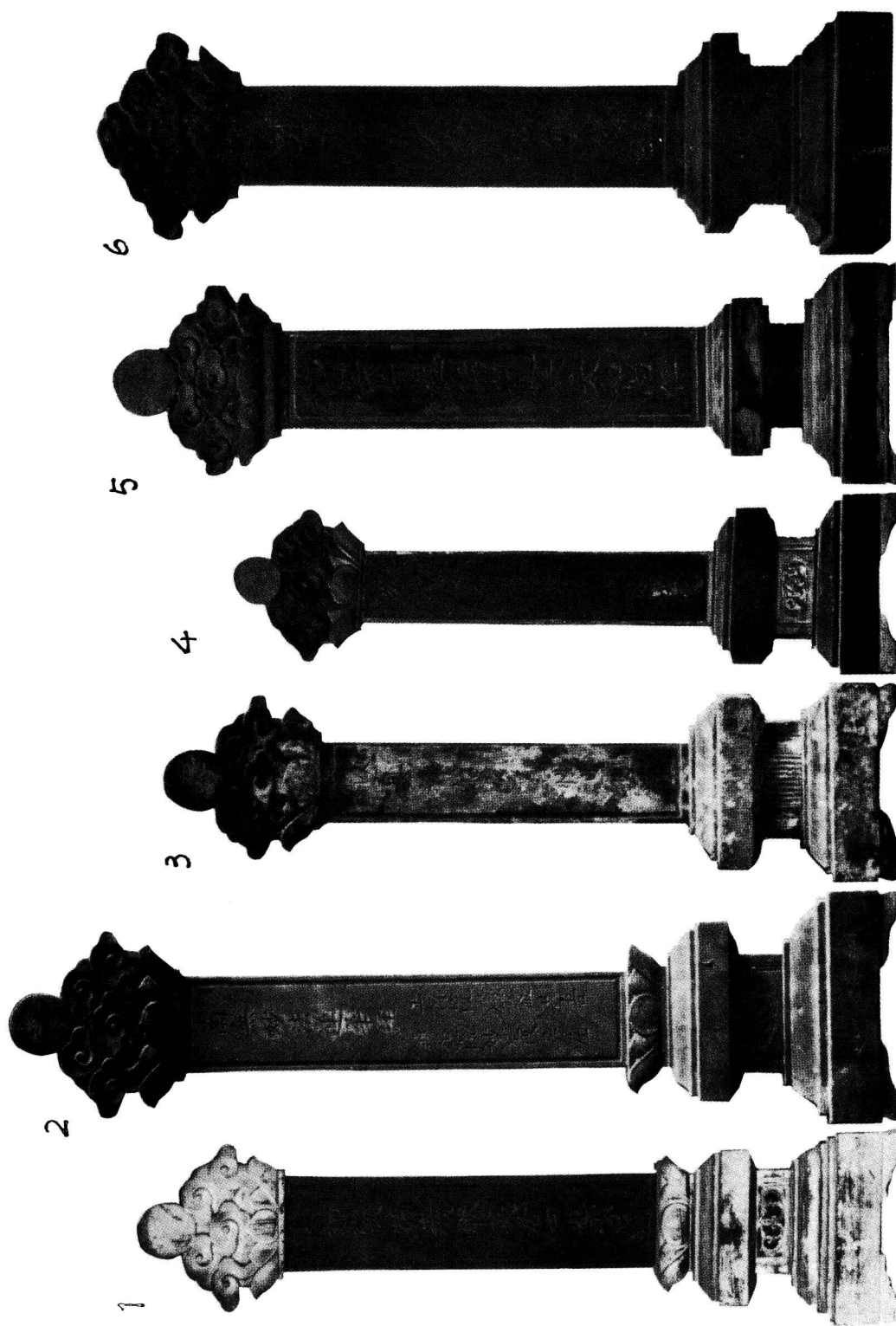




神武寺境内やぐら分布図



神武寺古位牌



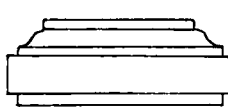
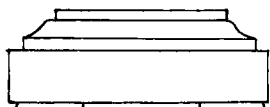
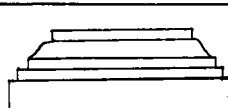
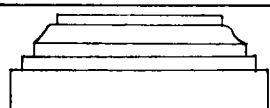
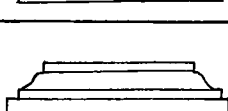
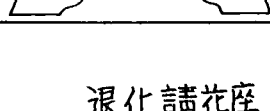
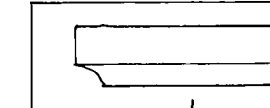
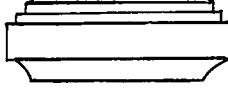
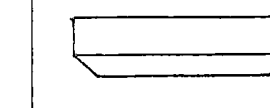
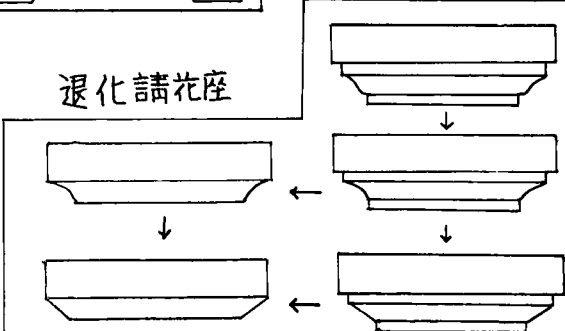
5 延命寺 (慶長15)
6 延命寺 (永禄3)

3 妙光寺 (万治2)
4 延命寺 (宝永7)

1 海宝院 (延宝2)
2 妙光寺 (寛文11)

第一図 位牌の代表的形態

第二図 雲形位牌の部分形態変化

雲形と蓮座		基台の中腹																																											
慶長以前		元和以後																																											
雲形	1 	日輪雲形	5 																																										
	2 		6 																																										
	3 		7 																																										
	4 																																												
日輪雲形		雲形と蓮座の例 <table border="0"> <tr> <td>1</td><td>海蔵寺</td> <td>3</td><td>永正寺</td> <td>5</td><td>年々寺</td> </tr> <tr> <td>2</td><td>善光寺</td> <td>4</td><td>永正寺</td> <td>6</td><td>年々寺</td> </tr> <tr> <td>3</td><td>新延妙光寺</td> <td>5</td><td>永正寺</td> <td>7</td><td>年々寺</td> </tr> <tr> <td>4</td><td>海蔵寺</td> <td>6</td><td>永正寺</td> <td></td><td></td> </tr> <tr> <td>5</td><td>善光寺</td> <td>7</td><td>永正寺</td> <td></td><td></td> </tr> <tr> <td>6</td><td>新延妙光寺</td> <td></td><td></td> <td></td><td></td> </tr> <tr> <td>7</td><td>海蔵寺</td> <td></td><td></td> <td></td><td></td> </tr> </table>		1	海蔵寺	3	永正寺	5	年々寺	2	善光寺	4	永正寺	6	年々寺	3	新延妙光寺	5	永正寺	7	年々寺	4	海蔵寺	6	永正寺			5	善光寺	7	永正寺			6	新延妙光寺					7	海蔵寺				
1	海蔵寺	3	永正寺	5	年々寺																																								
2	善光寺	4	永正寺	6	年々寺																																								
3	新延妙光寺	5	永正寺	7	年々寺																																								
4	海蔵寺	6	永正寺																																										
5	善光寺	7	永正寺																																										
6	新延妙光寺																																												
7	海蔵寺																																												
基台の框座		中腹の例																																											
上 框		下 框																																											
A 型		B 型																																											
																																													
																																													
																																													
B 型		C 型																																											
C 型		D 型																																											
		退化請花座 																																											

考 古

神武寺親王やぐら

伝称 神武寺境内に「親王やぐら」というのがあることは古くから知られ、新編相模風土記三浦郡神武寺の項に「久明親王廟」山上の洞中に五輪塔あり、文字漫滅せり。庶人猥りに此に至れば祟ありと云ふ。鬼簿に親王、嘉暦三年十月十四日、五十五才にて薨ずと見ゆ。一鎌倉武将執権記を按ずるに『親王は正応二年十月廿五日鎌倉に下向。十一月九日將軍となる。延慶元年七月十九日歳三十二にして上絡。嘉暦三年十月十四日薨ず』と見ゆ。然れば此地の廟は遺骸を収めし所にはあらず。想に御子守邦親王など造立せられしならん。」とあり、今も村民は親王やぐらに近ずくとおこりをふるうと信じて近ずかないという。

所在 やぐらの所在については一般に知られていない。里人はおそれて近よらないし、寺でもあえて知らせようとしなかったからである。やぐらは神武寺庫裏の後方、北々西 150 メートル余を距てた尾根先（標高70メートル附近）にあり、尾根先に露出する大岩の東側を巾3メートル余、長さ6メートル余切り平らめて平場としたものをやぐらの前面としている。

やぐら状況 やぐらは二穴ならび、ともに前面が崩壊したものの如くみられ、前壁が存在しない。ともに南西を主軸とし、流入土と枯葉で相当埋もれているものと思われる。

左穴…流入土上より天井まで65センチ。奥巾105センチ、奥行約100センチ。中央に凝灰岩製五輪塔が立ち、その奥にやや大きい別の五輪塔水輪（凝灰岩製）1個が横たおしとなり、右奥に地輪かとみられるもの（風化して明らかでない。凝灰岩）1個が存する。この岩の上に径10センチ余の礫1個とその傍に5センチくらいの礫1個がある。

右穴…流入土上より天井まで70センチ。奥巾155センチ、奥行75センチ。奥壁は胴張になっている。内部左よりに凝灰岩製五輪塔一基が立つが、空風輪を欠く。右方と奥とに凝灰岩塊がある。左隅と五輪塔の左側とに長15センチ巾6～7センチの礫2個がころがっている。

考察 2個のやぐらは鎌倉あたりにある前壁をそなえた鎌倉期のやぐらにくらべると、ともにかなりよいかげんな形であり、前壁を退化した室町期のやぐらに近い形と大きさをもっているが、発掘によって前壁残存の有無を調査していないので、これが前壁が崩壊してこの形になったものか、当初からこの形であるのか不明である。当初からこの形ならば室町期のものであり、前壁が崩れたものであれば鎌倉後末期のものとなる。あるいは後世やぐら状に作ったものと考えられないこともない。

内部にある五輪塔はもちろん当初からこの形のままとは考えられない。積みかえられたものであろうし、左穴内にころげた水輪はかなり大きい五輪塔のものである。現在立つものは地輪の半まで埋もれて

いるが、流入土の状態からはもっと埋もれていてよいはずであるから、後世現在位置に積みなおしたもののとしてよい。

やぐら内に礫が数個あったが、それらの礫がやぐら内にあることは普通のことであるが、流入土の上にあるべきものでなく、床面に接しておかれてあるべきもので、鎌倉での出土例からすれば、それらは鎌倉期の写経石であるはずであるが、これらに墨書は全く残っていない。

以上を総合すればやぐら形態からは新古決定しかねるが、五輪塔は鎌倉後末期のものであり、写経石もその頃のものとして判断される。しかし五輪塔は積みかえられたものであり、礫は最近やぐら内に入れられたものと考えることが可能である。おそらくやぐら附近の清掃中鎌に当たったものが入れたとすべきであろう。古来崇ありとされてはいたが全然手をふれていなかったと考えることはできない。久明親王墓との伝承に対してはこれを裏書する何ものもない。ただ寺の過去帳14日のところに「嘉暦^戊 年十月」久明親王「鎌倉第八、五五才房納」と記されており、寺ではそのあたりにあったと伝える「上の房」に遺骨が納められたことと解している。現庫裏から親王やぐらへ至る山路の中途に、東側は山腹を切りこみ、西側には土塁をもつ巾8メートル長さ23メートルほどの南面した平場があり、これを上の房あとであろうと考えている。

総括 庫裏後方150メートル余はなれた尾根先の南側に親王やぐらと称される二穴のやぐらがある。

五輪塔などは鎌倉後末期の形式のものであり、時間的には伝承と大体近いころのものであるが、果して久明親王に関係あるかどうかはわからない。本来これら五輪塔は供養の塔婆であるから、相模風土記の考えるような供養塔が建立されなかったと断ずることはできないであろう。

神武寺庫裏後方の宝篋印塔

庫裏後方に畑地と竹林とになっている平場があり、その北側山腹のわずかな平地に、安山岩製宝篋印塔の断碑が数個ころがっている。笠部や基台部の形態は室町期のものである。基台の1個に『明参「大師」『応永十』八月廿六』とみられる。世代中に明参大師と呼ばれる僧はない由であるが、現実に石造供養塔が存在する以上、室町初に、神武寺にその名の僧侶がおり、入滅後このあたりの山腹に埋葬されたとすべきであろう。

神武寺みろく窟

1. 所 在

逗子市沼間、神武寺墓地の一隅にある。神武寺墓地は鐘楼の東南下にあり、墓地に面する崖には岩窟がならんでいるが鎌倉期の「やぐら」もあれば、江戸期以後に作られたものも混じっている。この岩窟中右端の大きい一穴がみろく窟である。

2. 伝 承

この岩窟中に弥勒仏石像があることは新編相模風土記にすでに記され（註1）、又三浦郡誌（註2）には「寺伝に正応三年從三位中原光氏といふ仁、世をのがれて後日本を遊歴して吾妻に來り一夏の間当山に籠て心願しけるに薬師如来の告を蒙り弥勒の出世其暁を待つべき地なりとて涙を流し自ら五尺斗の石の弥勒仏を彫刻し同長月五日行年七十三にて入定す。」即ち、この石像は中原光氏作のもので、この窟はその入定窟であると信ぜられていた。本像についてはかつて「史跡名勝天然記念物誌」第6集に岡山泰四氏が「逗子神武寺石仏に就て」として報じている。尚本窟については筆者が昭和34年「神奈川県文化財調査報告書」第24集に報じた。

3. み ろ く 窟

みろく窟はもと入口の左右から岩壁がせまって羨道（長さ100センチくらい）を形成していたものだが崩壊して今はその痕跡を残すにすぎない。窟は奥行640センチ、巾464センチ。ひくい合掌形天井で高さ312センチの大きいものである。奥壁中央に横長の大きい「がん」があり、右壁に4個、左壁に横長に大きい1個のがんが作られ、それらには神武帝時代の墓碑が並べられている。奥壁のものを除くこれら左右壁のがんは江戸時代の後刻である。奥壁にある横長のがんは間口218センチ、高さ115センチ、奥行204センチあり、底面中央に径1メートルの丸形大穴がある。

窟中央には奥壁から1メートルばかりへたてて凝灰岩の台石（巾74.7センチ、長107.5センチ、高36.3センチ）をおき、その上に弥勒仏石像を安置している。この石像は安山岩製の一石一尊仏で総高140センチ。像高86.3センチ。厚肉彫。舟形光背を負い、蓮座上に結跏趺座し、頭には宝冠をいただき、右手は屈臂外掌、左手は膝上にたれている。本像は折損したものをセメントでつぎあわせたので、光背3ヵ所、頸部1ヵ所につぎめがある。指先にも折損がみられる。顔は一見、長味があるようにみえるが、これは宝冠をかぶるためで、よくみると丸味のある頬、高い鼻、笑をふくむかにみえる口など、相当の作である。衣文の様子といい、蓮座の様子といい、鎌倉末期の達者な技法を示すものとみられる。蓮座の後面は舟形光背の下方に接しているので省略されている。蓮弁はふくらみをみせているが力が弱く、先端の反転のようすは大部分が欠損していて充分みられない。舟形光背は背面までよく形作られており、下方に左の銘が刻まれている。

大唐高麗舞師

本朝神楽博士

從五位上行

左近衛將監

中原朝臣光氏^{□年}_{七十三}

正応三年^庚_□

九月六日

4. 周辺のやぐら

みろく窟周辺の旧状はわからない。現墓地の北側から東側にわたって、大小の岩穴が崖に堀りこまれており、それぞれ墓穴として使われている。みろく窟をふくむ13穴について検討してみると次の通りである。番号は左から数える。

1号穴 前半が切り崩されたものか奥壁とそれにつづく壁が50センチばかり残る。新古不詳。旧床面と思われる部分に土が積みあげてある。

2号穴 前壁をもつやぐらの形を備えている。右壁ぞいに低壇がある。左壁中央に「がん」があるが後刻のようである。今この穴には歴代墓である無縫塔6基と地藏坐像1基のほか舟形碑3基が納められている。何れも江戸期のもの。巾225センチ、奥行184センチ。

3号穴 前壁をもつやぐら形。奥と左右とに低壇をもち、奥壁中央には更にがんがある。がん中には安山岩製大形の空風輪（南北朝期）があり、奥壇上には凝灰岩製火輪（鎌倉期）1のほか、江戸期の舟形碑3基がある。左壁には戦時中作られた防空壕がある。

4号穴 前壁をもつやぐらの形。奥と左右に低壇がある。現在長谷川春男氏方墓地として使われているが、内部の墓碑は長谷川氏祖先として供養されている。奥壇上には凝灰岩製五輪塔2基（何れも鎌倉

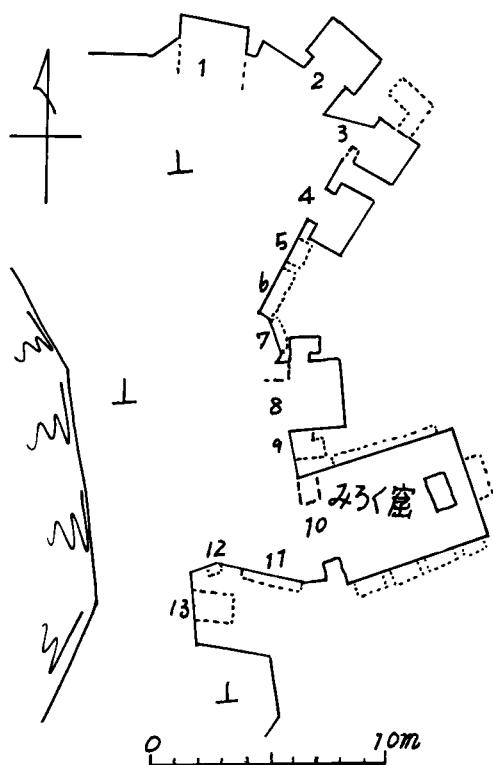
期）と地輪2、安山岩製南北朝期五輪塔1基（地輪欠）、雑然と積みあげられた安山岩製小形五輪塔、宝篋印塔（南北朝乃至室町期）数基のほかに江戸期墓碑3基がある。窟内に写経石に使われたと思われる大形の礫が10個ばかりあるが文字は残っていない。

5号穴 明らかに後刻の浅穴で、江戸期墓碑を納めている。

6号穴 5号穴に同じ。

7号穴 5号穴に同じ。

8号穴 現状では前壁を全く失った形であるが内部のがんや壇の形式は鎌倉期やぐらと同じである。左壁にやや大きいがんがあり、内部に雑然と五輪塔や宝篋印塔がなげこまれ積みあげられている。安山岩製のものと、凝灰岩製のものとあり、形式上大部分が室町期であるが、室町最末期のものもみられる。奥壁に接して二段からなる壇があり、江戸期の墓碑がならんでいる。奥壁高所に横長のがんがあり、安山岩製五輪塔・宝篋印塔がならんでいる。鎌倉期室町期のものである。窟外に写経石に使われたと思われる礫が散在す



みろくやぐら群

るが文字は残っていない。

9号穴 前壁がないが奥壁にがんがある。8号右壁のがんであったかもわからない。江戸期墓碑が納められている。

10号穴 みろく窟とよばれる穴。前壁をもつやぐらの形。詳細はみろく窟の項に記した。左右壁にあるがんは江戸期に作られたもので江戸期の無縫塔、板碑形碑などが納められている。神武寺世代墓である。

11号穴 明らかに後刻の浅穴で江戸期墓碑を納めている。

12号穴 11号穴に同じ。

13号穴 前壁を失なったやぐらのようにみえるが確実にやぐらだとはいききれない。江戸期墓碑を納めている。

5. 考 察

い みろく窟

鎌倉およびその附近には山腹を四角にくりぬいた岩窟が多数あることが知られており、方言ではこれを「やぐら」とよんでいる。鎌倉期から室町期にわたっておこなわれた墳墓窟で、岩窟の多くは納骨所の意義をもつものである(註3)。鎌倉期やぐらの多くは2メートル四方くらいの大きさを持ち、前壁中央に出入口としての羨道がある。みろく窟はそれにくらべると大きい部類に属する。形態上から鎌倉期のものであり、みろく石像背銘年代と一致する。鎌倉附近にあるやぐらはおそらく千以上にものぼるであろうが「やぐら」中に仏像を安置する例は稀ではない。多くは地藏像を安置する。本窟と似た状態で安置された主な例を左にあげる。

イ 鎌倉市二限堂覚園寺裏山やぐら——所謂百八やぐら中に堀出地藏やぐらとよばれるものがある。この地藏は後に上方の別のやぐらに移されたが首を失ったので後補の首をつけている。両やぐら中間尾根の東側山腹の一やぐら中にも背面を後壁に造付にした地藏坐像がある。

ロ 鎌倉市報国寺谷やぐら——報国寺谷から逗子へ越える所謂巡礼路をのぼりつめた附近のやぐら内には地藏立像がある。逗子にむかってかなり進んだところにある左側のやぐら群の一穴にも地藏坐像がある。

ハ 鎌倉市扇が谷浄光明寺やぐら——古くから綱引地藏とよばれた安山岩製の地藏坐像がやぐら中に安置されている。背面に『供養導師性仙長老 正和二年十一月 施主真覚 大工宗□』と刻む(註4)。

ニ 鎌倉市名越谷奥やぐら——唐糸やぐらと俗称されるやぐらの南側山腹の一やぐらに首を失った地藏坐像がある。

ホ 鎌倉市光明寺裏山やぐら——安山岩製。蓮座上に坐しているがひどくいたんでいる。首は欠けたのを後世胴部と首部とに穴をあけてつないだらしいが今又落ちている。鼻先、右手、左手先などを失なっている。背面に『敬白□』奉造立地藏菩薩像一□』発願満福寺住侶教義 勧進聖尚養寺常住西連 右志趣者為結縁衆生安全 正中 二七 年丑 九月廿四日仏師沙弥□』と刻む。今境内に移されている。

以上のほか葛原岡北谷やぐら中にもある。鎌倉市西御門奥の山腹にある「朱だるきやぐら」（註5）には奥壁に舟形光背が浮彫され、その前に接して台座が残っているのは像を失なったものである。同十二所稻荷小路山腹の一やぐらから出土した瓦製小地藏坐像（註6）や同明王院前道路工事のとき、やぐら内から同じような小地藏像を出土したのも同意義のものであろう。これら地藏像をやぐら内に安置することは墳墓窟の本尊として、信仰する像を安置したものであり、この納骨窟としてのやぐらは当時おこなわれた法華堂や墳墓堂と同意義のものであり、墳墓堂に仏像を安置し、又はその絵像をかけたのと全く同意義のものであろう。したがってこれら墳墓窟としてのやぐら内には現存しなくても当初は仏像とか絵像とかが信仰の対象として安置されたと考えてよからう。覚園寺裏山やぐら群（百八やぐら——註7）中には壁面に阿弥陀と思われる立像の刻まれたものがあり、瑞泉寺裏山やぐら群（註8）中にも類例がある。又覚園寺裏山やぐら群中には壁面に梵字（弥陀、薬師、その他）を大きく刻んだものがあるのも同意義であろう。やぐら中央に大形五輪塔が安置されたり、奥壁や側壁に五輪塔を刻みつけたものがしばしばあるが、これは死者に対する供養のため造立された塔婆と同意義のものと考えられているけれども、前述の石像と全く同じあり方であるものは、五輪塔が胎藏界大日如来の三昧耶形とする密教の教理によってあるいは大日如来を安置するのと同じ心で造立されたものがないとはいえない。やぐら内に遺存している石像は何といっても地藏像が多い。これは鎌倉期に地藏信仰がさかんであったことのあらわれであり、諸寺にこの時代の地藏像の遺存するものの多いこともそのあらわれである。しかるに神武寺やぐらに一例だけ弥勒像のあることは平安時代からひきつづいた弥勒信仰の名残と思われる。

神武寺やぐら内のみろく石像は冠をいただいているが細部はあきらかでなく、よくみると相当丸味のある頬と、鼻筋の通った高い鼻と、微笑したかにみえる口や眼など、相当なできであり、指先や膝つきなどにぎごちなさはあるが、少々力の弱さを覚える蓮座の表現とともに鎌倉末期ごろの石造美術品として、間違ないものである。光背後面の刻銘はすべて中原光氏に対する肩書で、光氏が唐楽ならびに高麗楽の舞楽師であり、神楽博士であったこと、従五位上行、左近衛将監に叙せられたことを語る重要な資料である（註9）。「光氏」の下に小さく二行に刻まれた右側「□行」、左側「七十三」は「行年七十三」でなくてはならない。即ち光氏は七十三才で正応三年（1290）九月五日歿したことを示すものである。この銘文は後述の光氏に関する文献資料と相反するところはない。その字体をみても決して為にする後刻とみることはできないものであり、石像の示す年代と相反していない。

後壁にある横長の「がん」は本窟における納骨場所である。これは多くのやぐらの納骨例から考えると、火葬骨なら何十人分をも合葬すべき納骨穴であらねばならぬが、火葬せぬものを埋葬するとすれば1人用のものとすべきであり、寺伝にいう入定なるものはあるいは火葬せず葬ったことを伝えたものであるかも知れない。このような形式の納骨例は鎌倉浄光明寺地藏窟があり、石像との関係位置も本窟と同じであり、鎌倉寿福寺内伝源実朝墓も中央に大五輪塔を安置しているが背後壁に同じようながんがある。以上により本窟が鎌倉末期におけるやぐらとして確実なものであり、墳墓窟としてその本尊を現存する好例であり、背後壁のがん中に大形の納骨穴のある一様式たることを示すものである。しかも安置石像背面刻銘によって中原光氏の埋葬窟と考えることができるものである。

中原光氏に関する資料は次の如くである。

年 号	西 暦	中 原 光 氏 資 料	光氏 年令	備 考
建保 6	1218	光氏生る	1	神武寺石像より逆算
嘉禄 1	1225	(中原景康 _{下向関東。為鎌倉一者。} 後任左近将監。 (中原久康 _{景康二男。鎌倉下向。 右一者。任右衛門少尉。})	8	楽所補任 (群書類従)
建長 5	1253	八月十四日。庚申。甚雨。寅刻。鶴岡上下宮為正遷宮也。 今度始而於西門脇。被奉勸請三郎大明神也。相州參 給。有御神楽。右近将監中原光上唱宮人曲云々。	36	吾妻鏡 (日本古典全集) (吉川本には左近将 監とある)
		一夷三郎明神奉鶴岡西門脇勸請事。建長五年癸丑八月十 四日庚申奉勸請。有御神楽。左近将監中原光上唱宮 人曲云々。		鶴岡八幡宮寺社務職 次第(群書類従)
		建長御修理之時光氏哥之		鶴岡八幡宮遷宮記 (続群書類従)
文永 2	1265	三月四日。癸酉。天晴。今日。於御所鞠御壺。覧童舞。 是所被引移昨鶴岡法会舞楽也。先舞童等。相分南北。 著座。(以西為上)土御門大納言。花山院大納言等。被 候簾中云々。…… 又左近将監中原光氏廻雪奏賀殿之間。給禄物。(五衣) 能基朝臣役之。	48	吾妻鏡 (日本古典全集)
文永 3	1266	文永三年丙寅九月廿九日戊午始造立之奉安置舞楽院從五位 下行左近衛将監中原朝臣光氏	49	鶴岡八幡宮藏木造弁 才天坐像刻銘(重文)
弘安 4	1281	仮殿より正殿への行列次第を記す内に左方の舞人の1人 として「左近大夫将監光氏」とあり、また「御行之間於中 間並楼門内。光氏、久光等奏一曲、打筚篥一鼓婆娑」と あり、遷行の儀が終って上宮に於て舞楽があり、その左右 各3番のうち左方の2番に「散手光氏」とあり、その後御 経供養あり、次いで戌刻に御神楽があったが本末の陪從14 人のうち末方の最初に「左近大夫将監光氏 _{加陪從} 」とみえて いる。	64	鶴岡八幡宮遷宮記 (続群書類従)
正応 3	1290	大唐高麗舞楽師本朝神楽博士從五位上行左近将監中原朝臣 光氏 _{行年七十三} 正應三年 _{庚戌} 九月五日	73	神武寺石像刻銘

以上の資料によって中原光氏は鶴岡八幡宮の舞楽師であり、しかもその第1人者であったことが知られ、73才で歿したときには神楽博士として從5位上行左近衛将監であったことが明らかである。光氏は建保6年おそらく京都の楽人中原氏に生れた。鎌倉下向の年代は明らかでないが、中原景康とその次男久康が鎌倉へ下向したのが嘉禄元年であり、光氏はこの兩人に密接な関係があるものと思われる。景康の子か孫かであろう。光氏はこのとき8才である。景康に伴われて下向したかどうかは明らかでないが、鎌倉一の楽人であった景康の指導によって楽人としてその後を継いだものと考えられる。建長5年

8月鶴岡八幡宮西門脇に夷社が勧請されたとき御神楽があり、このとき光氏が宮人曲を歌ったことが、その名が文献にあらわれた最初である。この記事は吾妻鏡・鶴岡八幡宮寺社務職次第・鶴岡八幡宮遷宮記の3書にあるが、吾妻鏡は中原光上と記し、社務職次第も光上と記し、遷宮記は光氏と記している。このことについて、このとき歌った者は光氏でなく光上であるとも考えられるが、同時期に中原光上と中原光氏の両人が鶴岡八幡宮の舞人としてともに第1人者としてうたうべき位置にあり、かつともに左近衛将監であったであろうか。光上については前後を通じて全くこれ以外に資料がないのに反して光氏に関しては幾つかの資料がある。光氏の生れた京都の楽人をみるに、その名に光及び氏をつけた者が頗る多く（註10）、このふんいきの中に楽人中原氏として生長した男子に光氏の名が選定されたであろうことは当然と考えられるに反し、上という字をつけた楽人は1人もなく、当時の楽人中に光上がいたとすれば特異な名であったと考えられる。以上から吾妻鏡の光上は光氏の誤写であり、社務職次第は吾妻鏡記事によって書かれたことによる誤と思われる。光氏はこのとき36才である。文永2年3月4日將軍御所で童舞が催され、又光氏が舞をまたと記されている。光氏48才である。翌3年、光氏は鶴岡八幡宮の舞楽院に弁才天坐像を奉納している。このとき49才で従5位下であった。光氏が弁才天を奉納したことは弁才天が妙音天とも称され、音楽の利益を授ける神であるからであろう。弘安4年11月、鶴岡八幡宮遷宮に際しては光氏はその行列に舞人の1人として加わり、曲を奏し、舞をまっている。64才である。文献はこれを以って後をたっているが、9年後の正応3年には73才で歿し、神武寺やぐらに葬られていることが石像銘で知られた。このとき従5位上になっていた。

中原光氏は鶴岡八幡宮に奉仕した舞人として鎌倉一のものであったと考えられ、とびとびながらその活躍状況も明らかである。その光氏の入定窟と伝えられる神武寺弥勒窟は後に手を加えられたことの明らかな部分を除けば一般やぐらと全く異なるところなく、かつ奥壁のがんに大形丸穴があり、火葬せずに葬った葬穴の様式を示す例として、特記せられる存在であり、窟中安置の石像がみろく像と地藏像との差こそあれ、安置様式の異なるところがないことからすれば、本石像をふくむ本窟が鎌倉末期の墳墓窟の一つとして確実なものであること勿論であり、しかもその像の示す手法様式乃至背銘など全く疑うべきものがないから、その銘文の示す年代のものであることも確実である。このみろく像が中原光氏供養のために造立せられたことが確実であるから、本窟をもって光氏の墳墓窟とすることができる。

ろ、周辺やぐら

みろく窟をふくむ13穴を鎌倉期墳墓窟としてのやぐらの形と比較するとき、5・6・7・11・12号穴は明らかに後刻のものである。1・9・13号穴は墳墓窟のようでもあるが後刻かもわからないといううたがわしいものである。残る2・3・4・8・10号穴は確実にやぐらの特徴をもっている。

2号穴は現在内部には江戸期の墓碑が納められているが形態は確実にやぐらである。

3号穴は左壁に作られた防空壕を除けば、鎌倉期のやぐらとしての形を備えている。奥壁のがん内に残る安山岩製五輪塔の空風輪と壇上に残る凝灰岩製火輪はかつてこの穴の中にあった五輪塔の残りではないだろうか。

4号穴は3号穴と全く同形であるから、形態上から鎌倉期のやぐらとしていい。現在長谷川氏の家で

祖先墓として供養をつづけている。内部にある凝灰岩製五輪塔はよせ集めだが五輪そろっている2基は確実に鎌倉後期の形態である。一番大きいのは122センチ。他のもそれに近い高さをもつ。他に地輪3個あるからもとは5基ならんでいたのであろう。安山岩製中形の五輪塔1基（地輪欠）は形式上南北朝。右奥にごちゃごちゃと積まれた小形五輪塔・宝篋印塔は何基分かわからないが形式上室町期のものと南北朝期のものとある。この穴には長径15センチくらい、短径10センチくらいの扁平な河原石が10個ばかりみられる。この大きさの際は鎌倉期のやぐら内でみられる写経石に似ている。多分供養された写経石の残りであろうが墨書文字の残るものはない。

8号穴は前壁こそ失っているが内部の構造はやぐらと同じである。左右隣にある穴が江戸期に変造された又は作られたと思われるものだから、同じころ前壁を切りとられてしまったとすることもできよう。左壁のがん内に幾十基分もの小形五輪塔・宝篋印塔が投げこまれて山積になっている。安山岩製の凝灰岩製のものもある。上方にある安山岩製のものは何れも室町期のものであり、中には室町末期形式のものもみえる。このがんについては戦前みにきたときの記憶がないが奥壁のがん内には鎌倉期の1本石五輪塔1基（安山岩製）が立っていただけだったと思っている。今はがん内に十数基がならんでいるが1本石五輪塔を除けば何れも室町期のものである。こんびら山東側山腹のやぐらから運んだという五輪塔や宝篋印塔がこれであろう。

10号穴はみろく窟で確実に鎌倉期のもの。みろく窟については別項で詳記する。

要するに以上5穴だけは鎌倉期のものとして誤りないものと考えられ、みろく窟と同時期に存在したと考えてよいものであろう。今薬師堂内に「弥勒寺」と浮彫した石額があるが、かつてみろく窟にかかげられた額だとも考えられるし、別に小堂があってかかげられたとも考えられるが、さして古いものとは思えない。しかし現在墓地になっているこの広場は後世墓地にするため開いたようにも思えない。崖をきって広場を作り、その崖にやぐらを営んでいる以上、この広場に建物が存在したと推察することは無理ではあるまい。

6. 総括

みろく窟は確実に鎌倉後期におこなわれたやぐらの特徴をもっているから、そのころのやぐらである。みろく窟周辺に十数個のやぐららしいものがあり、みろく窟とともに一群をなすものの如くであるが、確実にやぐらであるといえるものはみろく窟をふくめて5穴しかない。それらの中には鎌倉期の五輪塔のほか、南北朝期・室町期のものもあるが、8号穴中に山積されたものや、組立てられているものは、こんびら山東側山腹やぐら群から移したというものが多いらしい。江戸期に前の広場が墓地になったとき、やぐら内にころがっていた五輪塔はどこかへ片づけられて、世代穴に使われたり、檀下の墓穴として使われたものであろう。みろく窟は江戸期に入ってから左右壁にがんが作られ、世代墓地として利用されるに至ったので、本来のやぐら形態と異なるようになったが、これさえなければ大形やぐらとして代表的存在である。特にやぐらの本尊としてまつられた弥勒坐像は鎌倉期墳墓窟の本尊としては珍しい存在であり、しかも背銘をもつ。この背銘は鎌倉鶴が岡八幡宮舞人の第1人者として著名な中原光

氏に関する絶好の資料であり、73才をもって歿したこと、その時従5位上に叙せられていたことが知られる。かつこの刻銘によってみろく窟が中原光氏の墓窟であることを証しており、鎌倉に千余を数えるやぐら中、俗名の明らかになった例が一つもない現在、埋葬者を明らかにした唯一の墳墓窟として最も重要な史跡である。しかもその人物が鶴が岡八幡宮で活躍した著名者であるに至っては尚更である。重要文化財として指定されている鶴岡八幡宮蔵の裸弁天がこの中原光氏の寄進であることを知るなら、神武寺みろく窟が如何に重要なものであるかを考えることができよう。

(註)

1 新編相模風土記、巻119、三浦郡沼間村、神武寺……岩窟——窟中弥勒の像を置く、寺伝に正応三年従三位中原光氏当山に籠て罪障消滅を薬師仏に祈りしに、此地に在りて三会の暁を待つべしとの告ありしかば、偏に菩提心を発し、窟中に入定せしと云ふ。

2 三浦郡誌——神奈川県三浦郡教育会編、大正7年12月、非売品。

3 「やぐらに於ける埋葬法」赤星直忠(考古学雑誌第34巻第8号)及び「鎌倉百八やぐら」赤星直忠(神奈川県史跡名勝天然記念物調査報告第7集、昭和14年)

4 「浄光明寺地蔵窟について」赤星直忠(神奈川県史跡名勝天然記念物調査報告第18集、昭和26年)

5 「鎌倉朱だるきやぐらについて」赤星直忠(同右)

6 昭和10年出土。台座とも高10.4センチ。「鎌倉の考古学的研究」赤星直忠(鎌倉第6号)

7 「鎌倉百八やぐら」赤星直忠(神奈川県史跡名勝天然記念物調査報告第7集、昭和14年)

8 「矢倉内壁の彫刻について」赤星直忠(考古学雑誌第24巻第3号)

9 三浦郡誌にも造像銘記にも「従三位」と記されているが、石像には確実に「従五位」とある。

10 「薬所補任」でみると、光真・光宗・光成・光賢・光継・光保・光家・光綱・清光・利光・好氏・政氏・近氏・正氏・延氏・定氏など光及び氏を名につけている者が多い。

神武寺こんびら山やぐら群

1. 経 過

戦時中やぐら群所在地のこんびら山全体が海軍用地として接収せられたとき、やぐら内の墓石及び遺骨を早急に移転せねばならなくなり、当時の住職尾崎暢光師の手で、現墓地のみろく窟付近に移されたものであるという。この時出土した骨壺5個と華瓶断欠が寺に保管されているが、これらがどこからでたかについては全く不明である。筆者は昭和22年12月本やぐらの分布調査をしたが、詳細な調査はやらなかった。今回(昭和44年12月)実測を行なうに際し、流入土をある程度除いて納骨穴の位置を確認した。

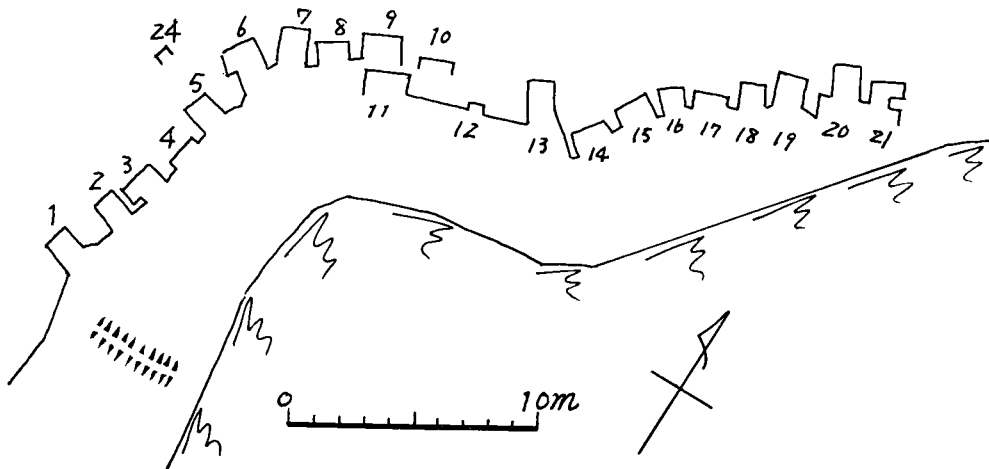
2. 所在地の地形とやぐらの分布

東逗子駅からの神武寺表参道と神武寺駅からの裏参道とにはさまれた部分にある丘陵の頂上がこんび

ら山とよばれる。やぐら群はこんびら山の東側山腹にある。神武寺本堂の西方山腹にあたり、所在地付近を「向の坊」とよぶ由である。神武寺駅からの裏参道が表参道に合した地点から10メートルばかり表参道をもどり北に折れて山腹路を80メートルばかり進むと眼前の山腹にやぐら群があらわれる。やぐら群は横に列にならび、大体東南向。前面に横に長くテラス状平場がつづく。左（南西）方平場がつきて急傾斜で2～3メートルのぼると、左に折れて又同じような平場がつづく。平場を前にした山腹には同じようにやぐら群がならぶ。21穴ある。以前の調査では右端やぐらの斜下前方にもう1穴あったはずだが埋没したらしくみあたらない。左端やぐらの左（南）斜上方15メートルばかりに2穴とこの右（北）20メートルほどに1穴あることが今回追加された。したがって本やぐら群は24穴からなる群であることになるが、実際には山腹の崩壊によって検出されないものが若干あるものとみてよいようである。

3. やぐら 現 状

テラス状平場を前にしたこれらのやぐらは山腹の岩（凝灰岩）を垂直に2メートル乃至3メートル切り崩し、その岩屑を前面に平らめてテラス状を形成したものであり、垂直に切りとった岩壁をほりこんで、やぐらを構成したものである。各やぐらの側壁は20センチ乃至30センチの厚さをもって隣のやぐらに接しているものが多く、中には150センチ乃至200センチをへだてるものもある。相接するものが一族



神武寺こんびら山やぐら群分布図

の墓穴群とみる見方が普通であるが、この場合、これがいえるかどうかわからない。どの穴もひどく前面が崩壊していて完全な形を残すものはないようである。

第1号穴 前半穴。中央部奥壁から40センチへだてたところに径30センチ深さ20センチの丸い納骨穴がある。中に二～三片の火葬骨小片と中位の隣数個を残していた。傍から常滑壺口縁断欠二片が検出された。凝灰岩製五輪塔地輪断欠一が残っていた。床面に砂を敷いていたらしく部分的に残っていた。北々東向。出土壺断欠は鎌倉期。奥巾140センチ、奥行現存94センチ、高122センチ。

第2号穴 前半穴。東向。中央奥、壁から10センチへだてたところに径20センチ、深さ5センチの浅

い納骨穴がある。奥巾 105 センチ、奥行現存 127 センチ、高 125 センチ。

第 3 号穴 前壁の片方を残すから原形がわかる。奥巾 150 センチ、奥行 100 センチ。奥壁に接した床面（左壁から 35 センチ）に巾 80 センチ奥行 15 センチ深さ 15 センチの穴がほられている。床面には土にまじって中位の礫が一面に散乱していたが墨書文字を残すものはない。北々東向。

第 4 号穴 左右の穴より 50～60 センチ高いところに床がある。天井のすべてを失ない、奥行 70 センチの床を残して前半を失なっている。

第 5 号穴 前半欠。室中央奥に丸い納骨穴（奥から 10 センチ）径 20 センチ深さ 15 センチがある。奥巾 102 センチ、奥行 125 センチ、高 127 センチ。東々南向。

第 6 号穴 前壁の片方を残す。東向。奥巾 154 センチ、奥行 110 センチ、高 95 センチ。室中央左壁に近く径 25 センチ深さ 12 センチの丸い納骨穴。その右前方に接して 30 センチ角深さ 15 センチの方形納骨穴（火葬骨片数片残る）。室中央から右壁にかけて巾 80 センチ奥行 50 センチ深さ 15 センチの矩形の納骨穴。この中に破壊した骨壺と小形礫十数個を検出。火葬骨数片残存。これと一部交叉して右壁に近い前方に径 23 センチ深 15 センチの丸い納骨穴がある。

第 7 号穴 前半欠。奥巾 137 センチ。奥行 127 センチ。奥壁に接して奥行 59 センチ高さ 20 センチの低段がある。段上での室高 96 センチ。段上に 3 個の納骨穴がある。左は径 23 センチ深さ 19 センチの丸形。中央は一辺 20 センチ深さ 14 センチの方形。右は径 17 センチ深さ 14 センチの丸形。南々東向。

第 8 号穴 前半欠。南東向。奥巾 140 センチ奥行 113 センチ奥壁に接して奥行 65 センチ高 15 センチの低段がある。段上での室高 106 センチ。

第 9 号穴 前半欠。東々南向。奥巾 166 センチ奥行 123 センチ。奥壁に接して奥行 40 センチ高さ 13 センチの低段がある。段上での高さ 104 センチ。

第 10 号穴 全く崩壊して奥壁を残すだけ。南々東向。

第 11 号穴、第 12 号穴、第 13 号穴は上下両やぐら群の中間傾斜面にある。

第 11 号穴 前半欠。奥巾 170 センチ、奥行約 100 センチ。奥壁に接する 50 センチくらいの間に中形一小形の礫（10 センチ角～5 センチ角）が厚さ 10 センチ余に敷きつめたようにみたされ、その上に赤褐色素焼皿（かわらけ皿）断片が散在。右隅には同じ皿 7～8 枚が集合的に集められていた（伏せられたものなどあり、雑然）。礫から天井までの高さ 34 センチ。礫には墨書文字は残っていない。右前方に凝灰岩五輪塔地輪断片 1 個残存。

第 12 号穴 一般やぐらとは異り、巾 78 センチ奥行 50 センチくらいの楕円形平面で前面に前壁をもったものであったらしいが、前壁は右方だけ残り左方は名残りをとどめる。高さ 77 センチ。天井もドーム状。南微西向。本穴と第 13 号穴との床面差 105 センチ。

第 13 号穴 前半欠。奥巾 121 センチ、奥行 130 センチ、高さ 103 センチ。南々東向。本穴床面と第 14 号床面との差 125 センチ。

第 14 号穴 前半欠。天井欠。奥巾 183 センチ。残存奥行 38 センチ。東々南向。左隅に凝灰岩製五輪塔地輪 1 個残る。下面に丸浅穴あり。

第15号穴 前半欠。奥巾 130 センチ、奥行 140 センチ、高さ 100 センチ。東々南向。

第16号穴 前半欠。南東向。奥巾 116 センチ。残存奥行76センチ。高さ99センチ。奥壁より30センチへだてた室中央に径25センチ深さ10センチの丸い納骨穴がある。

第17号穴 前半欠。南東向。奥巾 159 センチ[○]残存奥行73センチ、高さ 125 センチ。

第18号穴 前半欠。残存奥行90センチ、奥巾94センチ、高さ 102 センチ。南東向。左壁外に巾18センチ、奥行12センチの切込部分がある。前壁を欠く様式である。玄室外に切込をめぐらし、これに扉を設けたか、切石を積んで閉じたかしたものらしい。

第19号穴 完形であるらしい。前壁を欠く様式。玄室前部が7センチの高低差をもって低くなり、この部分の天井及びこれにつづく側面に高さ5センチ内外の張出し部分が残る。したがってこの部は扉を設けた名残りと考えることもできる。奥巾 114 センチ、奥行 119 センチ、高さ 120 センチ。南東向。中央奥壁に近く径39センチ深さ32センチの丸い納骨穴がある。

第20号穴 天井前部を欠く。奥巾 117 センチ、奥行 130 センチ、奥高さ 126 センチ、南東向。内に二段の低段を作る。奥の段奥行45センチ高さ10センチ。中央奥壁に接して径24センチ深さ24センチの丸い納骨穴がある。前段奥行44センチ高さ5センチ。左壁外に巾48センチ奥行34センチの切込あり、玄室前部と外部との高低差15センチ。この室外の切込はこの部に扉を設けたあとと考えられるから、本穴には前壁を欠いたものであろう。

第21号穴 巾88センチ高さ 106 センチの矩形に深さ45センチほりこんだところから右へ27センチひろげ、奥へ50センチほった形がこの穴の姿であり、右にほりひろげたところから内を玄室とすればその前は羨道になる。羨道奥部天井とこれにつづく左右壁に高さ5～3センチの張出部がある。この部に扉を設けたと考えることも可能。羨道とその前との高低差20センチある。玄室左半分が矩形に約5センチ低くなっている。南々東向。

(第21号穴右前方に一穴存在することを昭和22年記録したが、その後埋もれたらしく今回みあたらないので、一応除く。)

第24号穴 第5号穴の5メートルくらい上方にある。露岩の東々南面に開口する小穴。間口40センチ高さ45センチの隅丸胴張台形状にほりこまれ、20センチほりこんだ部分の中央を巾26センチ高さ25センチ、奥行20センチ更にほりこんだもので、奥及び天井はむぞうさに丸くほっている。一般やぐらとは別系のもので、これを同じく納骨用のものとするなら、奥の掘込部に納骨壺を納め、前面に石蓋をしたものと考えることができる。

(第22号穴・第23号穴は移転後山腹崩壊によって露出したものと思われ、22号の如きは内部に凝灰岩製五輪塔がたおれて残っている。この両穴は調査手続間にあわず、調査未了。)

4. 出 土 品

本堂内に保管してある納骨壺5個と板碑2基と華瓶破片と、今回出土した破壊納骨壺と素焼小皿について以下記述する。

1号 常滑壺。暗褐色。ほどよく張った肩に一沈線をめぐらす。頸はわずかに外にひらく。口縁を特に厚く作らず、上面を斜外に傾斜させる。頸から肩へ、肩から裾へとわずかなふくらみをみせるふくやかな感じの壺である。高さ22.5センチ、胴径18.5センチ、口径9.7センチ、底径8センチ。古いもののように見えるが肩から裾の線は新しい。鎌倉末期のものであろう。

2号 常滑三耳壺。褐色。直立する頸の上に折返し口縁がある。頸のつけねから肩にかけてはわずかに丸味をもつ。肩をいからしているが胴以下はすなりとわずかなふくらみをもつだけ。肩の上に四角く角ばった耳が3カ所あり、耳の上面には平行三沈線がある。肩のすぐ下側胴の上部をめぐって斜の櫛目がついて装飾的な効果をあげている。いかめしい感じは肩の張りからくらしい。この手の耳付壺は四耳が多いとされているがこれは三耳。この種の耳付壺は本来酒壺だとされている。高さ26センチ、胴径21.5センチ、口径11.5センチ、底径8.5センチ。鎌倉末期のもの。

3号 常滑壺。若干いびつになって傾斜する。肩がひどく丸く、肩から頸にかけても肩から裾へかけてもふっくらしている。頸は丸く反りながら開き、そのまま縁になる。口縁上面は外傾。口縁の5分の3を欠失。肩上面に少々吹出釉がみられる。高さ24センチ。胴径19.5センチ。口径11.5センチ、底径9センチ。胴の丸味が多いが室町初まで下るか。

4号 須恵質高台付三耳壺。須恵器風の焼成に薄く灰釉がかかっている。口縁を全く欠く。やや張り加減の肩をもつかにみえるが、反対側はかなり丸味をもつ。耳は三角形で小形。高台付三耳壺としては極めて小形であることがめずらしい。高台は外反する外開きである。現高13.2センチ、胴径11.7センチ、底径6.5センチ。鎌倉末期。

5号 常滑焼小壺。赤褐色。丈低、大口の小壺。底が大きいので安定感がある。胴中部が丸く張りだす。肩と頸の元とに沈線をめぐらす。両沈線間の一側面にへら書の華押がある。頸は外開きとなり、口縁は折返されているが巾は狭い。口縁に片口状の注口がある。好感のもてる小壺である。高さ11.5センチ、胴径13センチ、口径7センチ、底径9センチ。古そうだが室町まで下るか。

6号 須恵質灰釉壺 第6号穴内に破壊していたもの。復原したが口頸部3分の2と胴の一部を欠く。須恵風の焼成であるが焼はよくない。わずかに外反した頸の上に外反した口縁がつく。口縁は外傾し、傾斜面はわずかに丸味をもつ。頸のつけねから肩へなだらかに丸味をもって移行し、丸い肩から下はわずかのふくらみをもって底まで細まる。若干いびつである。口縁内面から頸をへて肩にかけ、意識的に灰液を塗ったことがはけあとによって知られる。吹出釉のような効果をねらったが焼成度低く、目的を達しなかったものらしい、高さ22.5センチ、胴径18.3センチ、復原口径11センチ、底径8.8センチ、鎌倉末期。

緑釉黒絵双獣耳瓶 らっきょう形の長頸瓶。長頸は口縁部を欠き、頸部に四沈線をめぐらす。高台状に見えるが高台ではなく、胴下部の形であり、この部はあげ底になっている。下ぶくれの丸胴の上部に三沈線をめぐらし、その上に獣面付双耳がつく。やきしまった象牙色の地肌に白化粧し、その上に鮮かな緑釉をかけているが、胴下部をかけ残している。胴部全面に黒色で豪放な渦文を無秩序に配しているが緑釉とともに一部が流れている。低火度釉であろう。土の厚さは3.5～4ミリ。特に胴内面にはロクロ

目がめだつ。現在高さ17.5センチ。胴径10.4センチ、底径6.8センチ。今まで鎌倉出土の陶片はずいぶんみているがこのようなものははじめてである。小山富士夫氏は「日本のものではない。中国製の古陶。南方にはない焼だから、北方のものだろう。宋より下るとみられるから元くらいのものか？極めて珍重すべき遺品である。」と語られた。

素焼小皿 第11号穴写経石に伴出したもの。所謂かわらけ皿の小形のもの。資料として採集されたものは完形品4、小欠あるもの2、小欠6、破片2。形は何れも同形。側面丸く彎曲し、底に移行する。底は平底で糸切りあとがあり、竹すのこの上で乾したらしく、すのこの痕をつけている。ロクロ製。口縁内外にわたって水ぶきで仕上げている。内面も水ぶきの痕があるがむぞうさであり、多く凸凹ができています。径7.4～8センチ、底径5～6センチ、高さ1.5～1.85センチ。若干の大小はあるが大体似た大きさの小皿である。一例だけ特に浅皿で底も大きく、他のものが側面から底へ丸く移行するに対してこれは底との間にあきらかな稜を示している。色はうす黄茶（色相6、明度17、彩度3.5——日本色彩研究所編、新色名帖による）を少し淡くしたものが多く、にぶいだいだい色、（色相5、明度18、彩度4）を少し淡くした色のものは少ない。両者の中間色のものが一例ある。同じ方法で焼かれたものであろうが、赤褐味の多いものは酸化度の多かったもの。いづれも焼成度低く、極めて砕けやすい。これら小皿は灯明皿乃至供物皿としての使用が考えられている。

板碑1 緑泥片岩製。小形。関東型のものと思われる。ひどく風化した室町期のもの。根部切断。上に弥陀の梵字と蓮座があり、下中央に華瓶1個を刻む。その左右に年月があるはずだがよめない。

板碑2 緑泥片岩製。小形。風化がはげしいため断欠として残存。何の刻字も残さない。

5. 五 輪 塔

みろく窟南上の尾根墓地に一群の五輪塔がある。一列にならべられているが多くはでたらめに積んである。9基の五輪塔の間に3基の江戸期墓碑が入っている。五輪塔は凝灰岩製のものと安山岩製のものとあり、鎌倉後期から南北朝にかけてのものと考えられる。凝灰岩製の大きい2基はよくそろっていて、かなりすぐれたもの。安山岩製のものも積みかえればそろうのがあろう。江戸期観音像の台に使われている安山岩製南北朝期の蓮座は良好資料。宝篋印塔の相輪断欠が一つある。こんびら山東側山腹やぐら群から移したものの由。江戸期3基は観音像と延命地藏（ともに首を欠く）で神武寺世代関係のもの。1基は文字不明。

尚みろく窟わき第8号やぐら左壁がんに山積されている五輪塔や宝篋印塔は明らかに後世はこんできて入れたものであり、大部分が室町期のものである。前住時代のことであるため、現住はその間の事情を知っていないが恐らくこんびら山やぐらからの移転物であろう。みろく窟上方の塔だけではあまりに少なすぎる。

6. 考 察

イ、やぐら形態 矩形又は方形の平面に垂直な壁をたて、平らな天井をもつのが普通の形で、前壁の

中央が出入口として開いているのが鎌倉期やぐらで、前壁が省略されてしまった形になるのは室町期である。本やぐら群には2～3のものに前壁があったことを物語る残存部があるほかは何れもが前半崩壊のため原形不詳。巾奥行とも1メートル内外の比較的小さい穴の集まりである。第19号穴、第21号穴の如きは前壁を欠くが、玄室外の左右壁及び天井に3～5センチの張出部分が残っており、これは門扉をはめこんだあとと思われる。第18号穴第20号穴も前壁を欠くが室外の側壁に切込みが残り、ここに扉の設けをしたか切石を積んで閉じたかしたものと考えられる。鎌倉期形式が崩れて室町形式になる途上でこんな構造のものができたのであろう。第3号穴第6号穴には前壁の一部が残っているから原形では明らかに前壁があった形である。大部分の穴が側壁も前壁も前半がほとんど失なわれているが、床面の広さを追求してみると方形又は方形に近い矩形になる。全部を露出してもとの構造を明らかにする作業が行なえなかったから、これらがどの程度原形をとどめているかわからない。第7号穴・第8号穴・第9号穴・第20号穴は奥壁に接して低い段状部分がみられる。これはやぐら一般にみられる内部構造の一つであり、段上に納骨穴を造りあるいは供養塔を安置する場所である。段上に納骨穴があるものは第7号穴・第20号穴にみられたが供養塔がどのようになっていたかは現在では全くわからない。低い段状がなく床面に納骨穴を作るものもある。第1号穴・第2号穴・第5号穴・第6号穴・第16号穴・第19号穴がそれである。これら納骨穴として残るものの何れかから、今本堂に保管されている骨壺がでたことは間違いないが、どれがどの穴であるかは不明である。今回測量に際し床面の流入土をかき出した際第1号穴に骨壺断欠が残っていたが保管中のものとは別であった。緑釉華瓶は破片がひどく不足しているが、調査中その断片をみるができなかった。第12号穴は一般やぐらと異り巾78センチ奥行62センチ高さ77センチの小形であり、且つ平面形も欠円に近い不正形であり、天井も平らでなく、むぞうさに丸味をつけてほりこんだものであることは第24号穴がこれに似た形でより小さいのと同時に、単に納骨壺をこの中に納めるだけの用途であり、入口は石蓋で閉じられたものではなかったろうか。特に第24号の如きは石蓋をはめこんだと思われるあとがみられた。左端上方に新しく検出された第22号・第23号穴については発掘手続未了のため調査されていない。

ロ、出土品 納骨壺——常滑焼と須恵器風と2種あるがともに納骨壺として従来も鎌倉から出土したものと同一である。それらを形態上から大体鎌倉後期のものとする。やぐら形態が鎌倉型のものと、室町型への過渡的なものとあることと一致を示すものである。素焼小皿——普通かわらけ皿とよばれやぐら内に多くみられるやや厚手の焼成度の弱いもので、祭祀用（灯明皿又は供物皿）として使用されたもので、丸い側面から底へ移行するその形態からこれらの大部分は鎌倉期のものであり、側面と底との境が丸く移行しないものがより新しい時期に出土する例から考えて一部が室町期に奉獻されたものと考えようとするものである。礫——やぐら内に多量に納められている場合（第3号穴・第11号穴）とわずかに検出される場合（第6号穴はこれにあたるか）とある。多量の場合は第11号穴の如く床面に敷かれたようにおかれている場合が多い。第3号穴は戦時中の移転に際し、かきまわされて流入土の表面に露出した場合であろう。少量の場合、納骨穴のような穴を作って納めてある場合もあり、一部におかれる場合もある。本やぐら群出土の場合、大部分が中位の大きさのものであり、一部に小形のものがみられ

た。何れにも墨書の残るものはなく、果してこれらが写経石であったかどうか分からないが、移転に際し、梵字を墨書した一例が検出された旨を現住が伝えているから、恐らく鎌倉各所のやぐら例とくらべて、これらも写経石であったと考える。大形のものから中形のものには経文を続けて書いているのが普通で、小形のものには一字一石が普通である。続けて書いてあれば何経かが判断できる場合が多いが全く消えてしまった本例では全く不明である。鎌倉出土の場合大部分が法華経であった。五輪塔——移転したからどれがどの穴にあったものか不明であるが、みろく窟付近に移されたものをみると明らかに鎌倉後半期のものがある。わずかにやぐらの中に残されていたのは凝灰岩製五輪塔断欠であるが、形式上からは鎌倉後半期のものである。板碑——1基は全く風化してしまっていて資料にならぬが、1基は小形の普通品で、上に弥陀をあらわす梵字キリクを刻み、下に蓮座を刻む。下方中央に華瓶1個を刻む。文字は全く不明。この小形普通品は室町初期から中期にかけて一般に行なわれたものである。供養塔は年忌毎に追献されるから、そのものが直ちに当初の年代をあらわすものとはかぎらない。

ハ、五輪塔 やぐら内からみろく窟上方に移された五輪塔は鎌倉後期乃至南北朝期のものであり、室町期のものを混じていない。しかしみろく窟わきの第8号やぐら内に山積された五輪塔や宝篋印塔の中には明らかに室町期のものがあり、これらがもともとこのやぐら内にあったとは考えられない状態にあることは、他から集めたとせねばならず、これが付近のやぐら内に散在するものであったか、こんびら山やぐらからの移転物であったかは前住時代のことであるため不明である。こんびら山やぐらのものもあるのではないと思われる。鎌倉期营造のやぐら内に室町期の供養塔があることも少なくない。それはひきつづき供養が行なわれたことを語るものである。みろく窟上方のものは古いものばかりであるが、板碑に室町期のものがあるから実際には室町期のものもあったとすべきであろう。江戸期僧侶の供養碑もあるが恐らくこれもやぐらのどれかにたっていたものであろう。

ニ、推定年代 やぐら形態と出土品とから判断される本やぐら群の年代は鎌倉後期から南北朝にかけて营造されたと考えることができる。やぐら群にあった石造塔婆類からは鎌倉後期から室町までが知られ、室町期のものを追献のものとするれば鎌倉後半期のものを营造当時のものとするから、やぐらの形態と矛盾しない。しかし前壁を失ない、玄室前面に扉を設けたものが北東端にみえるが、これは前壁をもつ鎌倉型が崩れて室町型になる過渡期のものであろう。即ち本やぐら群は鎌倉後期から末期にかけて営まれたものである。

ホ、埋葬者 勿論記録はない。五輪塔や板碑に刻まれるものもないから分からないが少なくとも神武寺の住僧は埋葬されていると考えなくてはならない。このほかに俗人で特に神武寺にやぐら群をもつ有力者がなかったとはいえない。みろく窟が鶴岡八幡宮の舞人中原朝臣光氏の墳墓と考えられる以上、俗人のやぐらも存在したと考えることはできる。しかし、それがこの一群中に存在するかどうかは不明である。

7. 総 括

こんびら山東側中腹に群在するこれら一群のやぐらは形態上からも残存供養塔からも出土骨壺からも鎌倉後期乃至末期のものであると考えられた。戦時中の移転のため記録は残されぬが、移転先の供養塔の半ばは明らかである。かつ寺に保存せられた5個の骨壺は各若干の破損はあるが、今回発掘された1個とともに何れも鎌倉後期のものであり、優れた資料である。埋葬者を明らかにすることはできないが、恐らく神武寺住僧の墳墓が大部分を占めるものと考えられ、神武寺に関係深い有力者の墳墓が含まれる可能性はあるが明らかでない。

神武寺の古位牌

1. 神武寺の雲形位牌

神武寺には本堂に1基と、薬師堂に2基の雲形位牌がある。雲冠の形に少異はあるが、3基とも同形である。雲冠部は方座の上が五弁の蓮座となり、その上に立ち上った4個の巻雲があり、その上に左右に巻雲を伴った日輪がのる形である。下の四雲は外側の二雲が大きく、中の二雲が小さい。一般には三雲が配されているが、これは中央の一雲にかえて小さい二雲を配している。牌身には輪廓の溝がなく、薬研彫の大文字を一行に刻むが裏面に紀年がない。牌身の文字は本堂のものに「今上皇帝聖寿無疆」、薬師堂のものに「南方火徳星火部聖衆」「大檀那本命建生星君」とある。基台は三者とも同形で、方板の上に大小二重の退化反花座を配したものであるが、別に薬師堂の須弥壇下から破損した基台部が1個発見された。これは上框・中腹・下框の三部分からなる雲形位牌基台の中、下框と中腹とである。

2. 形 態 の 考 察

神武寺の三位牌を別項「雲形位牌の編年試案」にあてはめると、5枚の蓮弁の表現は古式の蓮座表現と一致し、これが慶長以前のものであることを物語る。次に雲の上に日輪を配することは慶長ころになってからあらわれだしたものであり、上の二雲の間に日輪がはさまれた形は横須賀市妙真寺の慶長6年位牌に似ているが、神武寺のものは雲間に顔を出したばかりという感じである。

牌身については輪廓の溝がない例と、ある例とがあり、これについての新古はまだ把握していないのでわからない。

神武寺位牌が現在つけている基台は勿論後補であり、薬師堂須弥壇下より見出された基台残欠が旧基台の一部と考えられるものであり、これは上框を欠くが下框の様式をみると退化反花座の下に更に1個の受座をもつB型のものである。これは反花座の下に受座をもたないA型よりおくれてでた型で、資料中では葉山町新善光寺天正18年位牌・横須賀市妙真寺慶長6年位牌のものに類例がある。中腹は両端に束をたて羽目に刻んだ格狭間中に花文を配したものである。これは編年試案では江戸初期から中期に一

般的なものである。

以上を総括すれば雲冠及び基台から帰納される神武寺三位牌は慶長初めごろに作られたものとなる。中腹は縦と横との比が一对三・三である。この比は江戸中期に一般的な数字であるから、江戸中期修理を示す後補とすべきであろう。即ち慶長初年作られたものが破損したので、江戸中期に補修されたが、その後再度破損し、現在の如き基台として修理されたものとしなくてはなるまい。江戸中期の修理は「大檀那本命建生星君」位牌の裏に「白墨入致者也」と刻みつけた僧実深の安永5年であったかも知れない。

3. 結 び

神武寺に残る雲形位牌は雲冠と牌身が旧のもので、基台は後補である。作年代が刻まれていないので類例による編年試案と比較し、これを慶長ごろ作られたものと推定したものである。寺伝は小田原北条残党の放火による火災に全焼し、本尊のみを出したと伝える。しからは本位牌の推定年代に近いことから考えて再興に際し、作られたものとしてよいであろう。

雲形位牌の編年試案

1. 前 書 き

古くから行なわれていた位牌は雲冠又は雲首とよばれる雲形を上のにせた牌身が基台上にのる形で、雲をいただく特徴をもつ。この種の位牌を雲形位牌とよび、江戸以前からあって江戸期につづき、その間に時間的変化がある。江戸期には他に厨子形のものがあり、多くの板状牌身を内蔵する。これは数は多くない。圭頭形牌身のものもあり、隅入位牌形や隅丸位牌形もある。江戸期になってからの位牌というものが詣り墓を仏壇にもちこんだものという考えもなりたつから、江戸期になってから作られだした新様式の位牌と墓碑の形態とは密接な関係があると考えるので、どこにも比較的多い所謂位牌形について略述しておきたい。

位牌形墓碑が流行しはじめるのは元禄ころからで、享保ころから急にふえはじめ、文化文政ころを頂点として衰微しはじめるが、幕末までつづく。位牌形墓碑も細かに分類すると、断面において(a)背面が丸くこけてゆくもの、(b)頂が後へ傾斜するもの、(c)頂が平らであるものにわけられ、a b は大体並行して幕末までつづくが、c は少しおくれて宝暦ころから流行しはじめ幕末に至るのである。しかしこの三者は大体並行しておこなわれているものとしてよいのである。隅入形・隅丸形などの所謂位牌形位牌はこれと前後して出現するが隅入のものが先行し、延享ころから隅丸が加わり、両者並行して流行するものの如くであり、この様式は現代につづいているのである。

今本稿においては江戸以前からおこなわれた雲形位牌について、時間的変化を追求しようとするものである。

2. 位牌に対する民俗

位牌とは何かということが出発点となろう。各家の仏壇に安置され、牌身に刻まれたホトケの霊の依代として、香花・灯明・茶飯が奉献されている。死人があると普通二つの白木の位牌が作られる。一つは祭壇に飾られ、火葬場への送りには相続者がこれをもって従い、火葬場にそのまま放置される。これが野位牌の現在の形である。もう一つは持ち帰られた火葬骨の前に置かれる。これが内位牌である。49日の納骨がすむと（あるいは一周忌がすむと）りっぱな位牌に作りかえられ、仏壇に安置されて死霊の依代として香花・灯明・茶飯が奉献される。33回忌とか、50回忌とかがすむと位牌を依代としていた個々の霊は「祖先」の仲間入りをするものになると考えられ、位牌は寺へ納められるのが普通であり、寺では檀下から納められた位牌が山積するに至ると、時々焼却するのが普通である。従って古い位牌が残っていることは極めて稀である。

寺には開基・開山以下世代の位牌が個々の位牌としてまつられ、供養されているが、多くの寺は幾度かの火災にあって、古いすべてを失っているのが実際であるから、古位牌がそのまま残っていることは少なく、さいわいにして火災をまぬかれても、長年月の中には破損するものもできるから、後世補修されることも当然であり、又焼け失なわれたものを再興することもしばしば行なわれている。したがって寺に古位牌が当初のまま残されていることも極めて稀である。寺によっては個々の位牌のほかに大形の位牌に細かく格子目のすじを入れ、その一つ一つにおそらく世代であろうと思われる多くの法名を刻んだものを保存するところがある。鎌倉海蔵寺（応永30年）・逗子神武寺（天保8年）・愛川町勝楽寺などにみられるが、この形は個々の霊の位置を失なった祖先を記した位牌としてよいであろう。

3. 古位牌の考古学的考察

イ 位牌の古さ 位牌がいつからおこなわれたかはわからない。鎌倉の地獄谷（建長寺のある谷）の奥山に「朱だるきやぐら」とよばれる中世の墳墓窟があるが、その羨道壁には浮彫された2基の位牌形がある。風化のため細部はわからないが、雲冠・牌身・基台の三部分からなっていることはわかる。雲冠の形は鎌倉海蔵寺の永享6年位牌や応永30年位牌と同形らしい。牌身は幅広のものだから、海蔵寺の応永30年位牌のように格子目にすじを入れた中に多くの戒名や忌日を記した形式のものであろう。基台は数段の框からなる下框だけのものである。

位牌についての研究は片野温氏の「美濃国古位牌の研究」（仏教考古学論叢、東京考古学会刊、昭和16年5月発行）に元享・暦応ころのものがあり、浪花勇次郎氏の「阿波国金石年表」（昭和37年7月、徳島県教育会発行）に文明18年のものがあり、坪井良平氏の「鎌倉浄光明寺の古位牌」（兵庫史学第29・30合併号、昭和37年7月）に文明8年と天正元年のものがある。研究されたものが少ないようなので詳細はまだわかりにくい。私は残念ながら片野氏の研究をみていない。今ここに雲冠をもつ位牌の形態につき、時間的変化を手持の資料によって把握しようとするものであるが、導きだされた結果も、手持資料が少ないので試案として把握し、今後新資料によって訂正されることを期待するものである。

ロ 形態の時間的変化

a 雲冠——雲形とこれをうける蓮座との台である長方形の部分とからなる。雲形は雲形のみからなるものと、雲形の上に日輪をのせたもの（日輪雲形）との2種ある。

雲形は積乱雲がもくもくとわきあがる姿をあらわすとみられるもので、巻雲の数により次の3種に分けられる。(a)下3上2—鎌倉海蔵寺応永30年位牌・浄光明寺文明8年位牌にみられるもので、上2は互に相接している。この変形とみられるものが海蔵寺永正10年位牌で、上の2個が相接着して一つとなり、上が丸くあらわされている。(b)下1上4—海蔵寺永享6年位牌にみられるもので、下中央に大きい巻雲一つがあり、その左右の二つは裾を長くひいて立ち上り、中央の雲より更に上にわき上っている。その間に別の2個が少し上にわき上ったもので、前者の変形とみられるものである。(c)下3中2上1—横須賀清雲寺永禄2年位牌・鎌倉浄光明寺天正元年位牌・葉山新善光寺天正18年位牌にみられるもので、三者全く同形。下に3個の巻雲があり、その中間上に2個がのり、更にその中間上に1個をのせたもので、6個の巻雲が俵形に積上げられた形である。中の2個の間は少しはなれている。これと大同小異を示すのが葉山福厳寺の慶長14年位牌で、中の2個が極めてわずかはなれていることのちがいでだけである。以上のものは慶長以前に行なわれた様式のようなものである。

日輪雲形は下3個の上に2個をのせた雲形の上に日輪形をのせたもので、下3中2上1の巻雲6個よりなる形の最上部の雲を日輪にかえた形である。日輪—扁平のものと面がわずかに盛上るものと2種ある。扁平のものは逗子海宝院慶安5年位牌・妙光寺万治2年位牌・同延宝9年位牌などである。わずかに上るものは延命寺正保2年位牌・妙光寺寛文2年位牌・海宝院寛文3年位牌・同延宝2年位牌・妙光寺延宝3年位牌・延命寺宝永7年位牌・同宝暦8年位牌……など多い。扁平が先出し、その後わずかに盛上るものと考えたが、実例では両者前後して存在する。しかし扁平のものは延宝9年例以後みえないからその後はすべて盛上るものになったらしい。雲形—小異はあるが大体同じ表現である。しかし上の二雲に相違点がある。即ち二雲相接するもの（横須賀妙真寺慶長6年位牌・逗子延命寺慶長15年位牌）・わずかにのはなれるもの（鎌倉浄光明寺天正元年位牌・葉山福厳寺慶長14年位牌）・少しはなれるもの（鎌倉正覚寺寛文7年位牌・逗子妙光寺寛文11年位牌・金剛寺元禄14年位牌・同享保15年位牌）・かなりはなれるもの（妙光寺万治2年位牌・海宝院寛文3年位牌・法性寺寛文10年位牌・妙光寺寛文11年位牌・海宝院延宝2年位牌・妙光寺延宝3年位牌・同慶応3年位牌）・はなはだしくはなれるもの（延命寺宝永7年位牌・法性寺宝永7年位牌・妙光寺享保6年位牌・延命寺宝暦8年位牌・妙光寺宝暦8年位牌・同文化13年位牌・延命寺文政2年位牌）に分けられる。その時間的分布をみるに相接するものが慶長以後はみえず、わずかにのはなれるものが慶長14年で終る。両者は共存したらしい。少しはなれるものは寛文7年より享保15年に至り、江戸中期初めに終ったらしい。かなりはなれるものは万治2年より宝暦14年に至り、江戸初めより中期におこなわれたものらしいが、とんで慶応3年に一例ある。この両者は前後しておこなわれ、後にはかなりはなれるものが一般的だったらしい。しかるにはなはだしくはなれるものが宝永7年より文政2年におよぶ江戸中期のはじめにおこり、江戸末期までつづいたことがわかる。これを概観すれば、上の2雲が相接するものが最も古く、時間とともに次第にはなれる傾

向となり、遂にははなはだしくはなれるに至ったということがいえるであろう。

蓮座は雲形の下にある。この蓮座は蓮を側面からみた形であり、上向の蓮弁5個よりなる。中心の1個が正面向で、隣のものは斜向、外のものは横向にあらわされる。鎌倉期以来一般的な蓮座の表現様式である。鎌倉海蔵寺永享6年位牌の中心蓮弁が先端反転の状を示すほかはすべて先端の反転を表現していない。蓮弁は丸味をもった半肉彫的に表現されるのが普通である。慶長以前のもはみなこの様式である。蓮座の下には蓮座をうける低い長方形の台がある。いずれも同形である。

江戸初期に入ると蓮座は五弁がそのままならぶ形はなくなり、中心と両端が全形をあらわし、中間の二弁はその間に内側の弁として、少しかくれて表現されることになった。弁が半肉彫的に作られた弁周が反転しているように表現されたものもあるが、多くは半肉彫的に表現されていても周の反転状は表現されていないのが普通である。台には全く変わりはない。

江戸中期のものは蓮弁五弁がいずれも内外弁をわけけるものであること、前の通りである。弁周が反転することを示すもの（延命寺宝永7年位牌・妙光寺享保6年位牌）、弁周の反転を示さぬもの（延命寺宝暦8年位牌・妙光寺宝暦8年位牌・同宝暦14年位牌）、例外として蓮弁九弁のもの一例、これは周反転せず、五弁の間に内側の四弁の先をみせるもの（法性寺宝永7年位牌）、又蓮座を欠く一例（金剛寺享保15年位牌）あり、雲冠の下三雲が裾をひいて立ち上り、蓮座なき空虚をうめるが、この部がさびしい。台は長方形板のものが大部分であるが、長方形板の下に逆台形を付加する形が二例ある（法性寺宝永7年位牌・金剛寺享保15年位牌）。これは基台の上框の下側に同じものが付加されるもの（延命寺寛保元年位牌・法性寺宝永7年位牌）と大体同時期である。

江戸後期には例が少なくなるが存在はする。中期の延長であり、特に後期としての変化を把握していない。

b 牌身 —— 一人一人のものとしての位牌と多くの者を一括して記したものとしての位牌と2種あることは前に記した。牌面の分類としては周に輪廓の溝を刻むものと、刻まぬものとある。輪廓の溝を刻まぬものとしては慶長以前に海蔵寺永享6年位牌・永正10年位牌の2基があり、江戸期のものとしては正覚寺寛文7年位牌・妙光寺寛文11年位牌があげられるほかはすべて、慶長以前のものも江戸期のものも輪廓の溝を刻み、その刻み方に特に変化を認めない。したがって今、位牌の編年を考えるにあたっては牌身を度外してもさしつかえないものとする。

c 基台 —— 霊の依代としての牌身の基台が仏の座として須弥壇形であるのは普通である。基台を組成する部分は上框と中腹と下框の三部分である。今みることのできる慶長以前の古い様式のものでも、上框と下框が禅宗建築の須弥壇にみられるのと同じ線形をもつ唐様の形で、中腹は両端に束をたて、中間の羽目部分を蓮子にした和様の形が行なわれている。しかしこれらは時間とともに変化しているから以下その変化を記してみたい。

上框・下框 —— 須弥壇では中腹の上下で線形が対称的に配されているが、位牌の場合は下框と同じ形がそのまま上框に用いられ、少し小さめに作られている。上框の下面には中腹をうける低い長方形の座があるが、下框の下面にはその四隅に脚がついている。框の基本になるのは長方形厚板部分で、この上

に反花座が退化した傾斜S字状断面をもつ退化反花座がのる。この上に牌身をうける長方形の低い受座がつく。この様式をA様式とする。海蔵寺永享6年位牌・同永正10年位牌・赤星蔵永禄3年位牌・浄光明寺天正元年位牌・福厳寺慶長14年位牌・延命寺慶長15年位牌にその例がみられる。框の基本となる厚板の上に退化反花座をうける受座がもう一段加えられた様式をB様式とする。新善光寺天正18年位牌・妙真寺慶長6年位牌にその例がみられる。上框下側の受座は江戸期に入ると上側の退化反花座と同じものになり、退化請花座となる。A様式の下側の受座が退化請花座におきかえられた様式をC様式とする。B様式の下側の受座が退化請花座におきかえられた様式をD様式とする。

退化反花座や退化請花座は石造五輪塔や宝篋印塔の蓮座が鎌倉期には立体的の極めて美しいものであったのが、室町初には扁平化しはじめ、やがて線のみで表現されるに至ることを知っている。この線刻を消してしまったとき、ここにいう退化反花座ができ上るのである。これが更に退化するとしたらS字状断面をもつ傾斜面が単なる凹曲線断面の傾斜面となり、更に退化が進めば直線断面の傾斜面となることは理論上当然である。C様式・D様式において下側の部分がこれらの変化を示すものが確かにみられる。しかしこれらは次に示すようにわずかばかりの資料しかもち合わせていない。鎌倉正覚寺寛文7年位牌・逗子妙光寺寛文11年位牌・同延命寺寛保元年位牌の三例である。現在までの実例では寛文7年からだが実際にはもっと早くからであろう。退化請花座が更に退化して傾斜面が凹曲線を示すようになったものに海宝院慶安5年位牌がある。次いで中腹に接してあった低い受座と蓮弁の反転を表現していた低い座が消滅する。逗子延命寺正保2年位牌・妙光寺寛文11年位牌・同貞享3年位牌・金剛寺元禄14年位牌の四例である。次いで傾斜面が更に退化して直線で表現されるに至るが資料からは法性寺寛文10年位牌・延命寺延宝2年位牌の江戸初期から、延命寺文政2年位牌の江戸後記につづく。このことはこの最も退化した形が江戸後期まで残ることを示すものである。

中腹 ――上框と下框の間にあるやや小さい長方形部分である。正面にのみ刻文されるのが普通であるが全く無文のものもある。当初から全くの無文であるのか、後補の場合省略されたものかはまだ明らかではない。多くの場合、正面左右両端から少し入ったところに縦にやや巾広の沈線が刻まれる。即ちこの刻線によって両端に束が刻まれたことになる。両沈線の間部分を無文のままにしたものもあるが、この部分に連子形を刻むものがあり、花形を刻むものがあり、格狭間を刻むものがある。格狭間の中を無文にするものと、連子を刻むものと、花形を刻むものとある。

上框下低い受座と下框の反花座上の受座とにはさまれた中腹は和様須弥壇あるいは礼盤をみるのと同じ形になる。古いものが羽目部分が連子になっているのも、その影響をうけたものと考えられることができる（例―鎌倉常盤山文庫所蔵鎌倉期礼盤）。羽目に格座間を刻み、その中を連子にした礼盤が鎌倉覚園寺愛染堂にある。内面に万治元年の墨書銘があるから、この意匠は江戸初期のものと知られる。やがて連子に変わって宝相華と思われる花文が刻まれるようになり、次第に複雑化する。やがて家紋が刻まれるものもでてくる。

基台をみると上框下框中腹の三部分を同時に比較する必要がある。しかし注意すべきは後補が多いことと、刻まれた年号よりも後世の作が多いことである。以下その編年を考えるにあたって上框A様

式・下框A様式の型を略して框AA型と記す。框AB型・框BB型などこれにならう。

○慶長以前

1 框AA型、中腹連子文のものには赤星藏（文禄3年）・浄光明寺（天正元年）・福厳寺（慶長14年）位牌の三例がある。

2 框AA型、中腹全く無文のものに海蔵寺（永享6年・永正10年）・延命寺（永禄3年）位牌の三例がある。これが後補でなければ最古型だが後補の疑いもあるので保留する。

3 框AA型、中腹に格狭間があり、格狭間中が無文のものが延命寺（慶長15年）位牌にあるが、同寺の延宝2年位牌と全く同じであるけれど、延宝2年位牌は横の比が2.2であるのに、これは3.2だから、後補としても別々の時期としたい。

4 框AA型である延命寺天文20年位牌は中腹を失っているので保留する。

5 框BB型のものは新善光寺（天正18年）と妙真寺（慶長6年）位牌とに例があるだけ。古いものにはないから遅れてあらわれた型であろう。新善光寺のものは中腹が花文のみで、ほかに例がないし、妙真寺のは格狭間中に連子のあるものである。これは江戸初期のスタイルであるから補修である。

○元和から元禄まで（17世紀）

1 上框A型だが下框に反花座がない。中腹は格狭間内連子文。上框上に蓮座がつく。妙光寺延宝3年位牌。

2 框CA型。中腹花文。上框上に蓮座がつく。妙光寺延宝9年位牌。

3 框CA型。中腹格狭間内無文。法性寺寛文10年・延命寺延宝2年位牌。

4 框CA型。中腹格狭間内連子文。妙光寺万治2年・同貞享3年位牌。

5 框CA型。中腹格狭間内花文。延命寺正保2年。以下三例は上框上に蓮座がつく。妙光寺寛文11年・海宝院延宝2年・金剛寺元禄14年位牌。

6 框DB型。中腹格狭間内無文。海宝院寛文3年位牌。

7 框DB型。中腹格狭間内連子文。上框上に蓮座がつく。正覚寺寛文7年位牌。

8 框DB型。中腹格狭間内花文。海宝院慶安5年・妙光寺寛文12年位牌。

○宝永から寛政まで（18世紀）

この期のものは框を細かに記録した採集資料が少ないので十分な結果でない。

1 框CA型。中腹格狭間内連子文。上框上に蓮座がつく。法性寺宝永7年位牌。

2 框CA型。中腹格狭間内花文。延命寺寛保元年位牌。

以下は框の採集資料がないがいずれも中腹に格狭間が存在する。

3 中腹格狭間内無文。上框上蓮座。金剛寺享保15年位牌。

4 中腹格狭間内花文。妙光寺享保6年・延命寺宝暦8年・妙光寺宝暦8年・同宝暦14年・同寛政7年・延命寺寛政11年位牌。

5 中腹格狭間内宝珠唐草。延命寺宝永7年位牌。

6 中腹格狭間内花菱文。上框上蓮座。妙光寺宝暦14年位牌。

○享和から慶応まで

採集資料が少ないので後期としての特徴は把握していないが、江戸中期の延長であるらしい。

1 框C A型。中腹格狭間内花文。妙光寺文化13年・延命寺文政2年位牌。

以上によって江戸期に入ってから位牌をみるに、上框がC型又はD型になることと、寛文ころから上框の上に更に蓮座をもう一つ付加するものがあらわれ、江戸末に及ぶこと、中腹に格狭間が入るのが普通となることがあげられる。上框C型D型についての先後は今までの資料では明らかでない。ただ上框下側の退化請花座が理論通り変化するものかどうかは明らかでないが、最も退化した形が江戸後期までつくことはたしかである。

中腹について更に詳細に検討してみると古いのと新しいのとで、縦横の比に差違のあることがわかる。慶長までのものについてみると端に束をもつものが普通で、羽目文様は連子文が普通である。終ごろ花文や格狭間をもつ例がでるが、格狭間内は無文又は連子文である。格狭間は江戸期に入ってから普通になるのだが、このころ発生したと考えることもできる。縦横の比が1対4又は5が普通だから極めて低い。格狭間がでてくると1対3と高くなる。江戸に入るとすべて羽目に格狭間が刻まれるようになる。元和から元禄まで(17世紀)をみると、格狭間内無文・連子文・花文とあるが、それらの間に年代差はみられないようである。縦横の比が1対2.7と高くなる傾向がある。宝永から寛政まで(18世紀)をみると格狭間内無文・連子文はあるが極めて少なく、大部分が花文となる。花文のかわりに紋所などを刻むものもでてくる。縦横の比が1対3.3と低くなる傾向がみられる。享和から慶応まで(19世紀)は採集資料が少なすぎて今のところ何ともいえないが、格狭間中に無文や連子文のものがなくなり、すべて花文となることがわかる。紋所を入れることもひきつづくものと思われるが実例をみていない。縦横の比は1対3.2と再び低目になるようだが資料不足だからはっきりとはいえない。中腹文様と時間別比較及び縦と横との比を示す表は次の如くである。

基 台 の 時 間 別 中 腹 文 様

文様別		時間別	元 和 以 後		
		慶長以前	元禄まで (17世紀)	寛政まで (18世紀)	慶応まで (19世紀)
端	無	○	○	?	?
	連 子 文	○	×	×	×
	花 文	○	×	×	×
	格 狭 間	○	○	○	×
束	無 文	○	○	○	×
	連 子 文	○	○	○	×
	花 文	×	○	○	○
	紋 所 な ど	×	○	○	?

中腹 縦1 に対する横の比

海 蔵 寺	永 享 6	4.1	延 命 寺	延 宝 2	2.2
"	永 正 10	5.75	妙 光 寺	" 3	2.8
赤 星 蔵	永 禄 3	5.0	"	貞 享 3	2.4
新 善 光 寺	天 正 18	3.7	法 性 寺	宝 永 7	3.3
妙 真 寺	慶 長 6	3.0	延 命 寺	寛 保 1	3.0
福 厳 寺	慶 長 14	3.09	妙 光 寺	宝 暦 8	3.4
延 命 寺	慶 長 15	3.2	延 命 寺	" 8	3.1
"	正 保 2	2.8	妙 光 寺	" 14	3.3
海 宝 院	慶 安 5	2.5	"	" 14	4.6
妙 光 寺	万 治 2	3.2	"	寛 政 7	2.8
正 覚 寺	寛 文 7	2.6	延 命 寺	" 11	3.3
法 性 寺	" 10	2.7	"	文 化 4	3.2
妙 光 寺	" 11	2.9	妙 光 寺	" 13	3.0
"	" 11	2.9	"	慶 応 3	3.3

4. 雲形位牌編年試案

○ 慶長以前

- 1 雲冠の蓮座が必ず古様式の五弁の蓮座からなる。
- 2 雲形のみものが古く、雲上に日輪がでるのは慶長になってからである。
- 3 上框の下側に中腹をうける低い受座があるだけである。
- 4 上框・下框はA A型・B B型（及びその混合型もあるか）であって、C型D型は存在しない。
- 5 中腹は連子文が古い。
- 6 中腹は低く、縦横の比は1対4又は5くらい。終り頃1対3になる。

○ 江戸期

- 1 雲冠の蓮座が必ず交互に内外弁を表わす形の蓮座からなる。
- 2 雲冠にはすべて雲の上に日輪がつく。
- 3 雲形の上2個の間隔がはなれるほど新しい。
- 4 上框の下側に退化請花座がつく。（請花座に退花の段階が知られているが編年にまで至っていない。）
- 5 下框はA型とB型であるが、上框はすべてC型D型である。
- 6 上框の更に上に蓮座がつくのは寛文ころからである。
- 7 中腹に格狭間が刻まれるのが普通。格狭間内に初期には連子文もあるが、後には宝相華などの花

文が普通となる。

8 中腹の縦横の比は初期には1対2.7と高くなるが、中期には1対3.3と低目になり、後期には1対3.0とやや高めになるようである。

神 武 寺 の 植 生

宮 脇 昭

は じ め に.....	87
I 調査地と調査方法.....	88
(1) 調査対象地域	
(2) 植生調査法	
II 調 査 結 果.....	89
(1) 植 物 相	
(2) 相 観	
(3) 植 物 群 落	
(4) 植 生 図	
III 植物の保全・復元ならびに適正な利用についての提案.....	97
ま と め.....	98
参 考 文 献.....	98

神 武 寺 の 植 生

は じ め に

東京都をはじめとする京浜地区の大都市の最近の発展、過密都市化は益々増大している。かつては閑静な保養の地として知られていた逗子市にも、その影響は、さまざまの形となって現われている。海岸はいうまでもなく、丘陵部にもレクリエーションの場を求めて集まる人々が非常に増加してきた。また、土地造成の波はこの町にも例外なくおし寄せ、平地のみならず、山地にもブルドーザーの姿が見られるようになってきた。

三浦半島の宅地造成は急テンポで進展している。隣接の鎌倉市では、そのために貴重な文化財や景観が破壊される寸前にまで追いつめられている。これら文化財の保全を求める声が高くなり、古都保存法の成立をみたことは周知の事実である。このような場合、常に先行するのは開発の工事であり、文化財の保護や景観の保全に関する施策は後手にまわっている実状にある。そうして、自然の保護を叫ぶ側と開発を進める側とは、しばしば正面から対立している。

しかし、本来、開発と保全とは相反するものではない。よりよき開発のためには、必要な地域は完全に保存されるのが理想的な姿である。景観の保全は、ただ単に学術的な価値あるものを残すというだけではなく、開発される地域自体の価値を高めることにもなる。レクリエーションの場となる場合にも、文化財や自然景観を完全に保全することによって、その価値を維持することができるものである。そのためには、何を開発し、何を保存するかは、県や市の行政当局があらかじめ、公的立場に立って明確に決定されていることが望ましい。そのための基礎資料の一つとして、客観的かつ科学的な植生要素の質的内容やその具体的配分の調査が必要になってくる。

オランダ、ドイツ、スイスなどヨーロッパの多くの国やアメリカ合衆国、ソ連などでは最近、国あるいは公共団体によって、植生の調査から立地診断、さらにそれを地図上に具体的に示した植生図が作成され、土地開発はもとより、あらゆる土地利用の基礎資料として使われている。

逗子市においても、その必要性を認められ自然についての調査が着手された。神武寺は鷹取山に続くハイキングコースになっていて、静かな散歩を楽しむ人々に愛好されている。寺は日本に仏教が伝来してほどなく開山されたという古いもので、寺そのものの文化的価値はいうまでもない。寺領として長く保護されてきた森林などについて、客観的な植生調査をして植生学的位置を明確にした上で、保全の対策を提案するのが本調査の目的である。

この調査を依頼され、種々便宜を与えられた逗子市社会教育課君島安正課長と同課の内海孝平氏に厚く御礼申し上げたい。また調査や資料整理に協力戴いた川村優子、藤間潤子、楠 直、原田洋の各氏に

も感謝したい。

現地調査に便宜を与えられた神武寺住職にも厚くお礼申し上げたい。

I 調査地と調査方法

1. 調査対象地域

神武寺は逗子市の西部沼間にある、沼間山と称される低い山の山頂部にある。伝えられるところによれば、およそ1200年前に僧行基（668～749）によって開山されたといわれ、鎌倉時代には全盛を極めたという。その後火災によって衰退し、現在の本堂は130年ほど前に建立された。

寺林は、本堂や客殿を中心にして、標高133.6mの山頂部から南は田越川の谷部へと広がり、北はやや緩傾斜で鎌倉から連続する丘陵に続いている。また西は沼間西部の谷となり、東は尾根伝いに鷹取山に続いている。

一帯の地層は、三浦層群中の池子凝灰質岩石で、凝灰質砂岩と凝灰岩からなっている。参道の途中や本堂、鐘楼、岩窟などにこの露頭がみられる。凝灰岩が風化して生じた土壌は、山頂部や尾根部では、きわめて薄く、したがって、ここでは乾燥も著しい。谷部では、厚い土壌が堆積し、かなり湿った沢をなしている。

逗子市を中心とした三浦半島一帯の気候は神奈川県内でも温暖な気候といえる。図1に示されるように、とくに冬期の気温が高いことがわかる。また、植物の生育に関係のある降霜日数も、図2にみられるように、30日以下で神奈川県内では、少ないほうである。

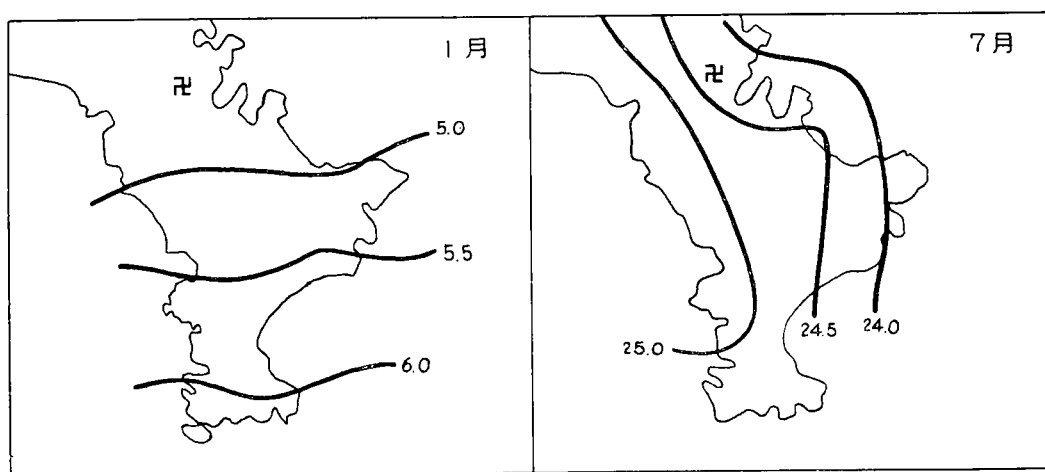


図1 三浦半島の月平均気温（℃）

風は北風が卓越しているが、風速は半島の海岸部に比べて弱いことが知られている。

今回の調査は、主として本堂や庫裏を中心とした寺林内の約13ヘクタールにわたる地域で行なわれた。

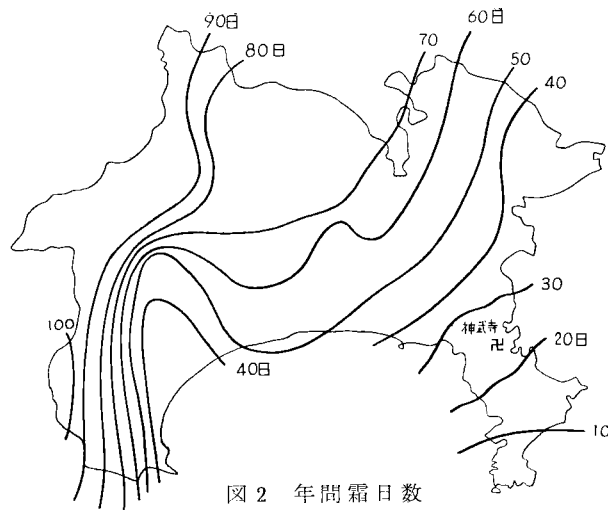


図2 年間霜日数

2. 植 生 調 査 法

まず、全山を踏査して、どのような植生がみられるかを知り、自然植生かあるいは人間の影響が加わってきた代償植生かをみながら相観的な把握をした。その上で各植生のできるだけ均質な部分を選んで植物社会学的植生調査を行なった。この植生調査は表1に示されているように、調査区内の全出現種をリスト・アップしたものである。出現種は、高木層、亜高木層、低木層、草本層、蘚苔層の各階層別に記録し、それぞれに、被度と群度を記録した（Braun-Blanquet 1964の方法による）。この調査に際しては、方位、傾斜、微地形、土壤条件、隣接群落など、観察された環境条件ももらさず記録された。

植生調査の資料は、ほぼ同じ群落に属すると思われるものをまとめて群落組成表に組んでいく。まず、素表をつくり、常在度の高いものから順に常在度表に組みかえる。さらに、標徴種を見いだして、群落組成表を組んでいく操作がくりかえされた。神武寺では、群落の面積が小さく、均質な植物群落が選べなくて、植生調査の数が十分に得られないものがあった。そのような群落の組成表を組む際には、関東地方ですでに知られている資料が参考にされた。

組成表をもとに、植生図の作製指針を作成して凡例がきめられた。現地調査をくり返して、地形図の上に、具体的な植物群落の配分を色わけで記入していく作業が進められた。

最終的には1:1,200の地形図上に群落単位の配分が示されたが、参道沿いの草原や岩壁上の群落は面積が極めて狭く、また上層の群落と重なることもあるので、記入されなかった。

II 調 査 結 果

1. 植 物 相

案内記などによると神武寺境内の「なんじゃもんじゃの木」としてホルトノキが重要視されている。江戸時代にポルトガルから移植されたものと説明書がついている。ホルトノキはモガシとも称されて、暖地性常緑広葉樹であって房総半島以南には広くみられる。現在では特に珍樹というほどのものではな

い。境内には、このほかイヌマキ、イチョウ、ミツデカエデ、アカガシ、コナラなどの高木がみられる。

神武寺林は、また、シダ植物の豊富なことで知られている。種類は約30種にも達しその被度も高い。これらのシダは大きく分けるとふたつの立地に生じることがわかっている。その一つは崖や岩地の斜面で、一般に土壌の浅い立地条件に耐えて生育しているもので、ヤブソテツ、オニヤブソテツ、コモチシダ、ヘランシダ、ゲジゲジシダ、オウレンシダなどである。第2のグループは森林内や林縁などで、比較的土壌も厚く安定した立地に生育しているものである。リョウメンシダ、ホソバカナワラビ、イワガネソウ、イノデ、イノモトソウ、オオバノイノモトソウ、ベニシダ、ジュウモンジシダ、シケシダ、ホソバシケシダ、ホシダ、イヌワラビ、イタチシダ、オオイタチシダがこれに属している。

2. 相 観

神武寺の参道の周辺および本堂や庫裏の周辺部には常緑の広葉樹林がみられる。これらの樹林には、スダジイをはじめとして、シロダモ、アカガシ、タブなどの高木がうっそうと茂り、低木や下草にも、アオキ、ヒサカキ、ヤブコウジなどが多くみられる。林内には、常緑のシダ植物も多い。このような広葉樹は、神奈川県下や広く関東地方の沿岸の諸所にみられる寺林と同じような相観を示している。

山頂部付近から谷に向かう傾斜地には、スギを主とした植林地がみられる。これらの植林地のスギ、ヒノキは樹高が30mにも達してきわめて生育がよい。しかし、とくに巨樹や高樹令のものはみとめられない。

本堂の北側をのぼりつめた最高地点(127m)あたりから北にかけては雑木林が広がっている。主として、夏緑広葉樹からなり、冬になると殆んどの木が落葉して、林内は明るくなる。この林は常緑広葉樹林や植林と比べると樹高も低く、10m以下である。

以上が相観的にみた森林であるが、それ以外の部分で、参道の縁や伐採跡などにも異なった植生がみられる。かなり、巾広くとられた参道の両側は、年に何回か草刈が行なわれて、アズマネザサやススキなどを主とした草原となっていてところがある。また草刈が行なわれていない部分では、低木やつる植物が茂ったマント群落となっている。

凝灰岩は比較的良好に切りとり易いので山地の中には、洞窟、参道、墓地、鐘楼などを建設するため切られた岩の露頭が多い。これら垂直に近い斜面には、コケ植物の多い特殊な植物群落がみられる。ここには、土壌はほとんどなく、保水力の乏しい岩上にはジャゴケ、イワタバコ、ヘランなどが一面に付着している。

3. 植 物 群 落

神武寺周辺の植生は相観的には以上のように大まかに把握されたが、これを、植生調査資料から種組成的な単位にまとめた結果、つぎの6つの植物群落がみとめられた。

1) スダジイーヤブコウジ群集

常緑広葉樹林は植物社会学的にみると2つの群落に大別することができるが、その一つがスダジイー



図3 スダジイヤブコウジ群集模式図

ヤブコウジ群集である。(表2)

高木層と亜高木層にはスダジイ、モチノキが、草本層にはヤブコウジ、シュンランが標徴種として存在している。さらに、ヤブツバキ、シロダモ、ヒサカキ、アオキ、ヤブニッケイ、ヤブラン、テイカカズラ、ベニシダなど常緑広葉樹林（ヤブツバキクラス域）の構成種が多くみられる。

群落の構成は図3に示すようにスダジイ、アカガシなどの高木層が12～13mに達し、トベラ、モチノキ、アオキなどが亜高木層を占めている。低木層で著しいのはジュズネノキで、各調査地で50%の植被率をもっている。一般に林床植生は種数が少なくてテイカカズラ、ベニシダがやや高被度でみられる。

ヤブツバキークラス域では、海岸性のスダジイやタブを主とする樹林と内陸性のカン林があることが知られている。神武寺は海岸から2kmあまりの距離にある。標高はかなり高いが、シイ林要素のイヌビワ、ジュズネノキ、トベラ、オオイタチシダなどが多い。カン類ではウラジログシなども多い。

この群集の立地をみると、山頂部から南側の傾斜地に比較的広く成立している。この部分は、土壌は一般に浅く、凝灰岩の母岩が露出している場所もある。スダジイなどの根が土中に深くはいることができなくて、地表近くを横行しているのも見られる。立地の傾斜は20°から40°までとかなり急であり、土壌の安定を悪くしている。また、この立地の土壌は乾燥しやすく、林床の植被率は30%と低い植分が多い。

く見られる。

神武寺林のスダジイ林も三浦半島の他の地域のスダジイ林とおなじように母岩の露出した斜面や尾根筋にはウラジログシ、アカガシ、アラカシなどのカン類を量的には少ないが混生している。周辺部の斜面にはスダジイの萌芽林が多くみられる。

スダジイを主とする植物群集の主なものとしては、スダジイ・タイミンタチバナ群集とスダジイ・ヤブコウジ群集が知られている。前者は、九州・四国から本州の伊豆半島まで分布が認められており、後者は九州北部から四国と本州の房総半島にまで分布している。したがって神武寺のスダジイ林は、関東地方における典型的な群集といえることができる。

2) タブーホソバカナワラビ群集

神武林の常緑広葉樹林のもう一つのものはタブを主とする樹林である。表3にみられるように高木層、亜高木層には、タブが優占し、草本層にはホソバノカナワラビとフウトウカズラがあってこれらが群集の標徴種となっている。

ヤブツバキクラスの構成種である、アオキ、テイカカズラ、シロダモ、ヒサカキ、ベニシダが多く、また暖地海岸性の要素であるジュズネノキ、ヤブニッケイ、イヌビワ、トベラがみられる。さらに、林床には、ジェウモンシダ、オオバノイノモトソウなどのシダ植物も豊富である（図4）。

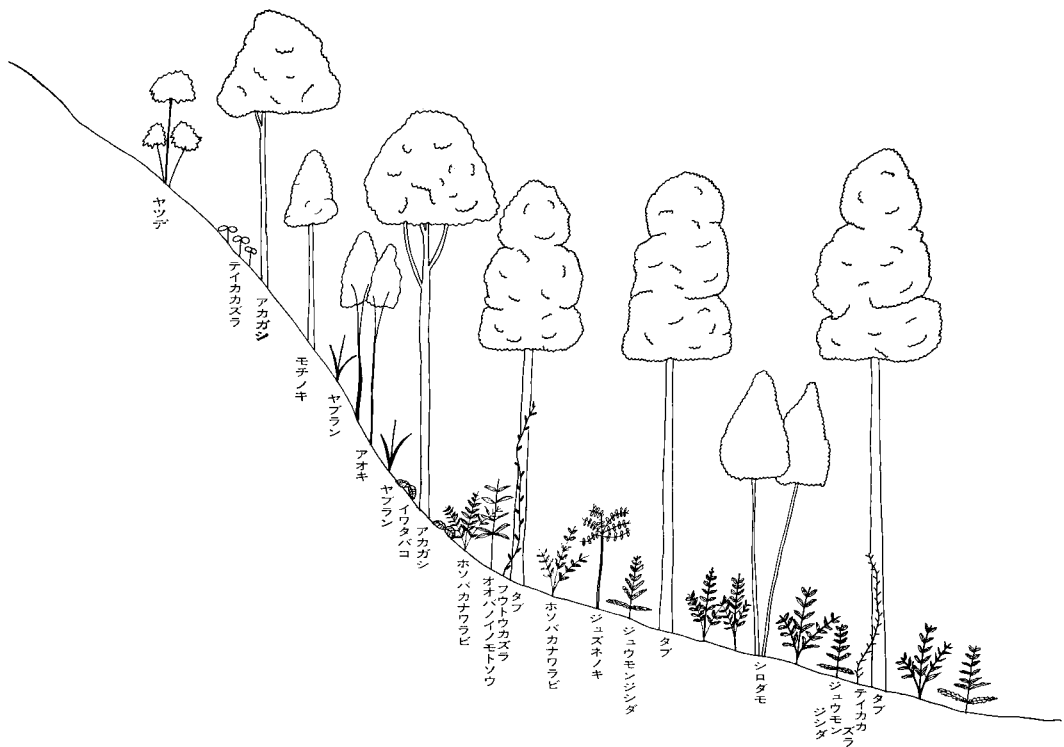


図4 タブーホソバカナワラビ群集模式図

タブーホソバカナワラビ群集は本堂の東側で、谷の緩傾斜地に見られる。ここには、風化した凝灰岩がやや厚く堆積して、湿潤であり、幾分粘土化した土壌を形成している。植生調査では、林床中に母岩の露出した部分があって、イワタバコ、コモチシダなどがみられるが、一般に林床は湿潤で被度も高く、種数も豊富である。今回の調査では、十分な面積をもつ典型的な植分について、植生調査を行なえなかったため、海岸付近の典型的な群集とやや異なった植分といえる。

日本のタブ林は、九州、四国から三浦半島まではタブーホソバカナワラビ群集が分布しており、三浦半島・房総半島以北ではタブーイノデ群集が分布していることが知られている。したがって神武寺林のタブーホソバカナワラビ群集はほとんど北限に近いといえる。

3) ケヤキーイロハモミジ群集

客殿の西側に残っている落葉樹林はケヤキーイロハモミジ群集にまとめられた(表4)。高木層にケヤキ、イロハモミジがあり、草本層にキチジョウソウ、ハウチャクソウをもつ植物群落である。この立地は、神武寺駅に向かう道の小溪谷に沿った部分で、風化した凝灰岩が粘土状になって、かなり厚く堆積している。林床の植生の被度も高く種類も豊富である。また、林内には、ヤブツバキクラス要素であるスダジイ、シロダモ、アオキ、キヅタ、テイカカズラなどがみられる。

現在この林内は、イロハモミジを保護するために、垣根をめぐるして、中へ入れないような施策がほどこされている。

以上の3つの植物群落は神武寺林内で、ほとんど自然の状態で、人間の手加えられないままに維持されてきた自然植生である(表4)。

4) 二次林(コナラ林)

コナラ林は、人間が定期的に伐採をくり返すことによってできる二次的な森林である。神武寺林域では、庫裏の北や、小溪谷の西側など周辺部にこの落葉樹林が認められる。

二次林の主要な要素をなすのは、伐採によって、株の根もとから再生枝をだし、それが高木にまで生育することのできるような樹種である。コナラ、クリ、エゴノキ、ヤマザクラを主とし、それに、林床にはヒカゲスゲ、コウヤボウキなどがみられる(表5)。

また、一度皆伐したことによって、草原となったため、アズマネザサ、ヤマシロギク、メダケ、ノイバラなどのススキ草原要素も認められる。また、林縁部からはマント群落の要素としてのミツバアケビ、ヤマノイモ、トコロ、サルトリイバラ、ウツギなどの侵入がみられる。

第1に注目されることは神武寺のコナラ林には、関東平野の内陸部のコナラ林にくらべて、林内にヤブツバキクラス要素が豊富なことである。スダジイ、ヤブツバキ、アカガシ、アラカシ、モチノキ、ウラジロガシが亜高木層を占めている。また、アオキ、テイカカズラ、ヒサカキ、ベニシダなども多い。定期的に皆伐をくり返しているコナラ林では、常緑広葉樹はこんなに多くみることはないので、寺林内ではかなりの間伐採が行なわれなかったと推定できる。一時的に薪炭林として皆伐されたあと、現在ではカン類を主とした常緑樹が、次第に回復しきっているものとみることができる(図5)。

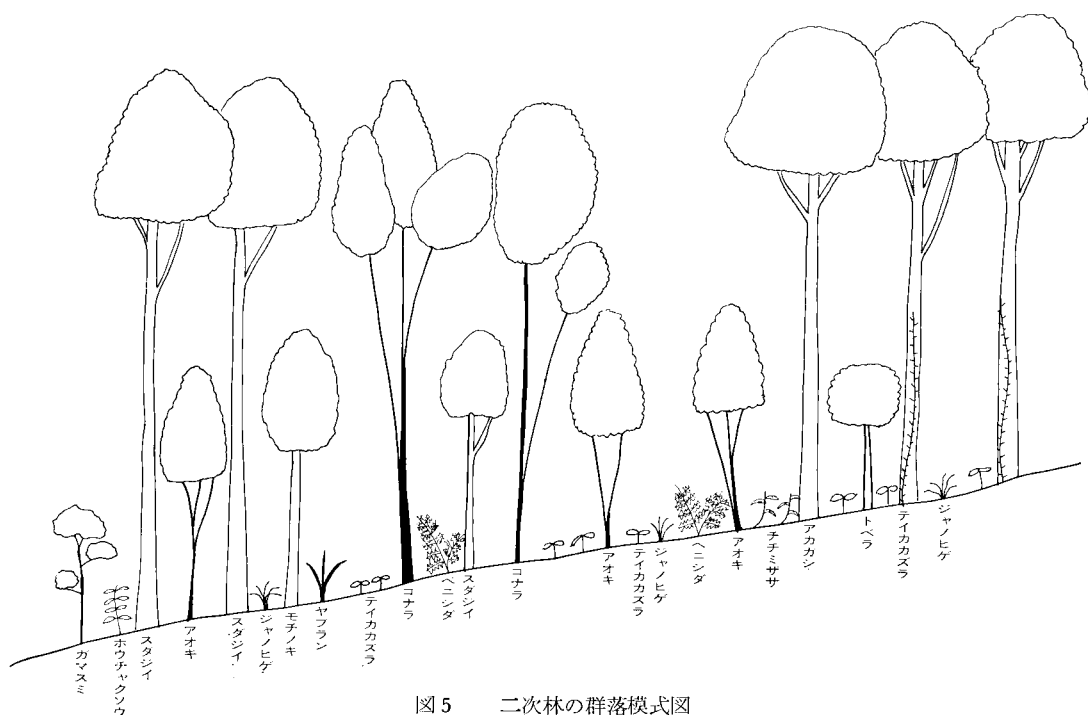


図5 二次林の群落模式図

なお、この二次林の第2の特色として、立地が一般に貧養であることが挙げられる。関東地方で知られているクヌギーコナラ群集は、多くの場合、厚いロームのひかてき肥沃な土壌の上にあり出現種数も60種から80種という群集である。この寺領内では、出現種も少なく、林床被度が比較的低い。ヤブムラサキ、コバノトネリコ、キッコウハグマなどは、土壌の浅い貧養の立地であることを示している。

立地は北及び西むきの斜面が多く、母岩の露出もみられる岩の間隙の土壌の堆積した部分にカン類やコナラなどの高木が生育している、。

さらに、典型的なクヌギーコナラ群集と比較して異なるのは、ススキーアズマネザサ群落の要素やマント群落の要素が少ないことが挙げられる。種数の面からみても、被度からみても、常に更新をくり返す二次林よりもはるかに少ない。このことは、これらの二次林の、常緑広葉樹林にむかっの遷移がかなり進んでいることを示している。

5) スギーヒノキ植林

スギやヒノキを植えた植林は寺林のうち、南面の傾斜地に広くみられる。高木はスギ、またはヒノキから成り、樹高は25mにも達しきわめて生育がよい。

植林の植生調査の結果は表6にまとめられた。一般に植林地では、高い生産を計るため亜高木層、低本層は伐り払われることが多い。しかしこの寺林内の植林地では、各階層が認められて、森林としてバランスのとれた様相を示している（図6）。

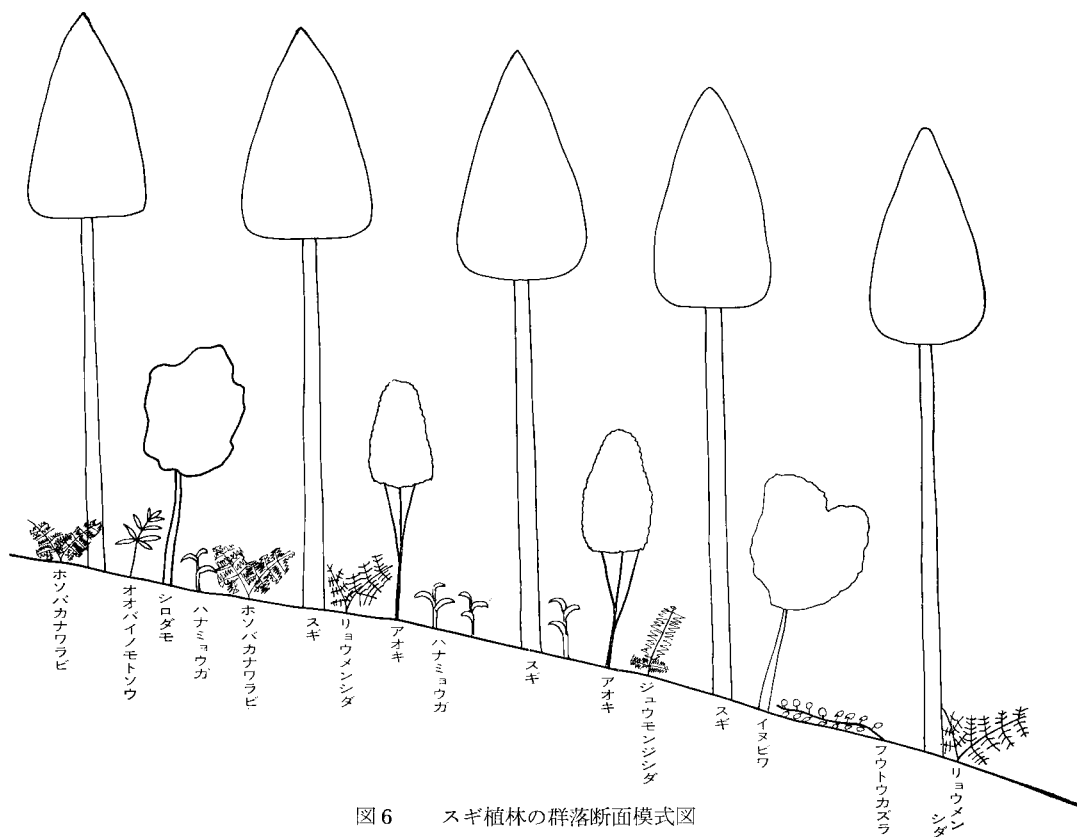


図6 スギ植林の群落断面模式図

群落の構成種をみると、ヤブツバキクラス要素をはじめとして、タブ林要素であるタブ、フウトウカズラ、ホソバカナワラビなどが多くみられる。これらのことから、スギの植林地は、タブーホソバカナワラビ群集の立地であることが推定できる。

一般に社寺付近のスギーヒノキの植林地は造営のため、あるいは、社寺の財源として欠かすことのできないものとされている。本来の自然林ではないが、神武寺林の場合では、植林が理想的な形で残されているといえる。

6) ススキーアズマネザサ群落

定期的に、人に刈り取られることによって存続するのが、ススキーアズマネザサ群落である。寺林内では参道の南側にその典型的な群落がみられた。ここは、植林を伐採した跡にヒノキの苗が植えられており、その保護のために、下草刈が行なわれている部分である。立地は尾根状になった部分で、受光量も多くススキの被度が大きい。

また参道の両側も刈り取られた草原である。ここでは上層がスダジイなどに被われているので受光量が少なく丈の低い草原となっている（表7）。

7) マント群落

林縁ぞいには帯状にマント群落が発達している部分がある。マント群落を構成しているのは、モミジ

イチゴ、ヌルデ、キブシ、ニワトコ、タラノキなどのような低木の陽樹にクズ、トコロ、スイカズラ、ヘクソカズラ、エビヅル、ノブドウなどのつる植物である。これらの種群が複雑にからみ合って林縁を一面に被っている（表8）。

マント群落は機能的には、林内へ日光や風が侵入するのを防いで、自然条件の存続をはかっている。マント群落は見たところ、邪魔に思えるが、破壊された森林の治癒組織のような存在である。

8) 岩壁のイワタバコ群落

凝灰岩の切断面は比較的多孔凹凸もある。このような岩面が風化されてから長い間に表面に次第に植物が付着して、きびしい環境条件に耐えて独得の植物群落を形成している。

群落成立の初期はジャゴケの着生から始まり、そこへマメヅタ、ミツデウラボシ、イワタバコが付着して生育をはじめ。さらに、そのあとには、マルバウツギ、イヌシダ、ゼンマイが加わるが、これらの植物の生育はよくない。イワタバコは次第に被度を増してやがて岩壁一面を被うようになる。

イワタバコは初夏に紫の花をつけて、岩壁をかざっている。切られた岩壁上に、イワタバコが密生するまで付着するのには長い年月を要したと推定される。

以上の植物群落の配分は図7に示されているように、それぞれの立地に対応している。

4. 植 生 図

確認された植物群落が、現在どこにどのような広がりをもって配分されているかを図上に表わしたものが現存植生図である（図7）。凡例は自然植生は群集を単位として、また代償植生は群落を単位とされている。

1) タブーホソバカナワラビ群集

尾根の南側の凹地に、僅かな面積が認められるに過ぎない。南斜面はかなり急なため土壌の堆積が多くないこと、また本来、この群集の立地が、スギの植林地として利用されているためと考えられる。

2) スダジイーヤブコウジ群集

尾根や山頂部または参道に沿って部分的に広がっている。スダジイの樹冠は大きく広がっているもので、ススキ草原やイワタバコ群落の上部を被っている。常緑樹林中で最も広い面積を占めている。

3) ケヤキーイロハモミジ群集

面積としては狭い。小溪谷の谷頭にあって山地の中でも景観上すぐれた部分である。

4) ススキーアズマネザサ群落

山域では、参道の南側にわずかにまとまって認められる。ここも植林地として利用されている。参道の両側で刈り取られる草原については面積もせまく図上に表わされなかった。

5) マント群落

植林の林縁や小溪谷沿いの道ぞいに帯状にみられる。つる植物を多くもたないマント的群落は他の林縁にも小面積がみられる。

6) 二 次 林

神武寺の周辺部にあって北側の斜面では山のふもとまで続いている。また尾根部では鷹取山まで連続している。本来、スダジイ・ヤブコウジ群集の立地とみなされる。

7) スギ・ヒノキ林

主として南側の斜面にひろがって、広い面積を占めている。この立地は本来、タブ・ホソバカナワラビ群集の立地である。南に面した傾斜地は受光量も多く土壌も厚い肥沃な立地である。

Ⅲ 植生の保全・復元ならびに適正な利用についての提案

以上のような植物社会学的、生態学的な立場から調査を行なった結果に基づいて、神武寺林の適切な植生保全に対しての提案をしたい。

寺林は現在、立地に適合した自然林と、人の施業によって成立し持続している代償植生の森林からなる。植生を保全するためには、まず保護の中核地帯として、自然のスダジイ・ヤブコウジ群集域、タブ・ホソバカナワラビ群集域を厳正に保護することが望ましい。この群集域は急傾斜であるため、ハイキングなどに訪れる人も林内に立ち入れない区域が多い。このことは森林保護にとっては幸いなことである。林内では必要な小径を設置して、それ以外の場所へは立入りができないようにできれば理想的である。樹木の伐採は禁止する。

また、中核地帯がいかに保存されても周辺部の植生帯が荒廃すれば、その影響が直ちに中心部へも及ぶ事が知られている。したがって、スギ・ヒノキの植林やコナラの二次林を周辺地帯として保護する必要がある。周辺部では、できるだけ樹木の伐採は避けたいものであるが、止むを得ない場合は間伐の方法を採る事が望ましい。とくに、コナラの二次林は、自然植生への復元がかなり進行しているので、できるだけ人手を入れないようにしたい。

また、どの保護区域についても、神武寺の場合は、まず林床の保全を計るように留意することが重要である。立地の大部分が、水分の少ない不安定な浅い土壌であり、一度、土壌の流失、破壊が起ると、なかなか回復が難しい。林床の保全については、あらゆる面からの留意が望まれる。下草刈りの廃止、林内への立入り禁止、本堂や庫裏付近からの塵芥の投棄をしないこと、配水路の整備などがあげられる。神武寺の本堂や庫裏は、清掃が行き届いていることで有名である。本堂の南側の部分は垣根を作って土砂が林内に流入しないような対策が考えられる。

神武寺で認められた常緑広葉樹林植生は、かつては三浦半島一帯に広がっていた自然植生と考えられる。人間の影響が全く無かった時の原植生に近いということで、われわれに残された「ふるさとの森」といえる。三浦半島一帯をみても神武寺ほどの規模で典型的な自然林に近い林分が残存している所は数が少ない。その意味でこの植生は、三浦半島や湘南地方の植物群落のかがみとして都市開発、自然公園設置、街路樹植樹、遊園地設置などさまざまな建設のための基礎資料ともなるはずである。

今回は、時間的制約もあって寺林に続く広範囲な森林については、調査の手が行き届かなかった。今後、逗子市内全般にわたって広い範囲の調査が早く完成されることが期待される。

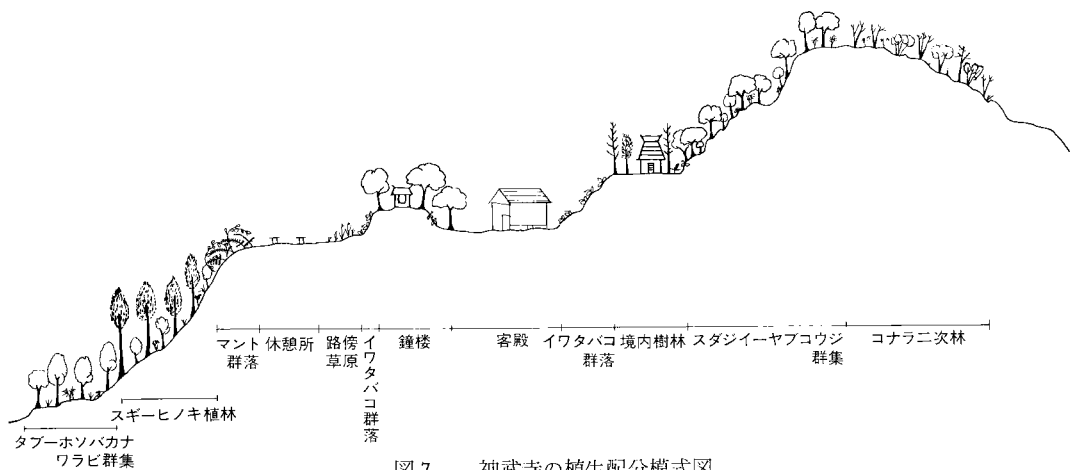


図7 神武寺の植生配分模式図

ま と め

逗子市沼間にある神武寺の社寺林について植物社会学的植生調査を行なった。

- 1) 調査の結果つぎの7つの植物群落がり認められた。それぞれの群落は組成表や群落断面模式図などに示されている。

自然植生

- スダジイヤーブコウジ群集
- タブーホソバカナワラビ群集
- ケヤキーイロハモミジ群集

代償植生

- コナラ二次林
- スギーヒノキ植林
- ススキーアズマネザサ群落
- マント群落

- 2) 群落単位にしたがってその具体的配分を示す現存植生図（1:1,200）を作成した。
- 3) 植生保全に関する提案として中核地域と周辺区域に分けて、とくに林床の保全を計ることが提案された。

文 献

- 1 Braun - Blanquet, J. 1964: Pflanzensoziologie. 865 pp. 3 Aufl. Wien. New York.
- 2 Ellenberg, H. 1956: Grundlagen der Vegetationsgliederung, I Aufgaben und Methoden der Vegetationskunde. 136 pp. Stuttgart.
- 3 藤本治義 1950: 日本地方地質誌 関東地方 pp. 349東京
- 4 香川幹一 1964: 神奈川県地理 441 pp.

- 5 Küchler, A. W. 1964: The potential natural vegetation of the conterminous United States. American Geographical Society. New York.
- 6 Lohmeyer, W. 1961: Die pflanzensoziologische Karte als Grundlage für Bepflanzung und Ansaat im Strassenbau. Angew. Pflanzensoziologie. 17 29-31 Stolzenau / Weser
- 7 宮脇昭 1963: 自然保護と利用の生態学的基礎。沼田, 内田編. 生態学大系 6 巻 p. 197—225. 東京
- 8 宮脇昭 (編) 1967: 日本の植生 原色現代科学大事典 3 植物 535 pp. (学研) 東京
- 9 宮脇昭, 大場達之, 村瀬信義 1964: 丹沢山塊の植生。丹沢・大山学術調査報告書。P. 54—102. 神奈川県, 横浜
- 10 Miyawaki, A. 1964: Trittgesellschaften auf den Japanischen Inseln. Bot. Mag. Tokyo 77. (916) 365—374 東京
- 11 Miyawaki, A., S. Itow 1966: Phytosociological approach to the conservation of nature and natural resources in Japan p. 1—5 Div. Meeting of Conservation, the Eleventh Pacific Science Congress. Tokyo.
- 12 宮脇昭, 奥田重俊 1966: 箕面勝尾寺周辺の植生, 箕面勝尾寺付近の生物生態調査報告。p. 3—14 大阪企業局. 大阪
- 13 宮脇昭 1968: 港北ニュータウン地区の植生学的研究. 日本住宅公団. 東京
- 14 宮脇昭, 藤原一絵 1968: 藤沢西部開発地区の植生研究調査 p. 1—44. 藤沢市
- 15 宮脇昭, 藤原一絵 1968: 尾瀬ヶ原湿原植生の研究と植生図の作製。一次生産の場となる植物群集の比較研究。p. 46—60 仙台
- 16 Offner, H. 1960: Das Naturparkprogramm in der Bundesrepublik Deutschland. Bull. Prefss u. Informationsamts der Bunderegierung. Nr. 138—144 p. 5—44. Bonn
- 17 奥田重俊, 宮脇昭 1966: 自然教育園の植生と現存植生図。自然教育園の生物群集に関する調査報告第 1 集 p. 1—14. 東京
- 18 Schmithüsen, J. 1961: Allgemeine Vegetationsgeographie. 262 pp. Berlin.
- 19 鈴木時夫 1952: 東亜の森林植生 137 pp. 東京
- 20 Tüxen, R. 1956: Die heutige potentielle natürliche Vegetation als Gegenstand der Vegetationskartierung. Angew. Pflanzensoziologie. 13: p. 5—42 Stolzenau/Weser
- 21 横山光雄, 井手久登, 宮脇昭 1967: 筑波地区における潜在自然植生の作製と植物社会学的立地診断および緑化計画に対する基礎的研究。20pp. 日本住宅公団. 東京



写1. スダジイーヤブコウジ群集の林内。スダジイ、アカガシ、ヤブニツケイなどの高木の下には、アオキ、ジュズネノキ、イヌビワ、ヤブコウジ、ベニシダなどが生育している。



写2. スダジイーヤブコウジ群集の立地。土壌はきわめて浅く、母岩が地表に露出している立地では、高木の根は地表を横行する。林床の植物は貧弱で、人の立入りによる破壊を受け易い。



写3. 二次林（コナラ林）

尾根筋の二次林は、樹高5～6mのコナラ、アラカン、スダジイが叢生している。林内の構成種には、ヤブコウジ、ジャノヒゲ、アオキ、シロダモなど常緑広葉樹林要素が多く、自然林への回復が期待される。



写4. 神武寺は豊富なシダ類の生地として知られている。

森林内はもとより、林縁や路傍にもシダ類は高い被度で生育している。とくに、リュウメシダ、ジュウモンジシダ、ホソバシケシダ、ホソバカナワラビが多くみられる。



写5. 洞窟付近のイワタバコ群落

凝灰岩を切りとった岩壁にはジャゴケ、ミツデウラボシ、イワタバコ、リョウメンシダなどを生じ独特の岩壁群落を形成している。

神武寺 現存植生図

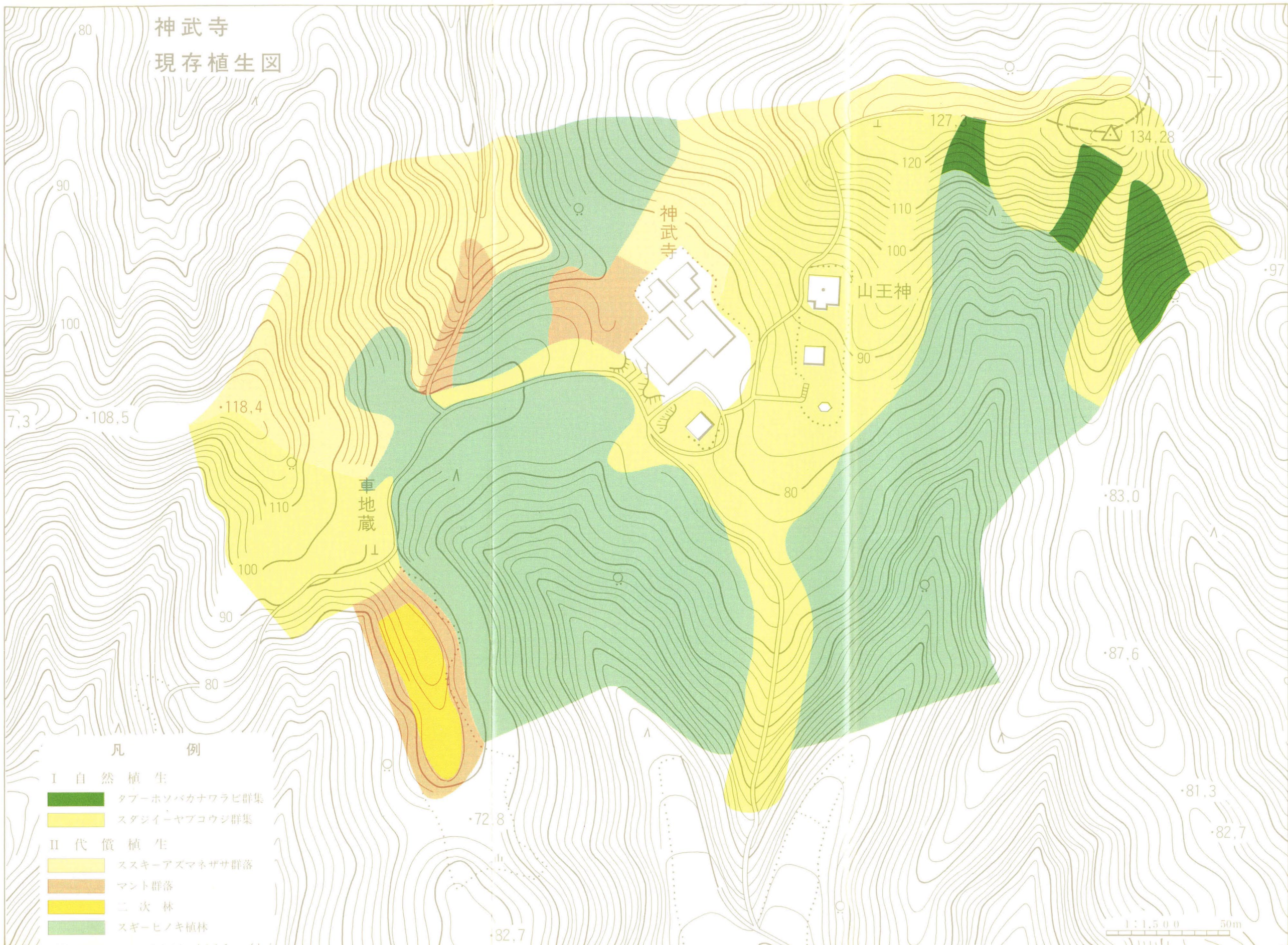


表 1. 植生調査の1例

調査番号	11	調査月日	10, May; '69
場 所	神武寺裏山	海拔高度	120m
高 木 層	B-1 12m 60%	隣接群落	スダジイ林
亜高木層	B-2 6m 70%	地 質	凝灰岩
低 木 層	S 2.5m 50%	土 壤	
草 本 層	K 0.3m 20%	方位傾斜	S 35°
調査面積	(m×m) 8×15m		

B-1	4.3	スダジイ	K	+	ヤブコウジ
	1.1	タブ		+.2	テイカカズラ
	2.1	コナラ		2.2	ジャノヒゲ
	+	エンコウカエデ		+.2	オオバジャノヒゲ
	1.1	スギ		+	コチヂミザサ
				+	イチヤクソウ
B-2	3.4	スダジイ		+	シケシダ
	1.2	モチノキ		+	シュロ
	+	ヤブニツケイ		+	スダジイ
	+	イヌマキ			
	1.2	ウラジロガシ	T	+	キヅタ
	2.1	ヤブツバキ		1.2	テイカカズラ
	2.2	アカガシ		+	ミツバアケビ
				+	ヤマノイモ
S	+	ウグイスカグラ			
	+	ホルトノキ			
	+.2	メダケ			
	+	サンショウ			
	1.2	ムラサキシキブ			
	+	ゴンズイ			
	+	ヤブムラサキ			
	+	ヤブニツケイ			
	+	ウラジロガシ			
	+	アカガシ			
	2.3	アオキ			
	1.2	ヒサカキ			
	4.4	ジュズネノキ			
	+	イヌビワ			
	+	トベラ			
	+	コバノガマズミ			
	+	カマツカ			

(※ T: 以下つる植物をTと示す)

表 2. スダジィーヤブコウジ群集組成表

逗子（神武寺）													調 査 番 号												
													G8	G11	G12	G2	G6	G7	G9	11	13	17	18	20	
調 査 年 月 日													10.16	10.16	10.16	9.27	10.16	10.16	10.16	5.10	5.10	5.10	5.10	5.10	
調 査 面 積 (m×m)													15×10	10×10	20×10	5×15	10×15	20×20	10×15	8×15	10×15	10×10	10×10	10×15	
高木層の高さ及び植被率(B ₁)													m/%	・	12×80	10×70	12×80	・	・	10×70	12×60	13×60	・	12×90	・
亜高木層の高さ及び植被率(B ₂)													m/%	4/80	8/30	8/40	8/30	8/70	8/60	8/20	6/70	8/40	・	6/10	10/80
低木層の高さ及び植被率(S)													m/%	4/40	2/20	2/30	3/40	3/40	4/40	3/40	2.5/50	2/30	5/90	4/60	4/40
草本層の高さ及び植被率(K)													m/%	0.5/20	0.8/90	0.5/	0.5/30	0.5/20	0.5/20	0.8/25	0.3/20	0.5/40	0.8/30	0.5/20	0.5/30
方 位 傾 斜													S	SW	・	SSW	K	E	SE	S	S	E	S	E	
出 現 種 数													20°	35°			5°	25°	25°	35°	20°	35°	40°	35°	
													44	32	43	19	42	40	40	36	22	28	30	31	
スダジィーヤブコウジ群集標徴種																									
スダジィー																									
	B ₁	・	3.2	4.3	5.4	・	・	4.3	4.3	4.3	・	4.4	・												
	B ₂	3.4	・	・	・	3.3	4.4	・	3.4	3.3	・	・	4.4												
	S	・	+	1.2	+	1.2	2.3	2.3	+	3.3	4.4	・	・												
	K	+	・	・	・	+	・	・	+	・	・	・	+	+											
ヤブコウジ																									
	K	+ .2	+	+	+	+	+	+	+	1.2	・	・	・												
モチノキ																									
	B ₂	2.1	・	2.2	3.2	1.1	・	・	1.2	3.2	・	・	・												
	S	1.1	+	・	・	・	+	+	+	+	+	+	1.2												
	K	・	・	・	・	+	+	+	・	+	+	+	+												
上級単位の標徴種																									
ヤブニッケイ																									
	B ₂	・	・	・	・	・	・	・	+	・	・	・	・												
	S	・	+	+	+	+	・	・	+	・	・	・	・												
	K	・	・	・	+	・	・	+	・	・	・	・	+												
イヌマキ																									
	B ₁	・	2.1	・	・	・	・	・	・	2.2	・	・	・												
	B ₂	・	・	2.2	2.2	・	・	・	+	2.2	・	・	・												
	K	・	・	・	+	・	+	・	・	・	・	・	・												
ツルグミ																									
	S	・	・	・	・	・	・	・	・	・	+	+	+												
	K	+	・	+	・	・	・	・	・	・	・	・	・												
キヅタ																									
	K	・	・	+	+	・	・	・	・	・	・	+	+												
	T	・	・	・	・	・	・	・	+	・	・	・	・												
タブ																									
	B ₁	・	・	・	・	・	・	・	1.1	・	・	・	・												
	B ₂	・	・	・	・	・	+	2.2	・	・	・	・	・												
	S	1.1	・	・	+	・	・	1.2	・	・	1.1	・	・												
	K	・	・	・	・	・	・	・	・	・	+	+	+												
シロダモ																									
	B ₂	・	1.1	・	・	・	+	・	・	・	・	・	・												
	S	+	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・												
	K	+	・	+	・	+	・	・	・	・	・	・	・												
ウラジロガシ																									
	B ₁	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	1.2	+												
	B ₂	+	・	・	・	2.2	・	・	1.2	・	・	1.2	・												
	S	・	・	+	・	+	1.2	・	+	+	1.2	・	1.2												
	K	・	・	・	・	・	・	+	・	+	・	・	・												
ヤブツバキ																									
	B ₂	・	+	・	1.1	・	・	2.3	2.1	1.1	・	・	・												
	S	1.2	+	+	+	+	2.2	2.3	・	+	1.2	1.2	2.3												
	K	+	・	・	・	・	+	・	・	・	・	・	・												
アカガシ																									
	B ₁	・	3.2	・	・	・	・	2.2	・	・	・	3.2	・												
	B ₂	3.3	・	1.2	・	1.2	2.2	・	2.2	・	・	・	1.2												
	S	・	・	・	・	・	・	1.2	+	+	3.3	・	・												
テイカカズラ																									
	K	+ .2	1.2	2.2	+	+	2.2	2.3	+ .2	4.4	2.3	2.2	3.3												
	T	・	・	・	・	・	+	+ .2	1.2	・	+ .2	1.2	+ .2												
アオキ																									
	S	+	1.2	・	1.2	・	2.2	+	2.3	1.2	・	3.3	+ .2												
	K	+	・	・	+	+	+	+	+	+	+	+	+												
ペニシダ																									
	K	2.2	・	1.2	・	・	+ .2	2.2	・	2.2	+ .2	+	・												
イタビカズラ																									
	K	・	・	・	・	・	・	・	・	・	1.2	・	・												
	T	・	・	+	・	・	+	+	・	+	・	・	+												
ヒサカキ																									
	B ₂	・	1.2	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・												
	S	・	・	1.2	・	・	+ .2	+ .2	1.2	+ .2	2.2	3.3	+ .2												
	K	・	・	・	・	+	+	+	・	・	・	・	・												
ジャノヒゲ																									
	K	+	+	+ .2	+	・	・	+ .2	2.2	+	・	・	・												
ヤブラン																									
	K	+	+	・	+	・	・	・	・	・	・	・	・												
ジュズネノキ																									
	S	3.3	・	2.3	3.4	2.2	3.3	・	4.4	2.3	・	3.3	2.3												
	K	・	+	・	・	・	・	2.3	・	・	・	・	・												
イスビワ																									
	S	+	+	+	+	・	・	+	+	・	・	・	+												
	K	・	・	・	・	・	+	・	・	・	・	・	・												
トベラ																									
	B ₂	・	・	・	・	・	・	・	・	+	・	・	・												
	S	+	・	+	・	+	+ .2	+	+	+	+ .2	・	1.2												
	K	・	・	・	・	・	・	・	・	+	・	・	・												
ヤツデ																									
	S	・	+	・	・	・	・	・	+	・	・	・	・												
	K	・	・	+	・	・	・	・	・	・	・	・	・												
ホソバカナワラビ																									
	K	・	5.5	+ .2	・	・	・	+ .2	・	・	・	・	・												
オオバジャノヒゲ																									
	K	・	・	・	・	・	・	・	+	・	+	+ .2	・												
ヒイラギ																									
	S	+	・	+	・	・	1.2	・	・	・	・	+ .2	・												
	K	・	・	・	・	・	・	+	・	・	・	・	・												
随 伴 種																									
コバノガマズミ																									
	S	1.2	+	+	・	1.2	1.2	・	+	+	・	・	+												
	K	・	・	・	・	+ .2	・	+ .2	・	・	・	・	・												
カマツカ																									
	S	+	・	+	・	+	+ .2	・	+	・	・	+	+												
ミツバクアズミ																									
	T	・	・	+	・	+	+ .2	・	+	・	・	+	+												
コナラ																									
	B ₁	・	・	・	・	・	・	・	2.1	・	・	・	・												
	B ₂	・	・	1.2	・	1.2	・	・	・	・	・	・	・												
	S	+	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・												
	K	・	・	+	・	+	・	+	・	・	・	・	・												
ヤマツツジ																									
	S	・	・	・	・	1.2	+	・	・	+	+	+	+												
ヤブムラサキ																									
	S	+ .2	+ .2	+	・	+	+ .2	・	+	・	・	・	・												
アズマネザサ																									
	S	+	・	・	+	3.3	・	・	・	・	・	・	・												
	K	・	・	+	・	・	・	・	・	・	・	・	・												

表 3. タブーホソバカナワラビ群集組成表

逗子（神武寺）

調 査 番 号	G4	12
調 査 年 月 日	'67	'69
調 査 面 積	10.16	5.10
	(m×m)	
高木層の高さ及び植被率 (B ₁)	m/%	18/80
亜高木層の高さ及び植被率 (B ₂)	m/%	9/10
低木層の高さ及び植被率 (S)	m/%	5/70 2.5/30
草本層の高さ及び植被率 (K)	m/%	1/40 0.5/80
方 位 傾 斜		40°
出 現 種 数	54	34

タブーホソバカナワラビ群集標徴種			
タブ	B ₁	•	4.3
	S	1.2	2.3
ホソバカナワラビ	K	•	4.4
フウトウカズラ	T	•	+
群団標徴種			
ヒメユズリハ	S	•	+ .2
ジュズネノキ	S	•	1.2
キヅタ	T	1.2	•
ヤブニツケイ	S	•	2.2
ツルグミ	S	•	+ .2
イヌビワ	S	•	+ .2
	K	+	•
トベラ	S	•	1.2
ヤツデ	S	•	1.2
オーダー及びクラス標徴種			
アオキ	S	1.2	3.2
	K	+	•
テイカカズラ	K	2.2	+ .2
シロダモ	S	+ .2	•
	K	+ .2	•
ベニシダ	K	1.2	•
ヒサカキ	S	•	+
	K	•	+
スダジイ	B ₂	•	1.2
	S	+	+ .2
随伴種			
ヤブラン	K	2.3	+ .2
ナキリスゲ	K	+ .2	+ .2
ビナンカズラ	K	•	+
	T	+	•
ジュウモンジシダ	K	1.2	1.2
タマアジサイ	S	+ .2	•
	K	•	+ .2

1 回出現種

Aufn. Nr. G4 : ヤマノイモ T—+, ヤマシロギク K—+.2, シュンラン K—+, ミツバアケビ K—+.2, フジ T—+, マルバウツギ S—+, ムラサキシキブ S—1.1, エビネ K—+, メダケ S—+, モミジイチゴ S—+.2, ヤマグワ S—2.3, コチヂミザサ K—2.2, トコロ T—1.2, サンショウ S—+, アカメガシワ S—+, カラスザンショウ S—+, ミズキ S 1.2, K—+, ムクノキ S—+, リョウモンシダ K—2.2, ドクダミ K—+, クサギ K—4.4, ゴンズイ S—2.2, ヤマブキ S—1.2, タラノキ S—+, カキ S—+, スルデ S—+, タケノグサ S—+, サラシナショウマ K—+.2, ススキ K—2.2, ツユクサ K—+, ウマノミツバ K—+, フモトシダ K—1.2, ホトトギス K—+, ヒヨドリバナ K—2.3, タチツボスミレ K—+, イワガネソウ K—+, カラスウリ T—1.2, ノブドウ T—+, ヘクソカズラ T—+.2, フユイチゴ T—2.2, ツルニンジン T—+,

Aufn. Nr. 12 : アカガシ B₁—3.2, モチノキ B₂—2.1, ヤブコウジ K—+, イタビカズラ K—+, ジャノヒゲ K—+.2, ガマズミ K—+, ヘラシダ K—+.2, キツコウハグマ K—+, サルトリイバラ K—+, シケシダ K—+.2, オオバノイノモトソウ K—+.2, イワタバコ K—22, モミジイチゴ K—+, コモチシダ K—1.2, オカイボタ K—+.

表 4. ケヤキーイロハモミジ群集組成表

逗子（神武寺）

調 査 番 号		24
調 査 年 月 日		'69
		5.23
調 査 面 積	(m×m)	10×10
高木層の高さ及び植被率 (B ₁)	m/%	12/30
亜高木層の高さ及び植被率 (B ₂)	m/%	8/40
低木層の高さ及び植被率 (S)	m/%	3/60
草木層の高さ及び植被率 (K)	m/%	0.7/30
方 位 傾 斜		N10°
出 現 種 数		42

ケヤキ	B ₁	2.2
イロハモミジ	B ₁	1.2
	B ₂	3.2
スダジイ	B ₁	1.1
	K	+ .2
カヤ	B ₁	2.2
	K	+
イヌビワ	B ₂	1.1
	S	+
ヒサカキ	B ₂	1.1
カマツカ	B ₂	1.1
	S	+
シロダモ	S	+
	K	+
アオキ	S	3.3
	K	+ .2
ヒイラギ	S	1.1
サンショウ	S	1.1
ウグイスカグラ	S	2.1
	K	+
カクレミノ	S	+
ツルグミ	S	+
エンコウカエデ	S	+
ゴンズイ	S	+
ムラサキシキブ	S	+
ガマズミ	S	+
ヤブニツケイ	S	1.2
オオバジャノヒゲ	K	+
コバノガマズミ	K	+
イヌマキ	K	+
テイカカズラ	K	2.2
	T	2.2
キヅタ	K	1.2
ヤブコウジ	K	+
ハウチャクソウ	K	+
ジャノヒゲ	K	+
ホソバカナワラビ	K	1.2
ヤマノイモ	K	+
ジュズネノキ	K	2.2
シャガ	K	1.2
シケシダ	K	+
ナルコユリ	K	+
ドクダミ	K	+ .2
イワガネソウ	K	+
ムクノキ	K	+
イノデ	K	+
キチジョウソウ	K	+
ミツバアケビ	K	+
	T	+
フウトウカズラ	K	+ .2
ツボスミレ	K	+
スイカズラ	S	1.1

表 5. 二次林（コナラ林）

逗子（神武寺）

調 査 番 号		14	16	15	19	G5
調 査 年 月 日		'69 5.10	'69 5.10	'69 5.10	'69 5.10	'67 10.16
調 査 面 積 (m×m)		15×10	10×10	10×12	15×10	10×10
高木層の高さ及び植被率（B ₁ ） m/%						
亜高木層の高さ及び植被率（B ₂ ） m/%		7/90	10/90	8/80	10/80	8/70
低木層の高さ及び植被率（S） m/%		2.5/30	4/30	2.5/30	3/30	3/30
草本層の高さ及び植被率（K） m/%		0.5/20	0.5/20	0.5/10	0.5/30	0.8/50
方 位 傾 斜		S E 10°	W 30°	NW 30°	W 20°	NW 25°
出 現 種 数		34	41	34	50	49
二次林的要素						
コナラ	B ₂	2.3	3.3	2.3	3.3	1.2
	K	+	•	•	•	+
ヤマツツジ	S	+.2	1.2	+.2	+	1.2
コバノトネリコ	B ₂	2.3	•	+.2	•	1.2
	S	+	+	•	1.2	•
アズマネザサ	S	3.3	1.2	+.2	+	3.3
ヤマノイモ	T	•	+	+	+	+
ツクバネウツギ	S	•	1.2	•	1.2	2.3
カマツカ	S	•	+	•	1.2	+.2
クリ	B ₂	1.2	•	+.2	•	•
ヤマザクラ	S	1.2	2.2	+	•	•
ヒカゲスゲ	K	+.2	•	•	+.2	•
コウヤボウキ	K	+	•	•	•	+
ヤマウルシ	K	•	•	•	+	•
ヤマシロギク	K	•	•	•	+	•
シイータブ林要素						
スダジイ	B ₂	3.4	1.2	3.3	2.3	2.2
	S	2.3	+	2.2	2.3	•
アオキ	S	•	2.3	+	+.2	1.1
	K	+	•	•	•	•
ヤブツバキ	B ₂	•	•	2.2	•	•
	S	1.1	•	•	+	1.2
	K	•	+	+	+	•
ウラジログシ	B ₂	2.2	2.3	1.2	1.2	1.2
	S	•	+.2	•	+	•
	K	•	+	•	•	•
テイカカズラ	K	3.3	3.3	2.2	3.3	3.3
ヒサカキ	S	1.2	+.2	1.2	+.2	+
コバノガマズミ	S	+.2	1.2	+	+	•
	K	+	•	+	•	+
アカガシ	B ₂	•	•	2.2	3.3	•
	S	•	•	•	+	2.2
	K	+.2	•	•	+	+
ヤブコウジ	K	•	+.2	+	1.2	+
ベニンダ	K	+	+.2	•	+	+
ジャノヒゲ	K	+	+	+	+.2	•
アラカシ	B ₂	•	•	•	•	+
	S	1.2	+.2	1.2	•	•
	K	•	+	•	•	+
ヒイラギ	S	•	•	+	+	+
	K	+	•	•	•	•
モチノキ	B ₂	•	•	1.1	•	•
	S	•	+.2	•	2.2	•
シュンラン	K	+	+.2	•	•	+
ジュズネノキ	S	+.2	+	•	•	+.2
トベラ	B ₂	•	•	1.2	•	•
	S	•	•	•	1.2	+.2
シロダモ	S	•	+.2	•	•	•
イヌガヤ	S	•	+	•	•	•
キヅタ	K	•	+.2	•	•	•
ツルグミ	K	•	•	•	+	•
イヌマキ	S	•	•	+	+	•
	K	•	•	+	•	•
イヌビワ	K	•	•	•	+	+
ヤツデ	K	•	•	•	+	•
カクレミノ	S	•	+.2	•	•	•
ヒメユズリハ	K	•	•	+	•	•
ヤブニツケイ	K	•	•	•	•	+
随伴種						
ミツバアケビ	K	+	•	•	•	+
	T	•	+	•	+	+
キッコウハグマ	K	+.2	+	+	•	+
ヤブムラサキ	S	•	+.2	•	+	+
ノイバラ	S	+	•	•	•	•
	K	•	•	•	+	+
サルトリイバラ	K	•	•	•	•	+
	T	+	+	•	•	•
オオバウマノスズクサ	T	+	•	+	•	+
カンアオイ	K	•	+.2	+	•	+.2
イタビカズラ	K	•	•	•	+	•
	T	•	+	•	+	•
ウグイスカグラ	S	2.3	•	+	•	•
ウツギ	S	+	•	•	•	•
	K	•	•	•	+	•
イチヤクソウ	K	+.2	•	•	•	+
	S	•	•	•	•	+
マユミ	K	+	•	•	•	•
	K	+	•	•	•	•
ナツフジ	T	•	+	•	•	•
	T	•	+	•	•	•
マルバウツギ	S	•	+	•	•	•
ミツバツツジ	S	•	+	•	+	•
コマユミ	S	•	+	•	+	•
ホウチャクソウ	K	•	+	•	+	•
スハマソウ	K	•	+.2	•	•	+
ハナイカダ	S	•	•	+.2	•	+.2
ムラサキシキブ	S	•	•	+	+	•
ハリギリ	S	•	•	+	+	•
キブシ	S	•	•	•	•	+
	K	•	•	+	•	•
コチヂミザサ	K	•	•	•	+	+
トコロ	T	•	•	•	+	+.2

1 回出現種
Aufn. Nr. 14：ゴンズイSー+, モツコクKー+, Aufn. Nr. 16：カヤSー+, ナキリスゲKー+, クマヤナギKー+, Aufn. Nr. 15：サカキSー+, イヌツゲSー+.2, エビネKー+, Aufn. Nr. 19：ガマズミSー+.2, ヤブランKー+, ソヨゴB₂ー1.2, メダケSー+.2, モミジイチゴSー+, ヤマグワSー+, シケシダKー+, エンコウカエデKー+, ビナンカズラTー+.2, ハンショウズルTー+, 'Aufn. Nr. G5：イタヤカエデB₂ー3.3, Kー+, マンリョウKー+, イヌザンショウSー+, モミSー+, ヒメカンスゲKー+.2, アブラチャンKー+, ネムノキKー+, ミゾシダKー+, ゼンマイKー+, ミヤマウズラKー+,

表 6. スギ・ヒノキ植林

逗子（神武寺）

調 査 番 号		25	26	G13	21
調 査 年 月 日		'69	'69	'67	'69
調 査 面 積	(m×m)	5.23	5.24	10.16	5.10
高木層の高さ及び植被率	m/%	10×10	10×10	20×20	20×20
亜高木層の高さ及び植被率	m/%	•	25/40	25/40	30/60
低木層の高さ及び植被率	m/%	10/20	8/30	12/30	10/40
草本層の高さ及び植被率	m/%	5/30	3/70	4/50	3/30
方 位 傾 斜		1/100	0.7/70	0.8/50	1/80
出 現 種 数		S E 30°	S E 30°	S E 30°	S W 30°
		34	38	42	31

植林

スギ	B ₁	•	3.3	3.3	4.3
	B ₂	2.2	•	•	•
ヒノキ	B ₂	2.2	•	•	•
	S	2.2	•	•	•

タブ林要素

フウトウカズラ	K	•	•	2.2	+ .2
	T	2.2	+ .2	+	+
タブ	S	•	1.1	+	1.2
ジュウモンジシダ	K	2.1	3.3	+	+
イノデ	K	+	•	1.2	•
ホソパカナワラビ	K	•	3.3	+	4.4
イズセンリョウ	S	•	•	+	+ .2
イワガネソウ	K	+ .2	+	•	•
オオバノイノモトソウ	K	+	+ .2	+	+ .2
ハナミョウガ	K	•	+ .2	2.2	2.3

シイ林要素

モチノキ	S	•	+	+	•
ヤブラン	K	•	•	+	+ .2

シイ，タブ林構成種

ジュズネノキ	S	•	•	+	+ .2
イヌビワ	B ₂	•	•	•	1.2
	S	•	2.2	2.2	•
	K	+	+ .2	•	•
ヤブニッケイ	B ₂	•	1.1	•	•
	S	•	•	+	•
イヌマキ	B ₂	•	•	3.2	•
	K	•	•	+	•
キツタ	K	1.2	•	•	•

ヤブツバキクラス自然林要素

アオキ	S	1.2	2.2	3.3	3.3
	K	•	2.2	•	•
テイカカズラ	K	1.2	+	+	+ .2
	T	+ .2	•	•	•
シロダモ	B ₂	•	2.1	•	2.2
	S	•	•	1.2	•
ヤブツバキ	S	•	•	1.2	•

随伴種

ベニシダ	K	+ .2	+ .2	2.2	•
ヒサカキ	S	•	+	+	+
コチヂミザサ	K	•	+	+	+
トコロ	K	•	•	•	+
	T	•	+	+	•
ムクノキ	B ₂	•	1.2	•	3.3
ハゼノキ	B ₂	•	+	+	•
	S	•	•	•	+
リョウメンシダ	K	3.3	•	2.2	4.4
ドクダミ	K	1.2	+ .2	•	2.3
カラムシ	K	4.4	+	1.2	+ .2
シャガ	K	2.1	+ .2	•	+ .2
ニワトコ	K	+	+	•	+
アズマネザサ	K	•	1.1	•	+ .2
ヘラシダ	K	+	•	+	•
マルバウツギ	S	+	•	•	•
	K	•	+	•	•
ホウチャクソウ	K	+ .2	+	•	•
キツネササゲ	K	+	•	•	•
	T	•	•	+	•
タマアジサイ	S	•	•	+	2.2
オニタビラコ	K	+ .2	•	•	+
キジノオンシダ	K	•	+	•	+

1 回出現種

Aufn. Nr. 25 : ヤマグワK—+, ジャノヒゲK—+, ミツバアケビT—+, カンアオイK—+, ナルコユリK—+, ミツバK—+, ウラシマソウK—+, ミズヒキK—+ .2, イチゴツナギK—+ .2, ヒカゲスゲK—+ .2, エビヅルK—+ .2, カラムシK—+ .2, Aufn. Nr. 26 : ウラジロガシS—+, イタバカズラK—+, オオバウマノスズクサT—+, クマガイソウK—+, ハエドクソウK—+, ハンショウヅルT—+, タブ B₂—1.1, ガマズミ S—+, イズセンリョウK—+, コケの一種K—+, Aufn. Nr. G13 : ビナンカズラK—+, アカガシ B₂—1.1, ヤブムラサキS—+, ヤツデS—+, クスノキB₁—1.1, エノキS—+, コアソクK—+, キブシS—+, マンリョウS—+, クサギS—1.2, フモトシダS—3.3, カラスウリT—+, フェイチゴK—+ .2, Aufn. Nr. 21 : シケンシダK—+ .2, シュロB₂—+, アカメガシワB₂—1.1.

表 7. ススキーアズマネザサ群落組成表
逗子（神武寺）

調 査 番 号	22
調 査 年 月 日	'69 5.17
調 査 面 積 (m×m)	7×5
草本層の高さ及び植被率 m/%	0.7/60
出 現 種 数	23
ススキ	2.2
アズマネザサ	4.3
イチゴツナギ	2.1
ナツフジ	+ .2
クズ	+ .2
ウラハグサ	+ .2
トボンガラ	+ .2
ネコハギ	+ .2
キハギ	+ .2
オニタビラコ	+
ヒメジョオン	+
サルトリイバラ	+
コナラ	+
コウヤボウキ	+
アオカモジグサ	+
ヘクソカズラ	+
コゴメウツギ	+
オオバコ	+
ハルノノゲン	+
マルバウツギ	+
アキノキリンソウ	+
ウツギ	+
クサイチゴ	+ .2

表 8. マント群落組成表

埴子 (神武寺)

調 査 番 号		G10
調 査 年 月 日		'67 10.16
調 査 面 積 (m×m)		2×10
低木層の高さ及び植被率 (S) m/%		3/40
草本層の高さ及び植被率 (K) m/%		0.8/30
		80
方 位 傾 斜		SW 15°
出 現 種 数		62
マユミ	S	1.2
モミジイチゴ	S	+ .2
アズマネザサ	S	2.2
ヌルデ	S	+
ガマズミ	S	+
ヤマグワ	S	+ .2
キブシ	S	+
マルバウツギ	S	+ .2
キハギ	S	+
ニワトコ	S	+
アオキ	S	+
ヤブムラサキ	S	+
エノキ	S	1.2
アカガシ	S	+
タラノキ	S	+
ミズキ	S	+
アカメガシワ	S	1.2
イボタ	S	+
クサイチゴ	K	+
カラムシ	K	+
ヤクシソウ	K	+
ノアザミ	K	+
ヤマシロギク	K	+ .2
ヒナタイノコズチ	K	+
ツユクサ	K	+ .2
ウド	K	+
ゲンノショウコ	K	+
ヨモギ	K	+
オカトラノオ	K	+
ノコンギク	K	+ .2
コチヂミザサ	K	+ .2
フモトシダ	K	+
ジャノヒゲ	K	+
サラシナショウマ	K	+
アキノノゲシ	K	+
アメリカセンダングサ	K	+ .2
イヌコウジュ	K	+
オオアレチノギク	K	+
ダンドボロギク	K	+
イヌホウズキ	K	+
ヒヨドリジョウゴ	K	+
チカラシバ	K	+
カラスザンショウ	K	+
エノキグサ	K	+
タケニグサ	K	+
クズ	T	3.4
トコロ	T	1.2
ナツフジ	T	+ .2
アカネ	T	+
スイカズラ	T	+
ヘクソカズラ	T	+ .2
オオバウマノスズクサ	T	+
エビヅル	T	+ .2
テイカカズラ	T	1.2
ミツバアケビ	T	+ .2
キヅタ	T	+
カラスウリ	T	+
サルナシ	T	+
ノブドウ	T	+
ビナンカズラ	T	+ .2
ハンショウズル	T	+
サルトリイバラ	T	+

あ と が き

本市において、文化財保護条例が施行されましたのは、昭和43年4月1日であります。他都市の殆んどが条例施行を終り、すでに多くの調査報告書を刊行している現状に比べ感無量なるものがあります。

文化財保護法が制定され、わが国の文化財保護の諸事業も年々発展しているとは申せ、この反面滅失の事故も跡をたちません。

特に急速な都市化をする地域は文化財の保存に緊急な問題をかかえております。

おくればせながら本市も第1回文化財調査報告書を、ここに刊行する運びになりました。この報告書の調査執筆をされた、貫 達人、赤星直忠、宮脇 昭、三山 進、関口欣也の諸氏（本市文化財保護委員）の御努力に対し深い敬意を表するとともに、この調査に協力いただきました関係者各位に厚く御礼申し上げます。

今後市内の文化財につき、次々に調査、報告書を刊行致す予定であります。市民の皆様の文化財に対する御理解と、保存保護についての御協力を御願いたします。

社会教育課長 君 島 安 正

昭和45年 3 月20日 印刷

昭和45年 3 月31日 発行

平成 7 年 3 月31日 2 刷

逗子市文化財調査報告書第1集

神 武 寺

編 集 逗 子 市 教 育 委 員 会
発行者 川崎市中原区新丸子東2-925
印刷所 野崎印刷紙器株式会社

© 逗子市教育委員会 1995